

CHODA SITE

March, 2014

丁田遺跡Ⅲ
—宅地造成工事に伴う発掘調査—

平成二十六年三月

彦根市教育委員会

丁田遺跡Ⅲ

—宅地造成工事に伴う発掘調査—

平成26年3月

彦根市教育委員会

丁田遺跡Ⅲ

—宅地造成工事に伴う発掘調査—

2014



1 調査区全景（東から）



2 調査区全景（西から）

巻頭図版 2



1 6区全景（西から）



2 SB01 (SP39) 掘立柱建物柱穴（北から）



3 SP47土師器焼成土坑（西から）



SD09区画溝（南から）

巻頭図版 4



1 SD09区画溝 (南東から)



2 SD09区画溝 土層断面 (南から)

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が、民間の宅地造成工事に伴い、平成24年12月5日から平成25年3月28日にかけて実施した、丁田遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
整理調査については、平成25年4月10日から平成26年3月にかけて行った。
2. 本調査の調査地は、彦根市高宮町字樋ノ詰1646番、1647番、1648番、1650番、1651番、1652番、1653番、1654番、字中澤1381番6、1381番7に位置する。
3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。
教育長：前川 恒廣
文化財部長：入江明生 文化財部次長(兼文化財課長)：西田哲雄
課長補佐：久保達彦
史跡整備係長：北川恭子 文化財係長：木戸洋平
主査：深谷 覚 主査：池田隼人
副主査：三尾次郎 主任：森下雅子
主任：林 昭男 主任：戸塚洋輔
主任：下高大輔 技師：田中良輔
臨時職員：佃 昌幸
4. 現地調査・整理調査は戸塚が担当し、以下の諸氏が参加した。
現地調査：赤田 隆 阿部修平 今井由美子 岡田ひとみ 小林良夫
左近健一朗 佐渡 宏 高橋時子 西村 薫 森谷義男(作業員)
久保亮二(調査補助員) 大西 遼 北森 光(滋賀県立大学学生)
整理調査：佃 昌幸(臨時職員) 岡田ひとみ 高橋時子(作業員)
大西 遼 北森 光 荘林 純(滋賀県立大学学生)
5. 本書で使用した遺構実測図は、久保亮二、佃 昌幸、大西 遼、北森 光、戸塚が作成し、遺物実測図と拓本については、佃 昌幸、大西 遼、北森 光、戸塚が作成した。
遺構と遺物の写真撮影は、調査担当者が行った。
6. 現地調査及び本書の作成にあたり、以下の方々からの助言・協力を得た。
小島孝修 神保忠宏 福西貴彦
7. 本書の執筆及び編集は、戸塚洋輔が行った。
8. 本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。
9. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。
10. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
土師器 須恵器 陶器

目 次

卷頭図版 例言

第1章 序 論

1 調査に至る経緯と経過	1
2 地理的・歴史的環境	5
(1) 地理的環境	5
(2) 歴史的環境	5

第2章 調査成果

1 基本層位	9
2 縄文時代	10
(1) 概 要	10
(2) 竪穴建物・土坑	10
(3) 遺構・包含層出土遺物	10
(4) 小 結	10
3 奈良時代～平安時代前期	17
(1) 概 要	17
(2) 竪穴建物	17
(3) 掘立柱建物	18
(4) 柵	23
(5) 土坑・小穴	23
(6) 溝	30
(7) 土坑・小穴・包含層出土遺物	39
(8) 小 結	39
4 平安時代以降	41
(1) 概 要	41
(2) 掘立柱建物	41
(3) 井 戸	41
(4) 小 穴	41
(5) 畦畔・畝状遺構	42
(6) 小穴・包含層出土遺物	42
(7) 小 結	47

第3章 総括

1 縄文時代の集落	51
(1) 集落の様相	51
(2) 今後の課題	51
2 犬上郡における丁田遺跡の位置	52
(1) はじめに	52
(2) 古代集落の変質	52
(3) 犬上川右岸の古代集落	52
(4) 犬上郡の郡衙遺跡	53
(5) 犬上郡高宮郷と丁田遺跡	62

出土遺物観察表

図版

報告書抄録

第1章 序 論

1 調査に至る経緯と経過

丁田遺跡の3次調査区は、彦根市高宮町字樋ノ詰1646番、1647番、1648番、1650番、1651番、1652番、1653番、1654番、字中澤1381番6、1381番7に位置する。太田川と国道8号線が交差する地点の北東にあたり、調査地の周辺には、もともと田地が広がっていたが、近年、宅地開発が進んでいるところである。

3次調査区の西側では、彦根市による浸水対策下水道工事(高宮新川第1排水区)に伴い、第1次調査が平成20年6月16日～平成20年7月10日にかけて行われた。その東の隣接地では、宅地造成に伴って平成21年12月21日～平成22年2月26日にかけて第2次調査が行われた。遺跡の内容は長らく不明であったが、縄文時代中期末と奈良・平安時代を中心とする複合遺跡であることが明らかになっている。第2次調査において縄文時代中期末の埋設土器から出土した翡翠大珠は、県内初の出土例であり、特筆されよう。縄文時代の稀少な装身具である大珠は、湖東地域の縄文社会を考えるうえで重要な遺物であり、彦根市指定文化財に指定されている。大珠の出土が示すように、丁田遺跡は、湖東地域の拠点的な集落であったとみられる。奈良・平安時代においては、7世紀後半から8世紀前半の竪穴建物からなる一般集落が、8世紀後半には、掘立柱建物を中心とする集落へ変化している。規模が大きく、規格性の高い建物が含まれていることから、官衙に関わる建物である可能性が指摘されている。

今回の3次調査は、民間の宅地造成工事に先立ち提出された文化財保護法第93条の届出及び調査依頼にもとづく緊急発掘調査である。平成24年10月24～25日、開発面積6,105.99㎡を対象として、遺構の有無を確認するために試掘トレンチ23箇所を設定して試掘調査を行った。その結果、開発対象地の北端を除き、対象地の大半に該当するトレンチ20箇所で見つかり、遺構と遺物を確認するにおよび、開発に先立ち発掘調査を実施する必要性が指摘された。したがっ

表1 丁田遺跡における発掘調査

調査番号	調査時期	調査主体	主な時代	文献
1次	2008年6月～2008年7月	彦根市教育委員会	奈良・平安	1
2次	2009年12月～2010年2月	彦根市教育委員会	縄文・奈良・平安	2
3次	2012年12月～2013年3月	彦根市教育委員会	縄文・奈良・平安	本書

文 献

- 彦根市教育委員会 2009『丁田遺跡Ⅰ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第43集
- 彦根市教育委員会 2011『丁田遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集

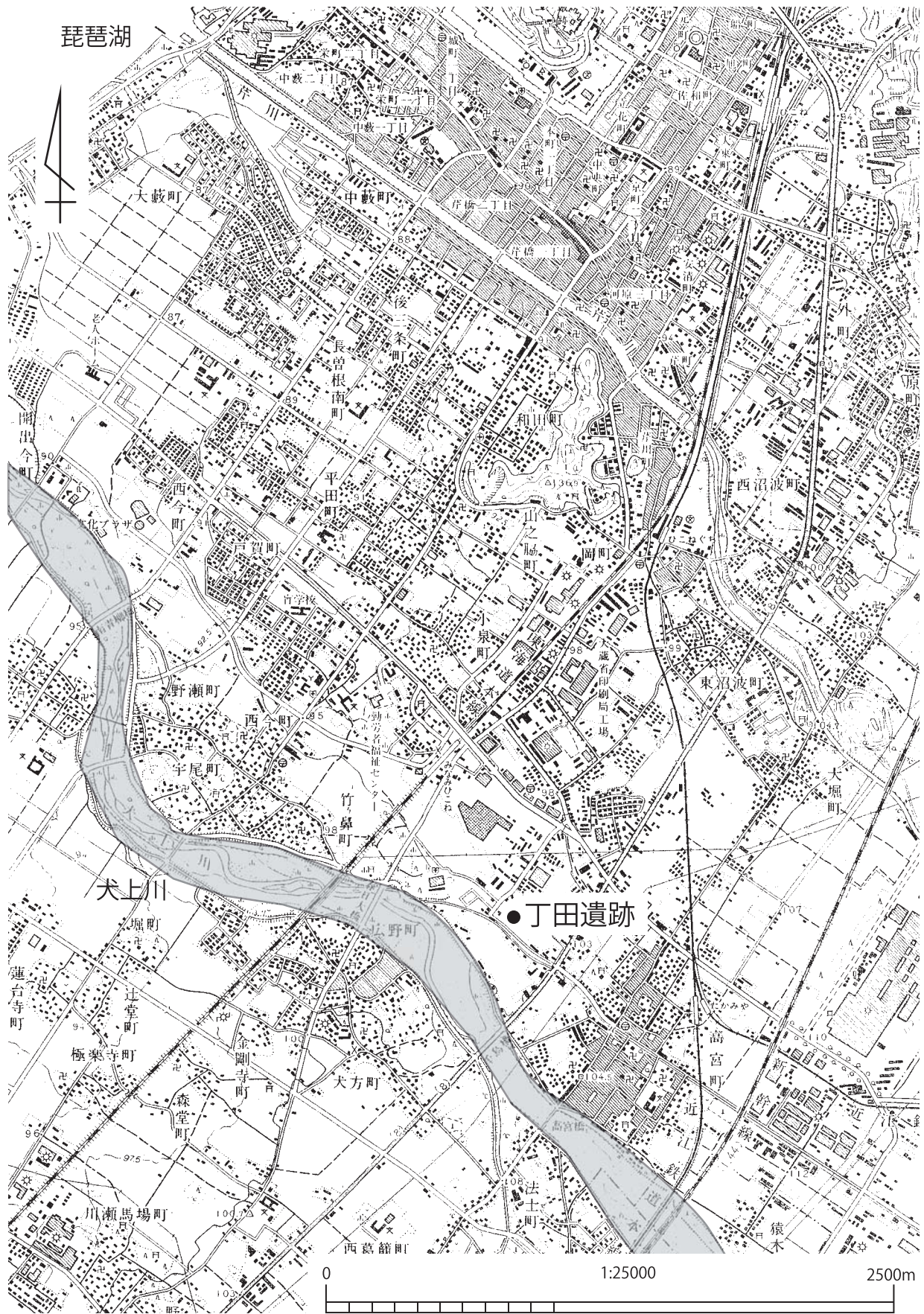


図1 丁田遺跡の位置

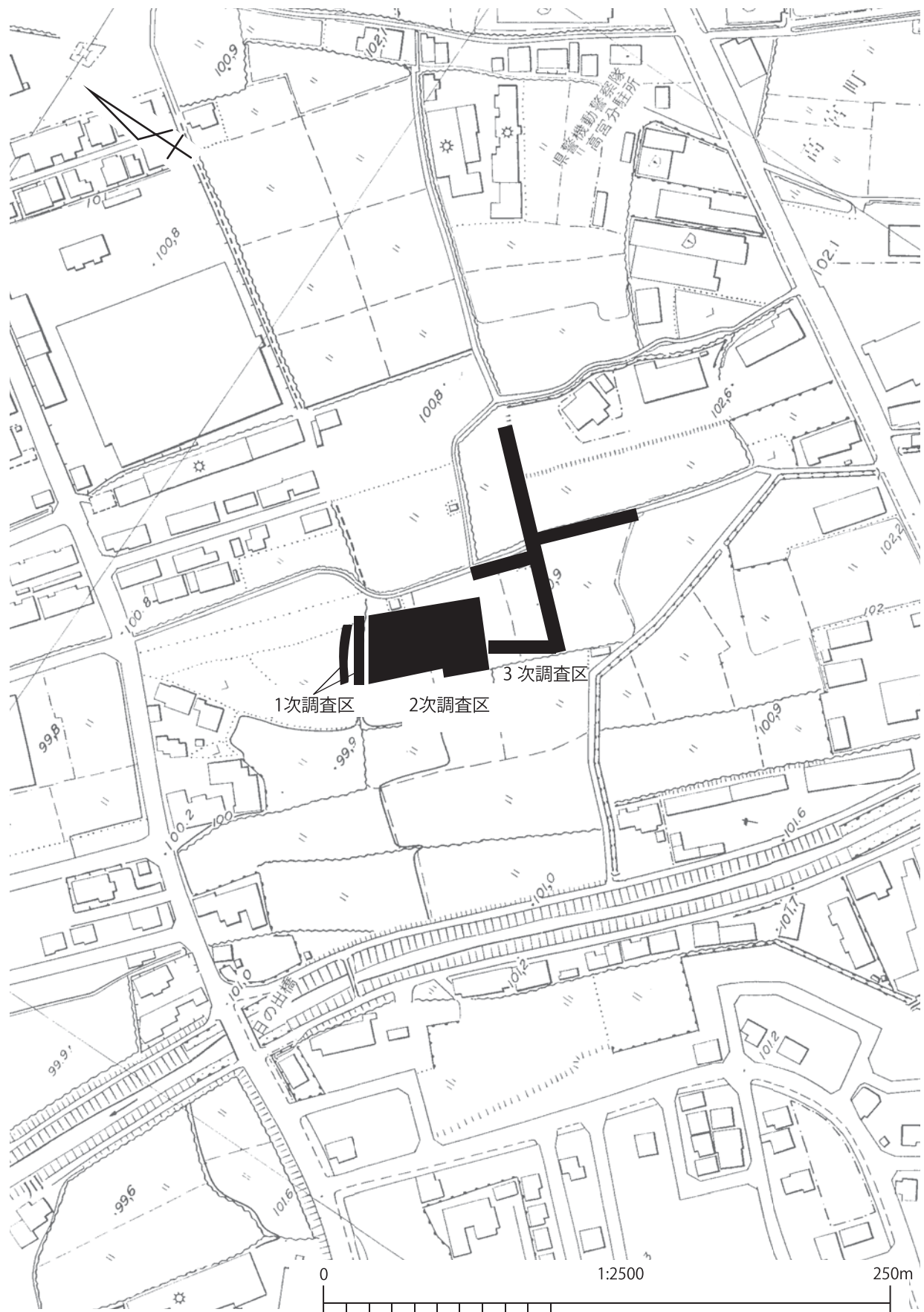


図3 調査区の位置

て、協議を経て、工事のために遺構の現状保存が不可能な道路敷の範囲を対象として、平成24年12月5日～平成25年3月28日まで、本発掘調査として現地調査を実施した。調査面積は、1,324㎡である。降雪の多い季節で、調査期間中、積雪のためにあわせて14日間程度の調査を実施できない日があった。その後、平成25年4月～平成26年3月にかけて整理作業を行い、本報告書の刊行となった。

2 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

高宮町は、彦根市のほぼ中央、犬上川の右岸に位置する。犬上川は、芹川、宇曾川とともに、洪水による堆積によって、彦根市域の平野部を形成しており、滋賀県においても有数の扇状地帯を形成している。犬上川の源流は、遠く鈴鹿山脈の鈴ヶ岳から発し、彦根市一帯の湖東平野の東縁の山地は、標高300～400m程度のなだらかな山並である。また、犬上川流域では、河岸段丘を形成しながら、犬上郡多賀町の榑崎周辺を扇頂として西北方向に広がる扇状地が形成されている。扇状地の末端付近にはいくつもの湧水があり、下流の水田の重要な水源となっている。

丁田遺跡は、こうした扇状地の末端部に近接した氾濫平野に位置する。縄文時代の集落は、犬上川によって形成された氾濫平野に隣接する自然堤防の微高地上に居住地が立地する。古代から中世にかけての微地形も縄文時代の様相をほぼ踏襲するが、低位面に土壌の堆積が進み、開発可能な土地が拡大されたものと考えられる。

(2) 歴史的環境

縄文時代 芹川の扇状地では、縄文時代晩期から遺跡が確認され、大岡遺跡では縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が出土し、久徳遺跡では縄文時代晩期の土器棺墓が検出されている。土田遺跡では、土器棺墓からなる後期・晩期の墓域が検出されている。また、犬上川流域で最も古い遺物は、福満遺跡から出土した縄文時代前期末の大歳山式土器である。福満遺跡は、犬上川流域のなかでも琵琶湖に近い水の豊富な沖積地の微高地上に位置し、縄文時代中期の様相は不明瞭であるが、後期から晩期にかけて集落が展開する。福満遺跡の東に位置する丁田遺跡では、竪穴建物と埋設土器が検出され、中期末の集落の存在が明らかとなった。墓の可能性のある埋設土器の中からは、翡翠大珠が出土している。縄文時代の稀少な装身具である翡翠大珠は、北陸地方から流通したものと考

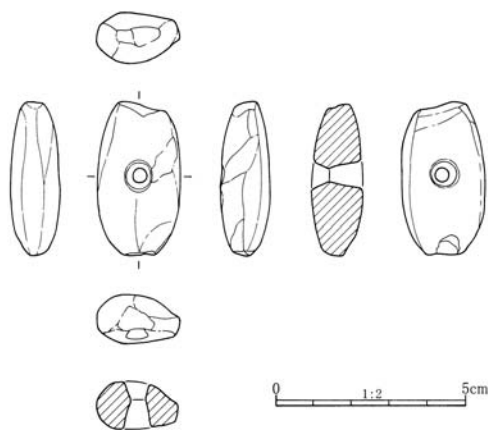


図4 丁田遺跡2次調査出土 翡翠大珠

えられ、湖東地域と北陸地方との関係や湖東地域の縄文社会を考えるうえで重要な遺物である。

弥生時代 弥生時代前期・中期の遺跡の様相をみると、犬上川右岸の竹ヶ鼻廃寺遺跡において弥生時代前期の土器が出土し、芹川流域の下沢遺跡では遠賀川系土器と柴山出村式土器を用いた弥生時代前期の土器棺墓が検出されている。一方、犬上川左岸の荒神山麓においては、稲里遺跡で弥生時代前期の集落が、妙楽寺遺跡で弥生時代前期末～中期前半の集落が調査されている。川瀬馬場遺跡では、弥生時代中期中葉から後半の集落が調査されている。これらの遺跡は、扇状地の扇端より下流の氾濫平野など低湿地に位置している。弥生時代後期の集落としては、宇曾川流域の妙楽寺遺跡が知られる。

弥生・古墳移行期 犬上川右岸の福満遺跡、品井戸遺跡と左岸の堀南遺跡が知られ、その多くは、扇状地より湖岸側に位置する。福満遺跡では、集落と方形周溝墓域が検出され、品井戸遺跡と堀南遺跡においても、同様に方形周溝墓域が検出されている。福満遺跡では、北陸系土器、S字状口縁台付甕を含む庄内式併行期の土器が出土し、北陸地方や濃尾平野とも強い関係をもっていたことが想定される。芹川流域では、沖積地に位置する下沢遺跡で方形周溝墓が検出されている。芹川の扇状地の扇中央部に位置する木曾遺跡では、庄内式併行期から布留式期の集落が営まれ、布留式期の竪穴建物からは、珠文鏡の破鏡が出土している。

古墳時代 古墳時代になると、前期末には、琵琶湖岸に近い荒神山丘陵の稜線上に荒神山古墳が築かれる。全長124mの前方後円墳で、大津市膳所茶臼山古墳とほぼ同形・同大である。膳所茶臼山古墳とともに、琵琶湖における水運を担った有力な被葬者が埋葬されたのであろう。古墳時代後期には、同じ荒神山丘陵に横穴式石室を埋葬施設とする荒神山古墳群が築かれる。現在、30基以上の古墳が確認されている。荒神山王谷1号墳の横穴式石室の玄室は、やや寸詰まりのプランで、持ち送り技法によって構築され、天井石は一石である。ドーム状を呈し、渡来系氏族との関わりが強い。福満遺跡では、円圈文をもつ子持勾玉が出土しており、こうした子持勾玉は日本海側や韓半島においても出土していることから、韓半島と日本列島との交流を示す遺物として注目できる。これらの横穴式石室や子持勾玉からは、犬上川流域において渡来系氏族が定着した様子がうかがわれる。福満遺跡の付近には、「椿塚」という藪があり、石室が発見されて須恵器が出土したと伝わり、古墳が存在した可能性が高い。芹川流域の木曾遺跡においても、渡来系氏族との関連が推定される古墳時代後期の大壁造建物が検出されている。また、芹川流域では鞍掛山遺跡、正法寺古墳群において中期・後期古墳が構築されている一方、琵琶湖岸の松原内湖遺跡では、須恵器と耳環を副葬した古墳時代後期の土壙墓が確認され、その東に南北に伸びる佐和山丘陵においても後期古墳である磯山の諸古墳、埋塚古墳、千代神社裏山古墳が確認されている。

奈良・平安時代 犬上川流域の白鳳寺院としては、高宮廃寺、竹ヶ鼻廃寺、八坂廃寺が知られる。丁田遺跡の北方に位置する高宮廃寺では、高宮町小字「遊行塚」に塚状の高まりがあり、それが鎌倉時代の遊行上人が建治3年（1277）に巡錫回向した遊行塚であったと伝わ

る。礎石もみつまっているが、塚状の高まりとともに現存しない。白鳳時代の瓦も出土し、古代寺院であったと考えられている。丁田遺跡の北東に位置する鳥籠山遺跡では、瓦と須恵器とともに焼成した窯跡が検出され、藤丸遺跡では奈良時代の掘立柱建物と竪穴建物からなる集落が確認されている。また、丁田遺跡周辺では犬上郡の下部単位である高宮郷が、大堀町付近には駅家郷が存在していたことが推定されている。壬申の乱（672年）の古戦場である鳥籠山は、藤丸遺跡の北方の鞍掛山に比定され、その周辺は東山道鳥籠駅に比定されている。東山道は鞍掛山と亀甲山との間を通り、東山道はこの付近から、鳥籠駅の前駅である清水駅の比定地である東近江市清水鼻付近へのびており、その間の甲良町尻子西遺跡では実際に道路遺構が検出されている。東山道は、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東、丁田遺跡の南西に位置し、竹ヶ鼻廃寺遺跡では白鳳時代から奈良時代の瓦が出土し、白鳳時代以降の寺院跡と考えられている。奈良・平安時代になると、品井戸遺跡、竹ヶ鼻廃寺遺跡、福満遺跡、丁田遺跡、藤丸遺跡、法土南遺跡では、掘立柱建物と竪穴建物からなる集落が営まれるが、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、奈良時代後半に寺院を廃して大型の掘立柱建物群や柵列が設置されており、円面硯や銅匙も出土し、犬上郡衙の有力な比定地とされている。東側に位置する品井戸遺跡では石帯が出土し、竹ヶ鼻廃寺遺跡と品井戸遺跡は、古代の犬上郡において中心的な位置を占めていたものと考えられる。8世紀後半には、こうした集落の動向と対応するように、丁田遺跡では、竪穴建物からなる集落から掘立柱建物を中心とする集落へ変化し、集落の変遷において画期が認められる。

鎌倉・室町・戦国時代

犬上川の河口左岸に位置する八坂東遺跡では、12世紀前半～13世紀前半の掘立柱建物、井戸、溝が検出され、土師器、山茶碗、輸入陶磁器が出土している。八坂には八坂荘があり、琵琶湖を介した広域な商業活動が行われていたことがうかがわれる。荒神山の北東に位置する妙楽寺遺跡では、平安時代末～鎌倉時代、室町時代、15世紀末～16世紀後半、16世紀末の各時期の遺構が検出されている。鎌倉時代～室町時代にかけては、掘立柱建物、井戸、溝で

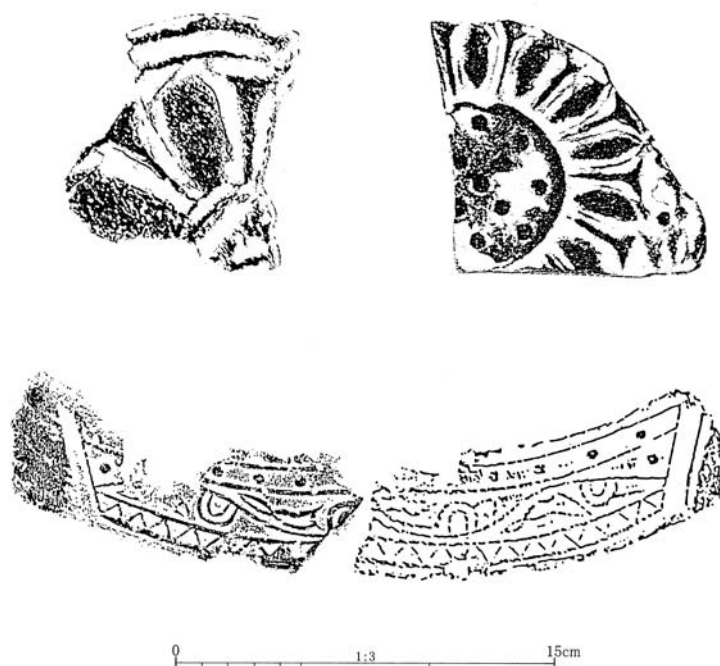


図5 高宮廃寺出土 軒丸瓦・軒平瓦

構成される集落である。15世紀末～16世紀末になると、条里に沿って道路と水路が縦横に整然と区画された地割りが顕著となり、掘立柱建物の立ち並ぶ屋敷地が形成される。一方、宇曾川の対岸、荒神山の麓に位置する古屋敷遺跡では、14世紀～16世紀中頃の遺構が検出され、16世紀中頃には、石組溝と道路、土塁によって区画割りされ、掘立柱建物からなる屋敷地が形成される。妙楽寺遺跡と古屋敷遺跡では、ともに整然とした屋敷地がみられ、琵琶湖と宇曾川の水運によって繁栄した様子がわかる。

東山道から多賀大社へのびる「多賀道」が分岐する高宮の集落では、集落中心部の東寄りにある高宮小学校・高宮幼稚園に高宮城跡が存在した。高宮城跡は、鎌倉時代から戦国時代に当地を支配した高宮氏の居城で、これまでに高宮小学校の体育館増築工事と校舎建て替え工事、高宮幼稚園の改築工事と増築工事に伴い4次にわたる発掘調査が行われている。堀、土塁、掘立柱建物、柵が検出された。青磁碗などの輸入陶磁器、土師器皿、天目茶碗や播鉢などの瀬戸美濃産施釉陶器が出土し、13～16世紀を中心とする遺物である。現在の高宮小学校校庭部分が中心部であると推定される。高宮の北方に位置する大堀においても、大堀城跡の存在が推定されているが、詳細は不明である。

第2章 調査成果

1 基本層位

丁田遺跡における基本層位としては、1～5層に分類できる。1層は、暗灰色粘質土で、近現代の水田耕作土である。2層は、鉄分の多い黄褐色粘質土で、1層に伴う床土である。3層は、黄褐色粘質土の奈良時代の整地層である。厚さ20cm程度で、6区において確認できる。4層は、暗黄褐色粘質土の縄文時代の包含層である。厚さ40cm程度で、縄文時代中期末の遺物を含み、当該期の遺物包含層であると考えられる。5層は、黄褐色粘質土の基盤層である。基盤面及び奈良時代の整地層の標高は、99.8～100.20mで、調査区内において南西に向かって低くなっている。調査区の北側においては、粒子が粗くなり、礫を多く含むが、他の広い範囲では、粒子は細かく、粘性が高い。

縄文時代の遺構検出は、基盤層である5層上面及び縄文時代の包含層である4層上面において行った。縄文時代の遺構の多くは暗褐色粘質土である。調査区南西部の低位面においては、検出面の標高は、99.3m～99.6mであるが、北東部ではこれよりも若干高い。ただし、奈良・平安時代の遺構面の調査に主眼をおいたため、奈良・平安時代の遺構面の掘り下げ及び下層遺構の検出については、6区西端部など一部の範囲にとどめざるを得なかった。奈良・平安時代の遺構と同じレベルで検出される遺構については、これらと同時に調査を行った。

奈良・平安時代の遺構については、3・4・5層上面で検出することができる。検出面の標高は、99.8m～100.20mである。遺構の埋土は、主に褐灰色粘質土である。なお、平安時代以降の耕作に伴う畝状遺構の埋土は灰色粘質土で、平安時代から中・近世にわたるものであると推定される。

今回の調査では、縄文時代中期末、奈良・平安時代、平安時代以降の遺構を検出した。



図6 縄文時代遺構面調査風景



図7 6区西端部土層断面

2 縄文時代

(1) 概要

縄文時代の遺構は、6区西端部をはじめとして、広範囲に散在する。6区西端部(図10)では、2次調査区から続く40cm以上の厚さの縄文時代中期末の包含層が確認された。各区の包含層上面及び包含層下の基盤層上面では、竪穴建物と推定される遺構や土坑、小穴が検出された。

(2) 竪穴建物・土坑

SX04(図11) 奈良時代の遺構にきられており、残存状況は良好ではない。掘方はわずかに5cm程度残る。平面が隅丸方形の遺構であると推定され、残存部で幅1.6mである。埋土は暗褐色粘質土で、上面において14の石皿が出土した。石皿は、SX04に伴う可能性が高い。他に遺物は出土していない。柱穴の可能性のある小穴が1基検出され、平面形、出土遺物、埋土の特徴から、縄文時代の遺構、おそらく竪穴建物であると推定される。

SX06(図11) 隅の丸い方形の遺構と推定されるが、遺構の残存状況は良好ではない。遺物は出土していないが、埋土は暗褐色粘質土で、縄文時代の遺構であると推定される。

SK12(図11) 平面楕円形の土坑で、長軸1.4m、短軸1.1mを測る。埋土の1～3層には、基盤層に由来する黄褐色粘質土のブロックや灰色粘質土のブロック、微量の炭化物が含まれる。貯蔵穴の可能性はある。6～8の縄文土器が出土し、いずれも縄文時代中期末の深鉢の口縁部である。

(3) 遺構・包含層出土遺物(図14・15)

1～5は包含層(4層)から、9～13は各遺構から出土した縄文土器である。1は、口縁部上端と外面に沈線のある深鉢である。3は、刻みを有する隆帯のめぐる深鉢胴部片である。10、13の外面には縄文が施される。小穴・包含層から出土した縄文土器の大半は、縄文時代中期末(北白川C式期)に比定できる。15は、SP160に混入した磨石である。16は敲石で、両端部に敲打痕が認められる。17は、磨製石斧で、刃部が欠損する。18は、SX03に混入した石皿片である。なお、図示していないが、長さ約3～6cmのチャートの剥片も数点出土している。

(4) 小 結

西側に隣接する2次調査区と同様に、縄文時代中期末の包含層と遺構が検出され、竪穴建物を含めた当該期の遺構が3次調査区においても広がっていることが判明した。2次調査では、縄文時代後期初頭(中津式期)の土器も出土し、集落の造営時期は、縄文時代中期末(北白川C式期)～縄文時代後期初頭(中津式期)であると考えられる。2次調査と同様に、磨石・敲石、石皿、磨製石斧及びチャートの剥片が出土し、石器の製作もうかがわれる。

参考文献

- 泉 拓良 1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』 京都大学埋蔵文化財研究センター
- 泉 拓良 1988「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観 中期Ⅱ』 講談社
- 富井 眞 2008「北白川C式土器」『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション

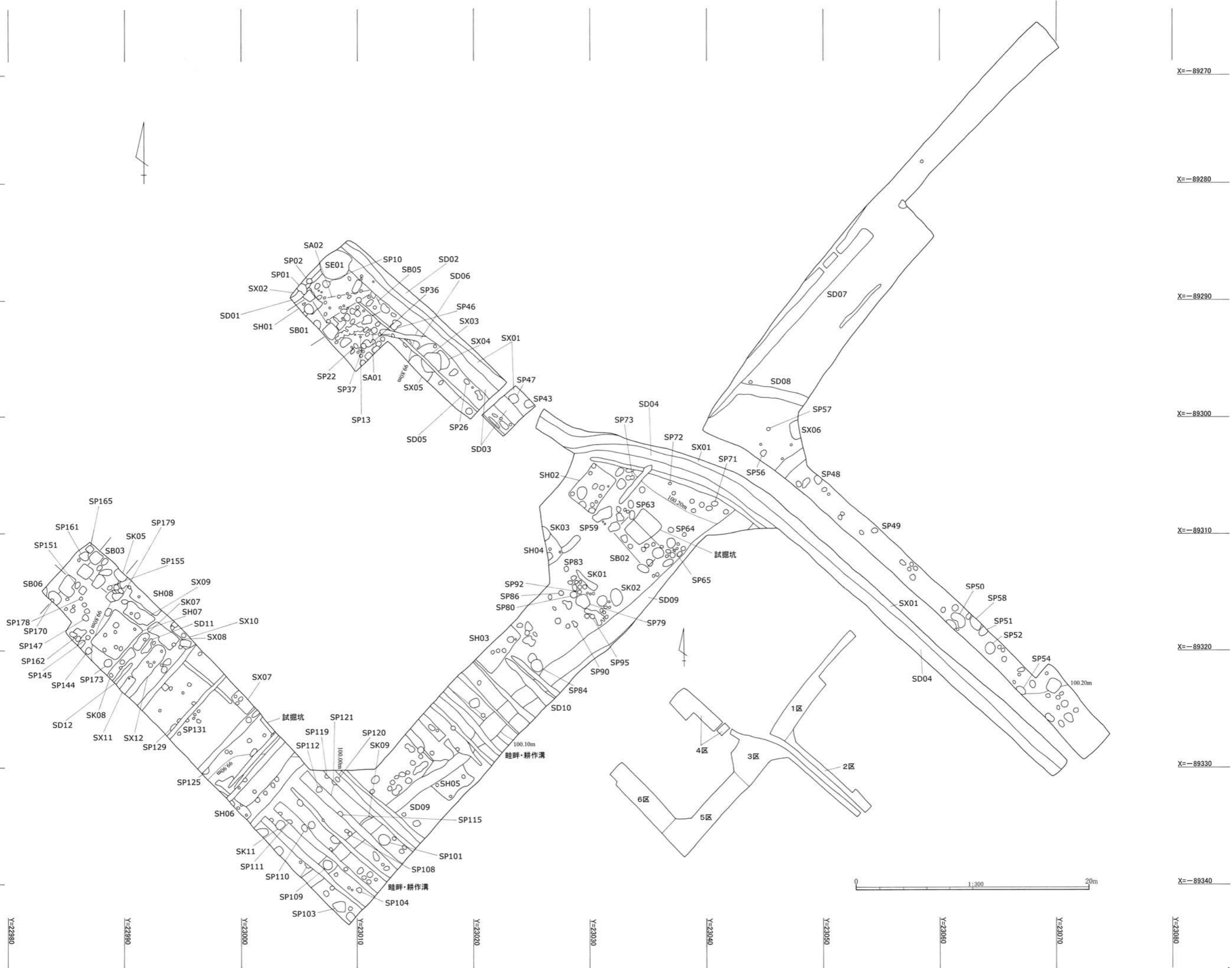


図8 調査区全体図

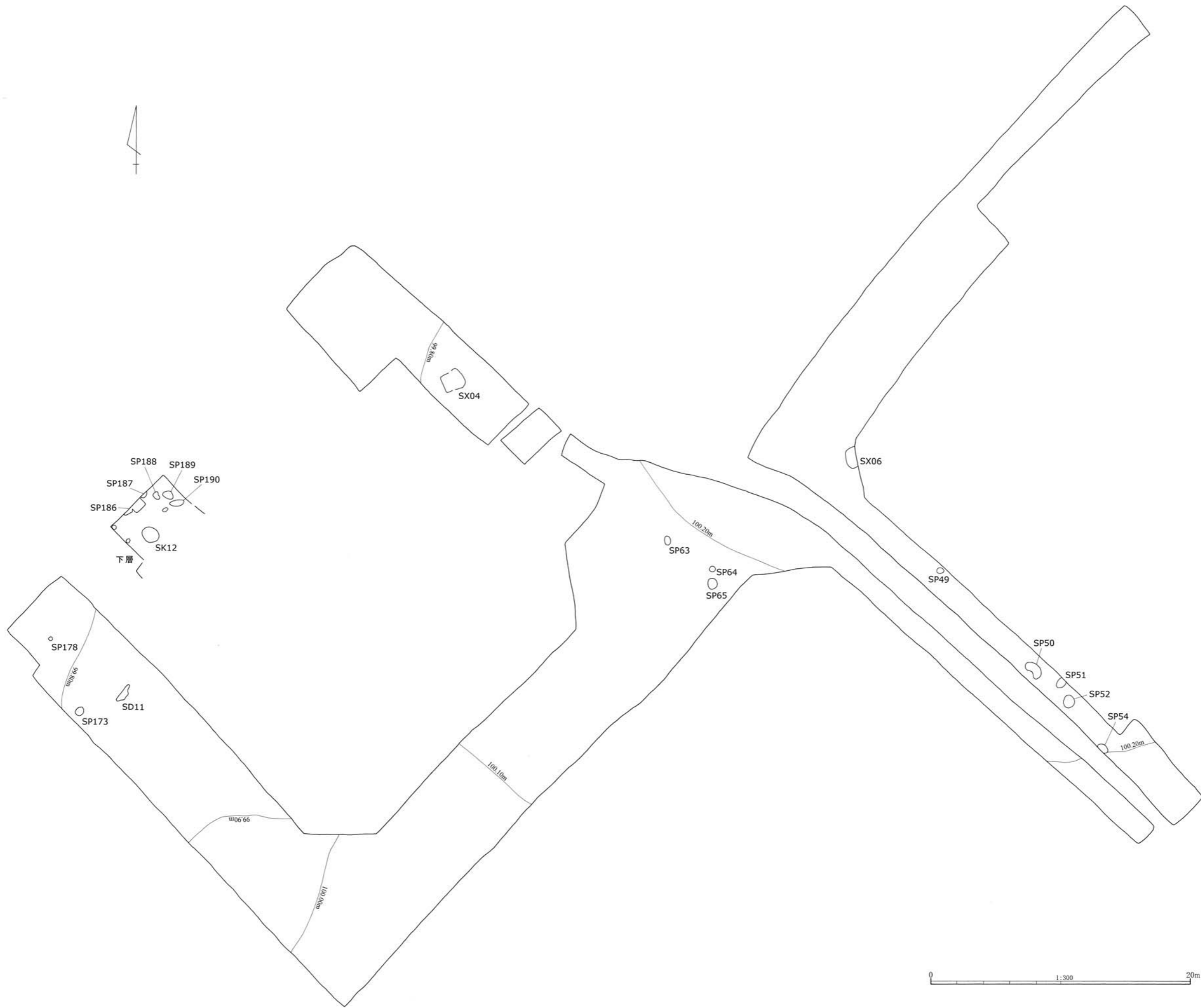
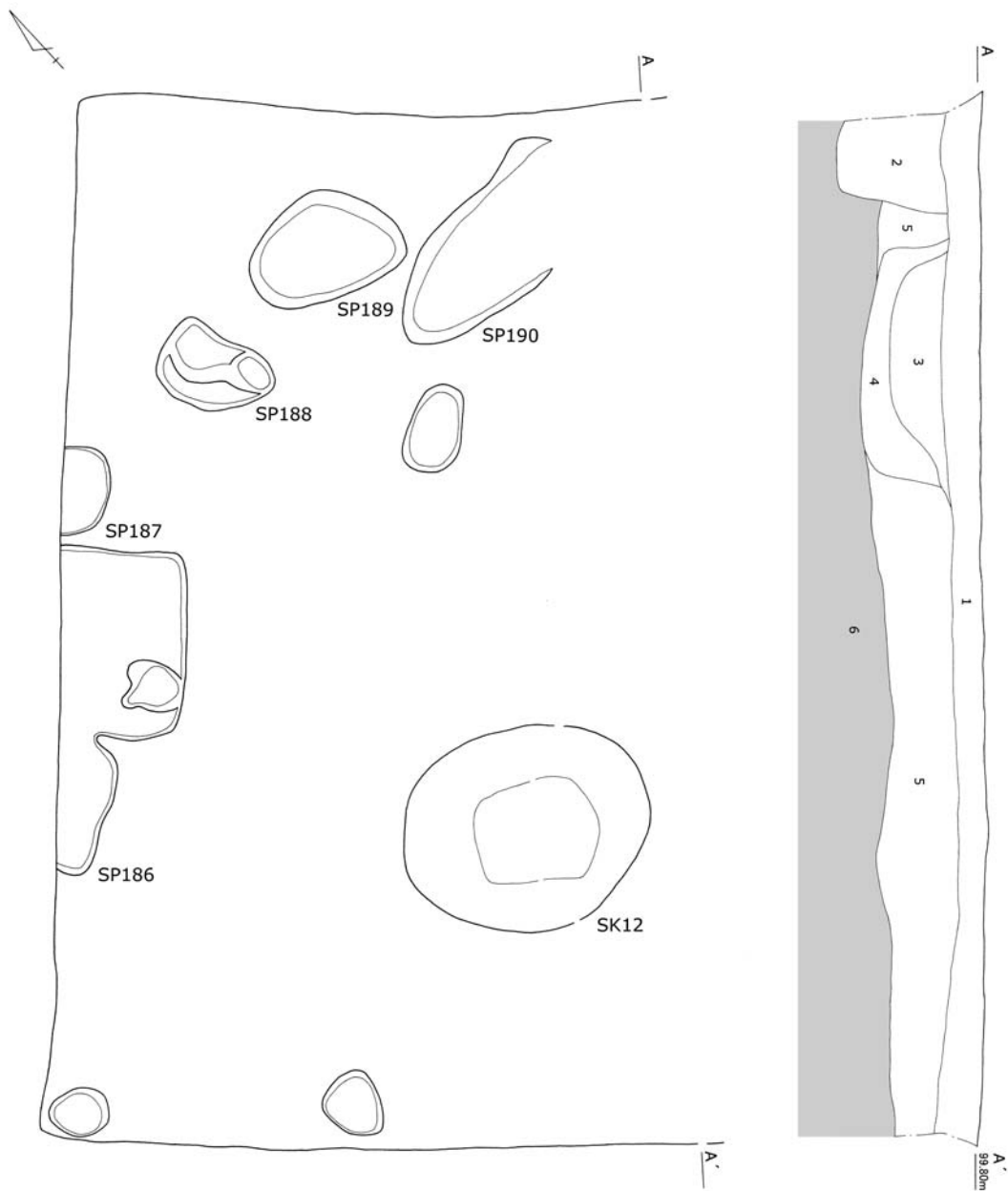
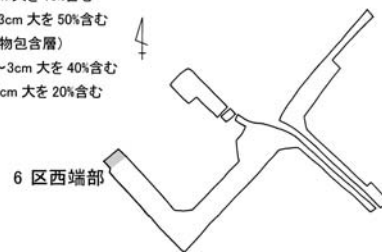


図9 縄文時代の主な遺構



- | | |
|--|---|
| <p>1 黄褐色粘質土 (奈良時代～平安時代前期の整地層)
 暗褐色粘質土ブロック～5cm 大を 50%含む
 灰色粘質土ブロック～3cm 大を 10%含む</p> <p>2 暗褐色粘質土 (縄文時代遺構埋土)
 灰色粘質土ブロック～3cm 大を 10%含む
 黄褐色粘質土ブロック～2cm 大を 30%含む</p> <p>3 暗褐色粘質土 (縄文時代遺構埋土)
 灰色粘質土ブロック～3cm 大を 10%含む
 黄褐色粘質土ブロック～3cm 大を 20%含む</p> | <p>4 暗褐色粘質土 (縄文時代遺構埋土)
 灰色粘質土ブロック～3cm 大を 10%含む
 黄褐色粘質土ブロック～3cm 大を 50%含む</p> <p>5 暗黄褐色粘質土 (縄文時代中期末の遺物包含層)
 暗褐色粘質土ブロック～3cm 大を 40%含む
 灰色粘質土ブロック～2cm 大を 20%含む</p> <p>6 黄褐色粘質土 (基盤層)</p> |
|--|---|



0 1:40 2m

図10 6区西端部 縄文時代遺構面

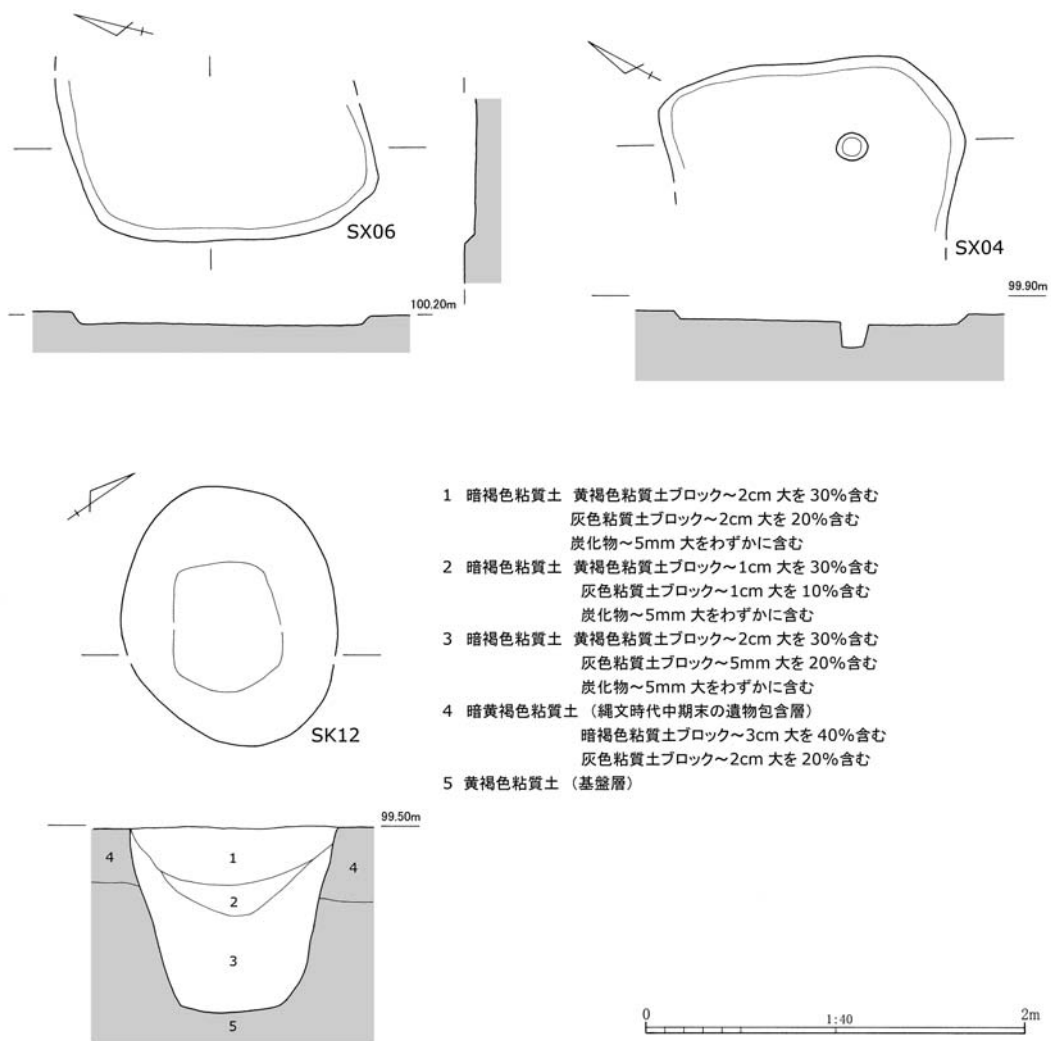


図11 縄文時代の遺構



図12 6区西端部縄文時代遺構面(北から)



図13 SK12土層断面(北東から)

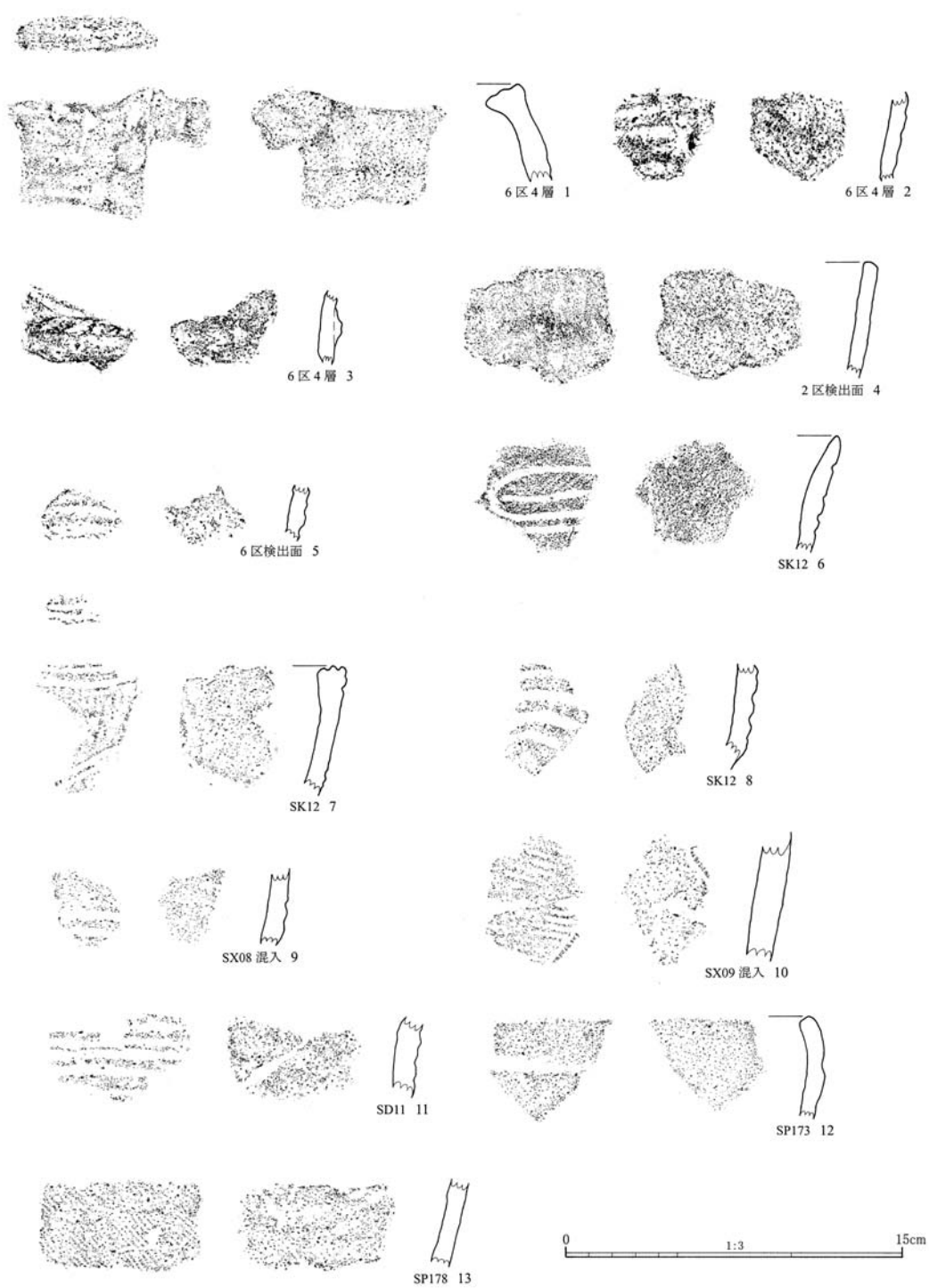


図14 出土縄文土器

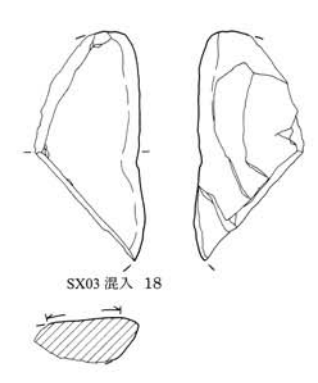
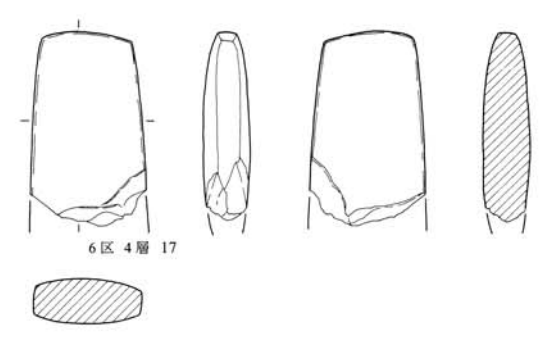
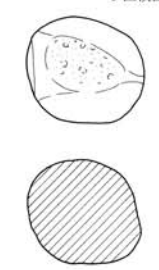
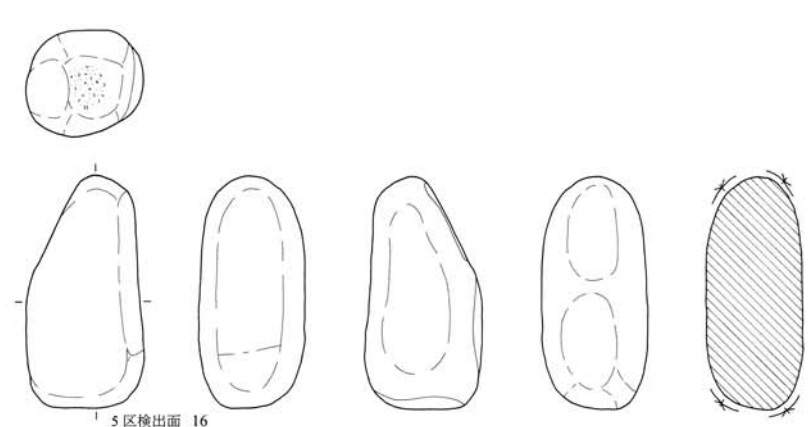
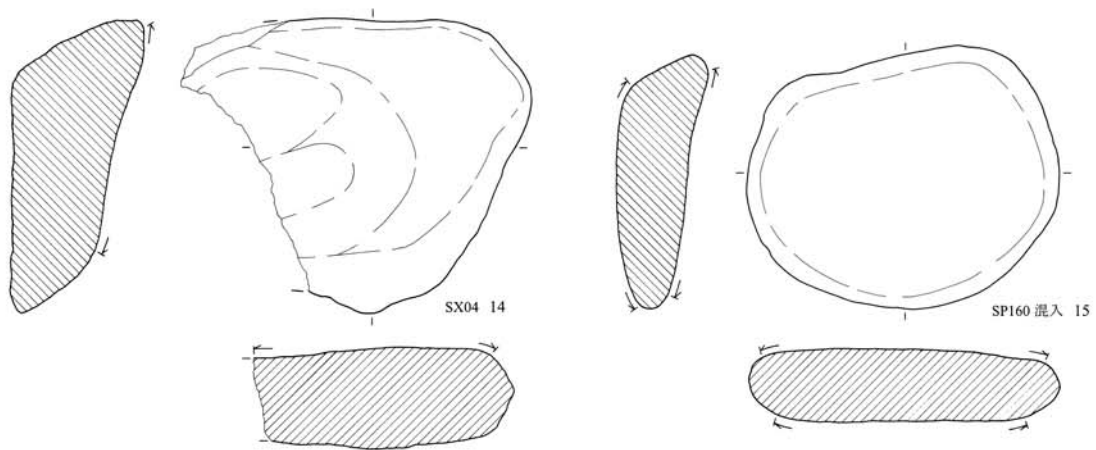


图15 出土石器

3 奈良時代～平安時代前期

(1) 概要

奈良時代から平安時代前期の遺構は、主に4・5・6区に広がり、遺構密度の高い6区西端部では厚さ20cm程度の整地層が確認された。主な遺構として、竪穴建物9軒、掘立柱建物4棟、柵2条、土坑10基以上、溝3条がある。竪穴建物は、平面方形あるいは長方形をなす。掘立柱建物と柵には、規模や建物方向に共通性がみられ、何らかの規格に基づいて築造・配置されたものと考えられる。一部の竪穴建物は、掘立柱建物と溝に切られ、これらの遺構には時期差があると考えられる。一方、竪穴建物どうしの切り合いはみられない。2・3・5区にまたがって南北に伸びる溝SD09は、集落の範囲を区画する溝とみられ、注目できる。

(2) 竪穴建物

竪穴建物としては、一辺3m以上の方形のものが多く、SH04、SX07、SX10は一辺3m未満と規模の小さいものである。竪穴建物の規模については、表2のとおりである。

SH01 (図18) SB01にきられており、北東隅部分のみ検出されている。平面形は方形であると推定される。埋土上層から、残存状態の良い8世紀前半の土師器小型甕(19)が出土した。19は、外面の肩部は縦方向のハケの後、ナデ調整が施され、一条の沈線がめぐる。胴部下半はケズリ調整がなされ、焼成剥離痕が残る。内面の上半は、横ハケの後にナデ調整が施され、下半は斜めハケの後にナデ調整がなされる。

SH02 (図19) 平面が長方形の竪穴建物で、四隅に柱穴のある構造であると推定される。埋土から、8世紀前半の土師器坏(20)、8世紀代の土師器甕口縁部片(21)が出土した。

SH03 (図17) 平面が長方形と推定される竪穴建物である。中央南寄りの小穴には、長さ30cm、幅20cm、厚さ8cm程度の両面に平坦面をもつ石が、ほぼ水平に据えられていた。焼土や被熱箇所は認められず、炉跡に伴うものではない。用途についてははっきりしないが、何らかの作業台の可能性がある。埋土からは、7世紀後半の須恵器坏(22)、8世紀初頭の土師器甕口縁部片(23)が出土した。北端の床面では、8世紀代の須恵器甕胴部片(24)が出土した。外面にはタタキ痕が、内面には当て具痕がみられる。

SH04 (図19) 一辺3m未満の小型の竪穴建物である。出土遺物はないが、遺構の形状と埋土の状況から、奈良時代の遺構であると推定される。

表2 竪穴建物一覧

遺構番号	規模 (m)		面積 (㎡)
SH01	—	—	—
SH02	3.6	2.9	10.44
SH03	4.2	—	—
SH04	2.8	—	—
SH05	3.24	3.2	10.37
SH06	—	—	—
SH07	3.58	3.1	11.1
SX07	1.96	—	—
SX10	2.7	—	—

SH05 (図18) 平面五角形であるが、方形に近い形状の竪穴建物である。奈良時代の区画溝 SD09にきられている。床面の北東部と南西部の2箇所には、焼土の集中部が認められる。焼土の厚さは3～4cmである。この2箇所の焼土集中部は、炉跡であると考えられる。床面の焼土集中部の間には、炭化物も散在していた。床面では、8世紀前半の土師器甕胴部片(25)が出土した。胴部上方の破片と推定され、外面はケズリ調整である。

SH06 (図19) 平面方形と推定される竪穴建物である。8世紀代の土師器坏(26)が出土した。

SH07 (図17) 平面長方形の竪穴建物である。埋土からは、8世紀代の土師器皿(27)、土師器甕口縁部片(28)が出土した。中央部の埋土上面からは、5～10mm大の鉄滓数点が出土したが、床面において焼土や炭はみられなかった。鉄滓は微量であり、上面から出土しているため、周辺部から流れ込んだ可能性もある。

SX07 (図20) 小型の竪穴建物である。平面方形のものと推定される。埋土からは、8世紀代の土師器坏(64)、奈良時代の平瓦片(65)が出土した。65の平瓦の凸面にはタタキ目が残り、凹面はマメツにより調整は不明である。

SX10 (図20) 小型の竪穴建物である。平面方形のものと推定される。出土遺物はないが、遺構の形状と埋土の状況から、奈良時代の遺構であると推定される。

(3) 掘立柱建物

SB01 (図22) SH01をきる掘立柱建物である。梁行は1間で、桁行は不明である。桁行は3.88mで、柱穴の大きさは、最大で1.16mを測り、大型である。SP39からは、8世紀後半の完形の須恵器蓋(29)が、底で外面を下にした状態で出土した。29の真下には、厚さ約2cmの炭化物が残存し、意図的に置かれている状況から、地鎮の祭祀にかかわるものと考えられる。

SB03 (図23) 梁行は2間で、3.24mである。桁行は不明である。柱穴の大きさは、1.1～1.2mと規模が大きい。SP152からは、土師器の把手(30)と鉄滓(31)が出土した。SP160からは、釘(32)が出土した。32には、刀子状の別の鉄製品が錆着している。SP179からは、鉄鏃の先端部と推定される鉄製品(33)が出土した。各柱穴から、鉄製品と鉄滓が出土している点は注目される。特に鉄滓の出土は、周辺における鍛冶工房の存在を示唆するものである。SB03が、鍛冶に関わる建物である可能性もある。

SB05 (図24) 梁行1間、桁行3間の掘立柱建物である。梁行1.9m、桁行4.64mである。柱穴は円形で、SP18が90cmと大きく、他の柱穴は小規模である。柱穴からは、図示できない土師器と須恵器の小片が出土しており、奈良時代のものと考えられる。

SB06 (図22) 2つの柱穴が確認されたが、梁行、桁行ともに不明である。柱穴には、L字形のものがあり、長さ1.6m、幅1.36mを測り、規模が大きい。柱穴からは、遺構の時期を明確に示す遺物は出土していないが、遺構の形状と褐灰色粘質土という埋土の特徴などから、奈良時代の遺構であると判断した。

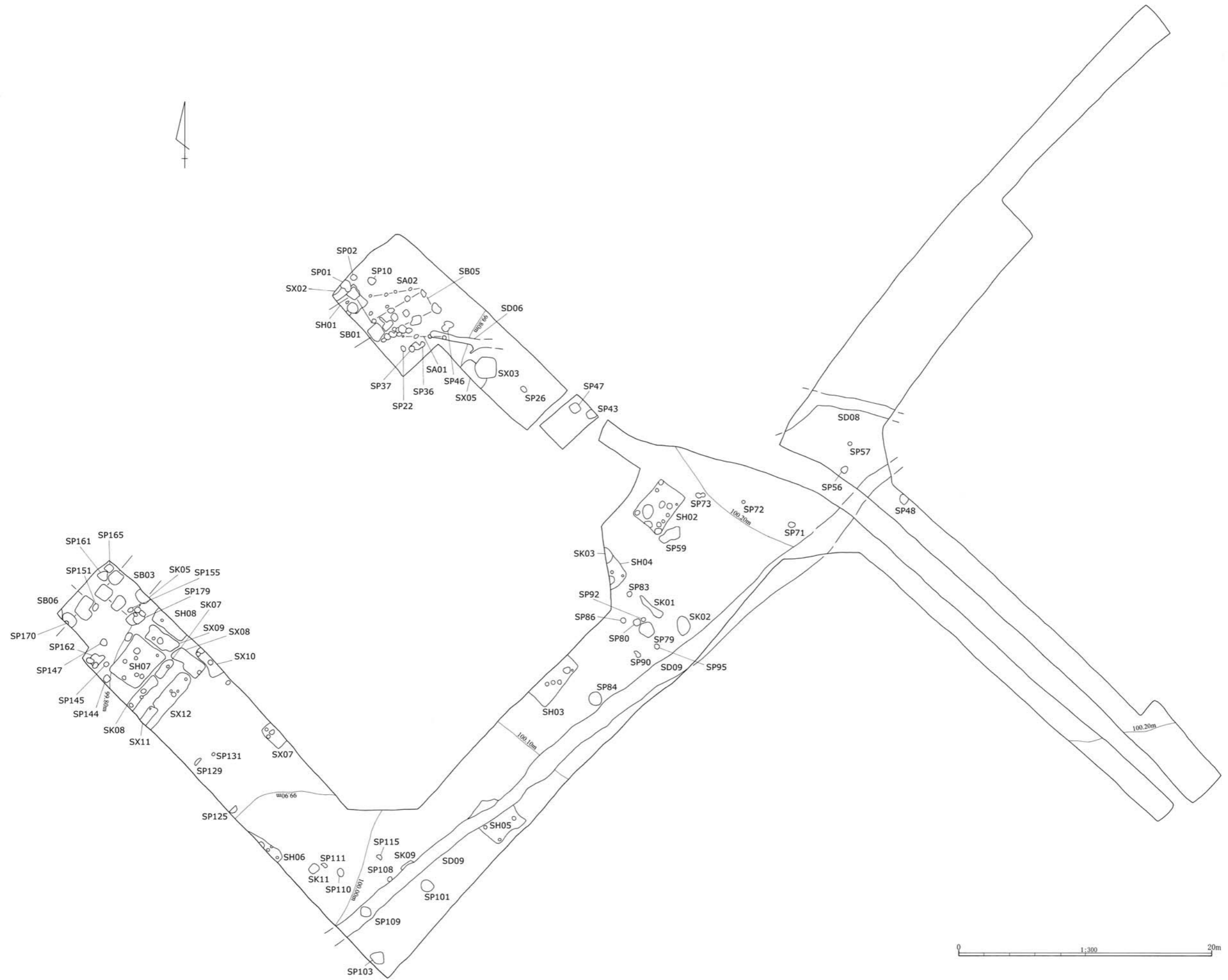


図16 奈良時代～平安時代前期の主な遺構

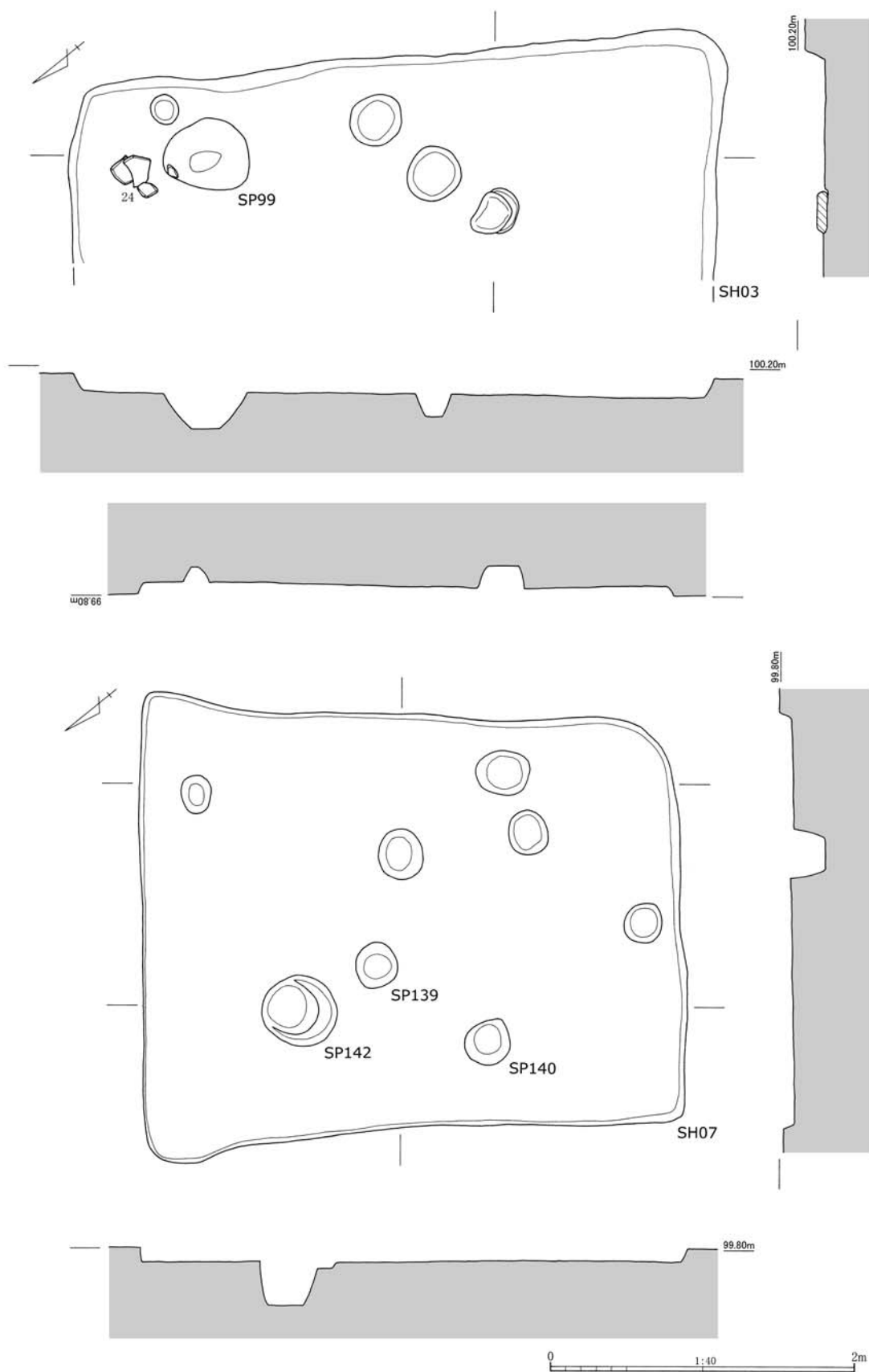


图17 SH03·07竖穴建物

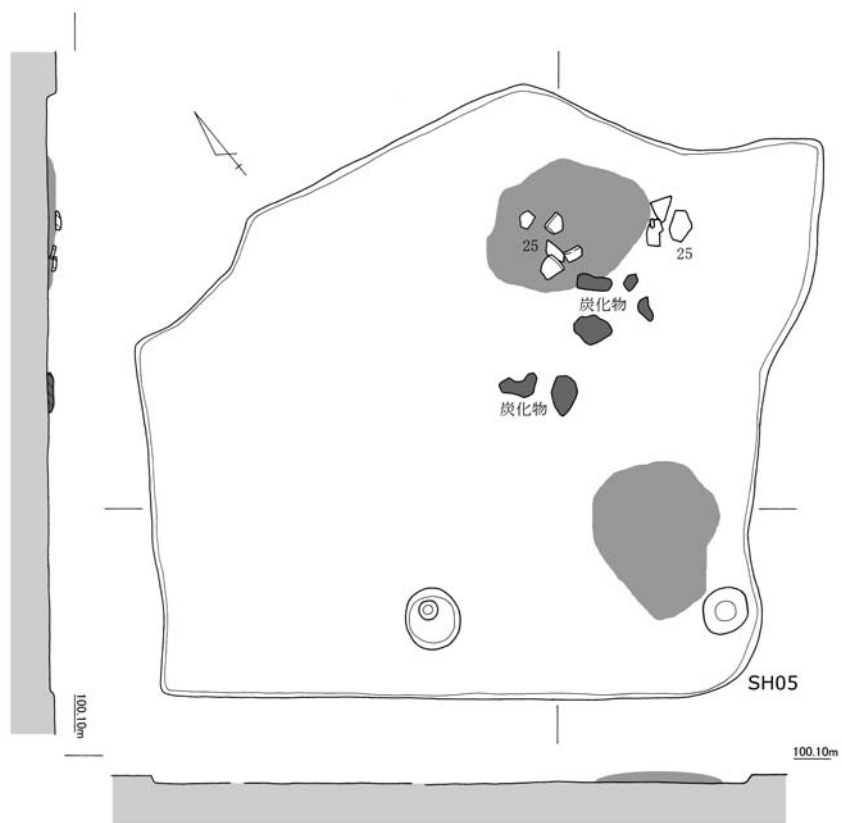


図18 SH01・05竪穴建物

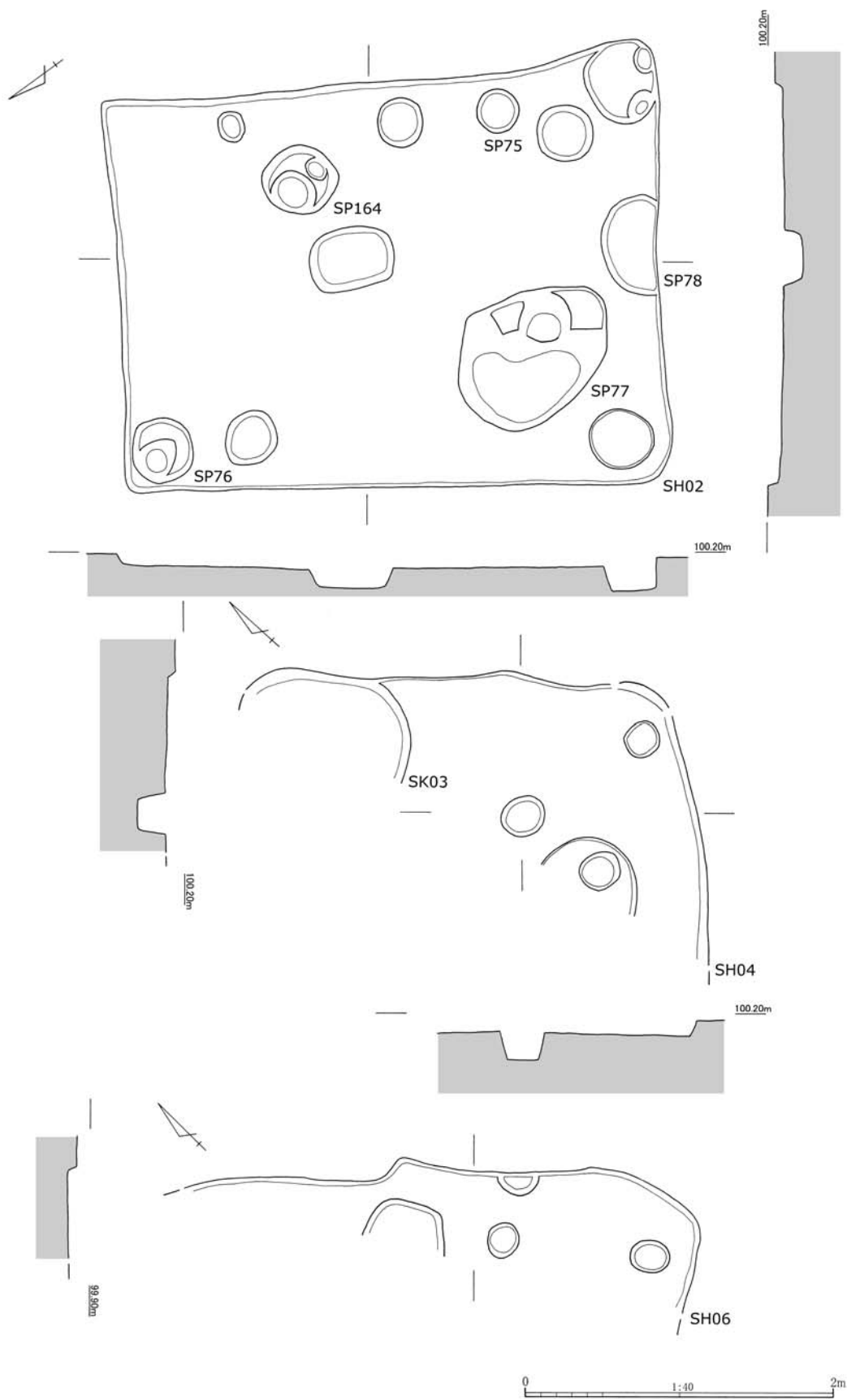


图19 SH02·04·06竖穴建物

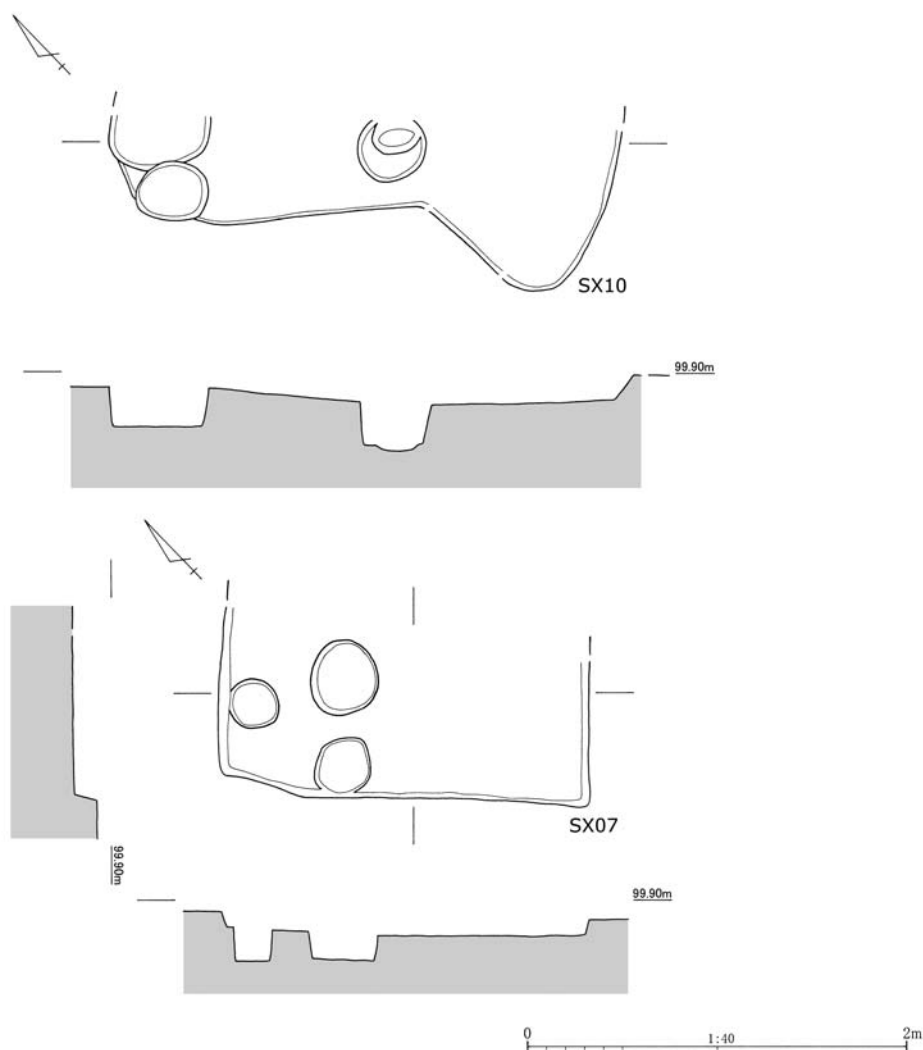


図20 SX07・10 竪穴建物

(4) 柵

SA01 (図27) SB05の東側に伴う柵である。柱間の寸法は、1.1m 前後である。

SA02 (図27) SB05の西側に伴う柵である。柱間の寸法は、SA01と同様に1.1m 前後である。柱穴からは、図示できないが、土師器と須恵器の小片が出土した。

(5) 土坑・小穴

SX03 (図29) 平面隅丸方形の土坑で、長さ1.7m、幅1.64m を測る。埋土には、礫が含まれ、48～56の遺物が出土した。廃棄土坑であると考えられる。48・49・50・51は、8世紀後半の須恵器蓋である。52・53・54は須恵器坏である。55・56は土師器坏である。52～56は、いずれも8世紀代のものである。

SX05 (図29) SX03にきられる平面方形の土坑である。SX03と同様に、礫が含まれ、57～63の遺物が出土した。SX03と同様な廃棄土坑であろう。57・58は8世紀後半の須恵器蓋、59は8世紀後半の須恵器平瓶である。60・61は8世紀代の須恵器坏、62は須恵器長頸壺の底

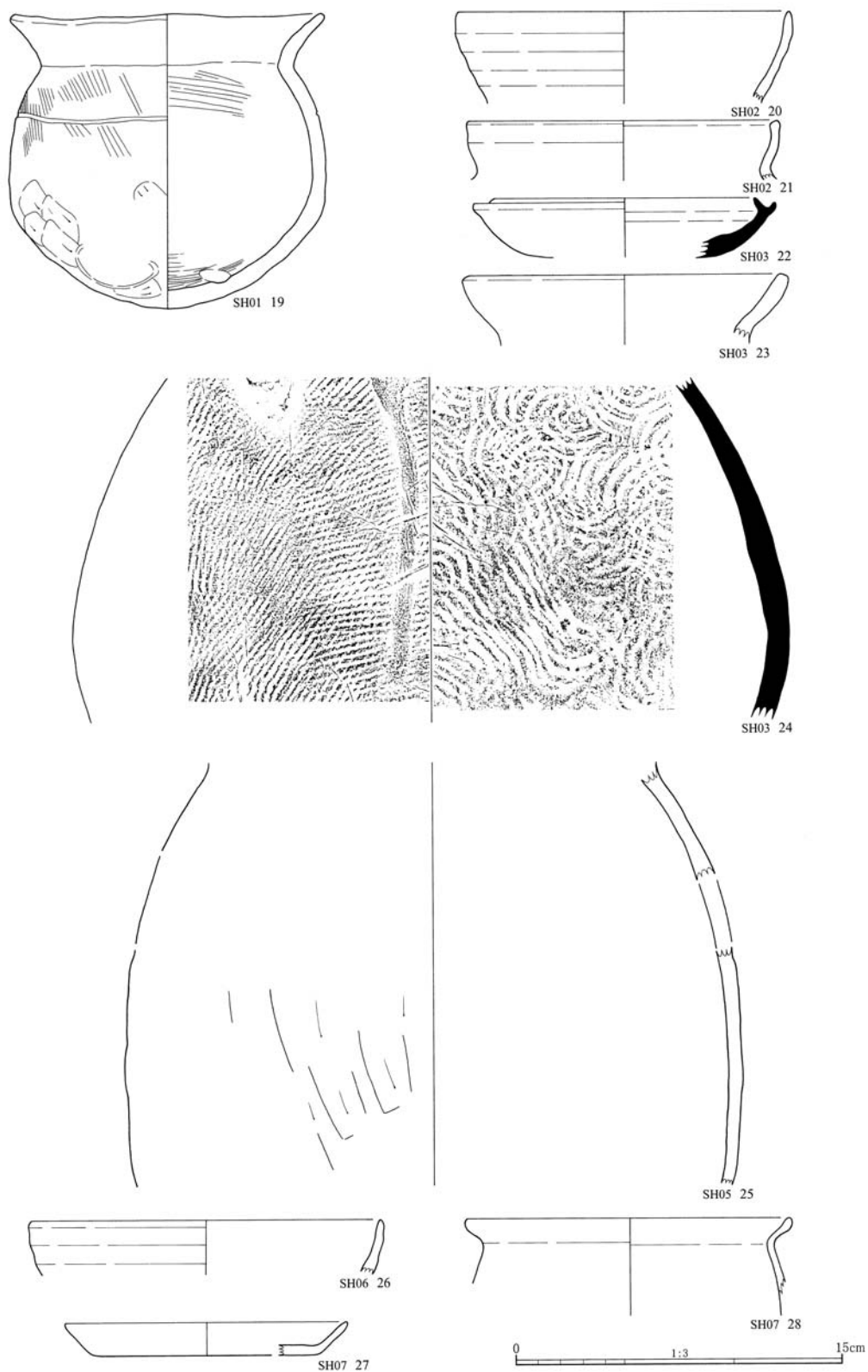


图21 竖穴建物出土遺物

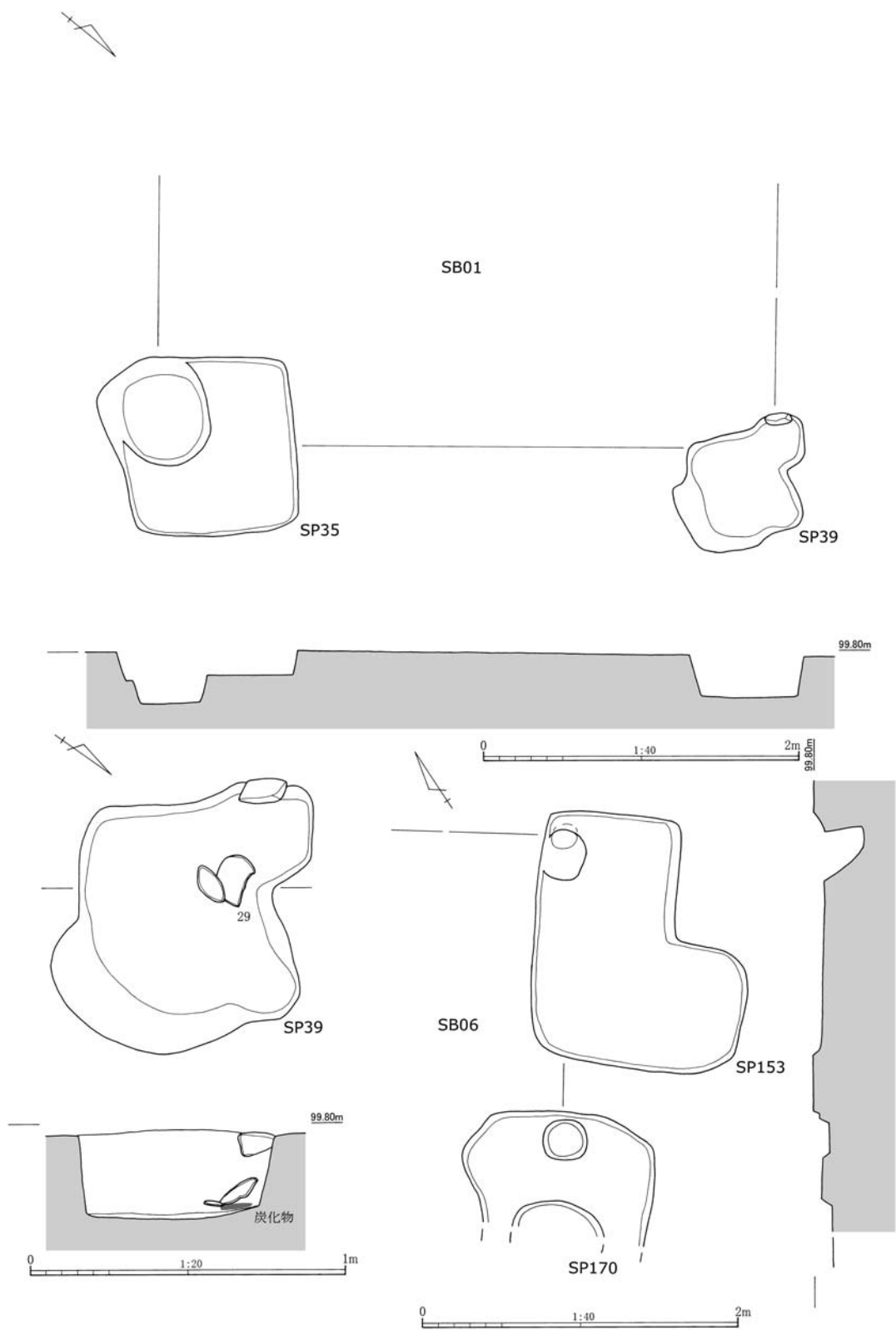


图22 SB01·06掘立柱建物

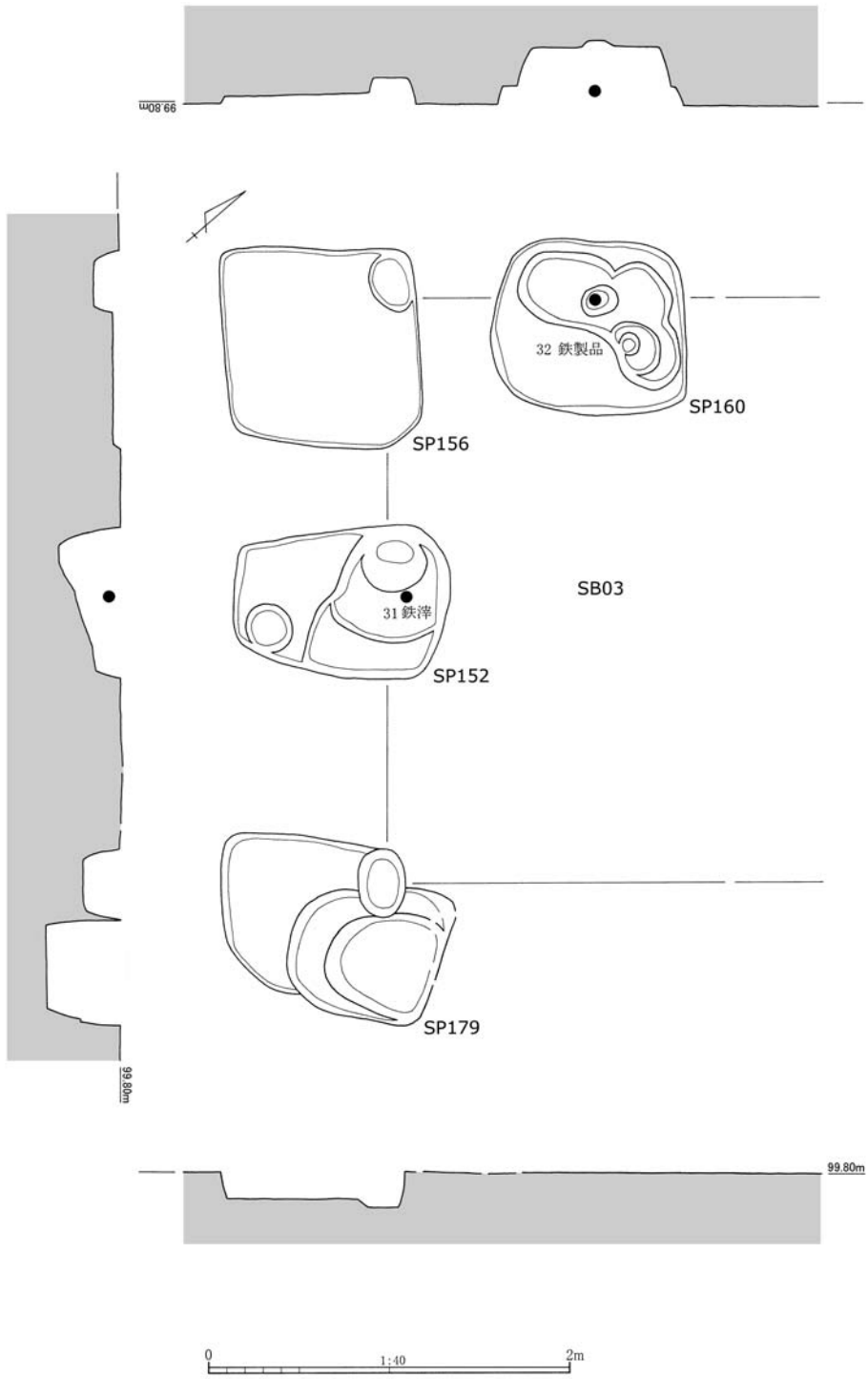


图23 SB03掘立柱建物

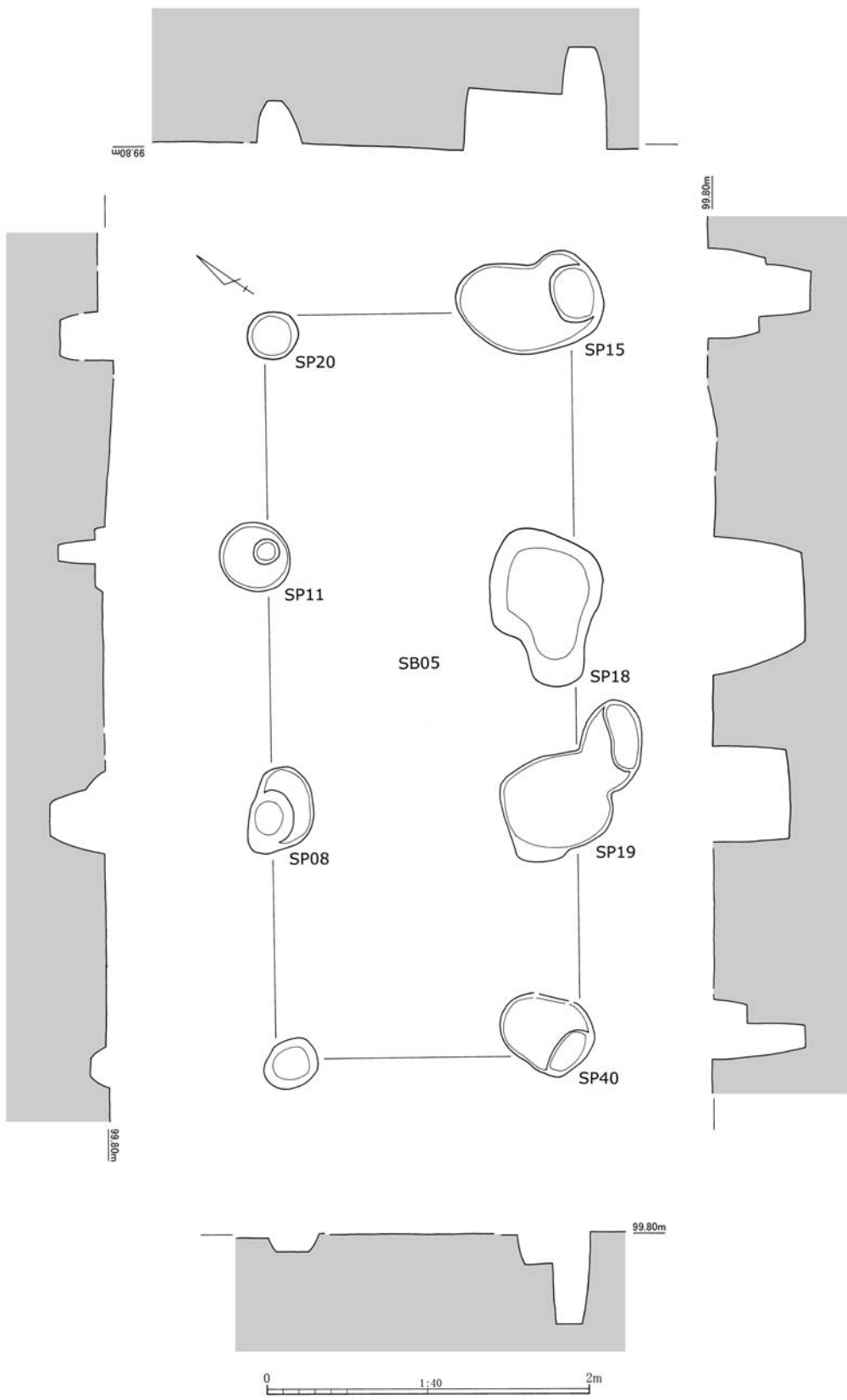


图24 SB05掘立柱建物



図25 SB05 · SA01 (南西から)



図26 SB03 · 06 (南西から)

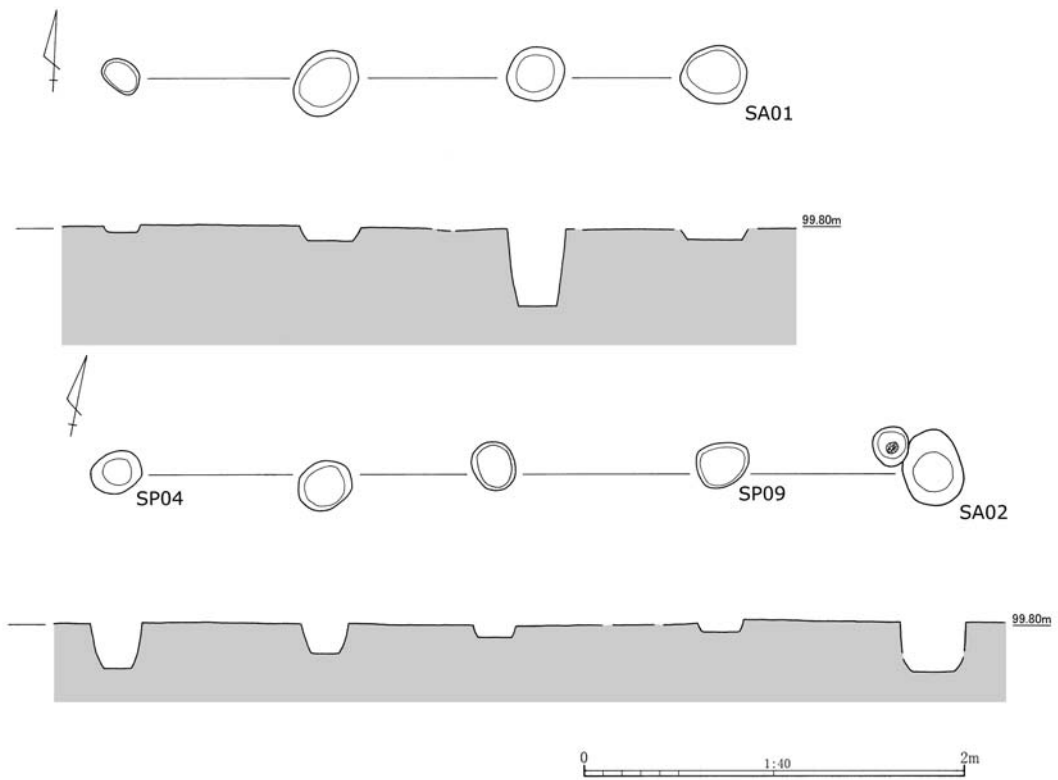


図27 SA01 · 02柵

部片と推定され、8世紀後半のものであろう。63は、土師器坏である。SX03とSX05の出土遺物に大きな時期差はなく、ほぼ同時期の遺構であると考えられる。

SK05 (図30) 長さ1.15mを測る楕円形の土坑である。36～40の遺物が出土した。36は、須恵器平瓶である。37・40は、須恵器坏である。38は、土師器坏である。39は土師器皿で、底面から出土した。39の直下には炭化物が残存していた。これらは、いずれも8世紀代の土器である。

SP47 (図30) 長さ78cm、幅72cmの平面方形の土坑である。土坑の壁面全面は赤く焼けており、埋土の上層には焼土と炭化物が含まれ、下層は被熱粘土塊を含む炭層である。下層の炭層は、土坑の全面に広がり、底には深さ30cm程度の小穴がある。89～95の遺物が出土した。89は8世紀中頃～後半の土師器皿で、90～95は、被熱粘土塊である。厚さは1.6～4cmと均一ではないが、一方の面が平らになっているものが多い。これらには、粘土の焼成によりつくられた、構造物の破片が含まれている可能性が考えられる。土師器の焼成に関わる粘土である可能性もある。鉄滓や銅滓は出土していないので、鉄生産や金属製品の生産に関わる遺構ではなく、むしろ土師器の焼成に関わる遺構であると考えられる。

SP109 (図30) 長さ65cm、幅36cmの小穴で、SD09の上から掘りこまれている。8世紀末～9世紀初頭の須恵器坏(99)が出土した。SD09をきっていることから、SD09の時期

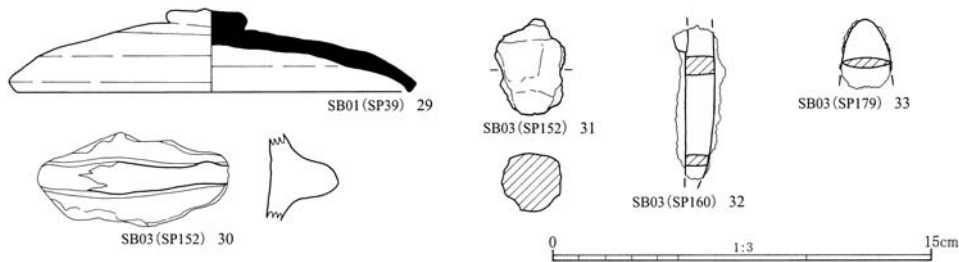


図28 掘立柱建物出土遺物

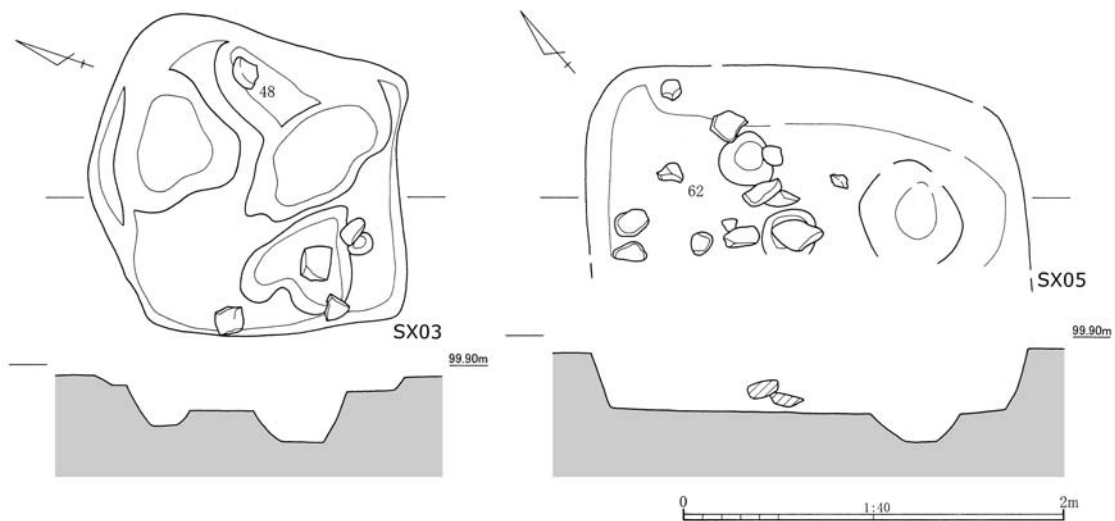


図29 SX03・05土坑

の下限を知ることができ、その年代は8世紀末～9世紀初頭であると考えられる。

SP115 (図30) 長さ48cm、幅45cmの小穴で、8世紀代の須恵器坏(100)が出土した。

(6) 溝

SD06 (図36) 4区において、約11mの長さにわたって検出された溝である。溝の幅は60cmで、遺物は出土していないが、埋土から、奈良時代の遺構であると判断した。調査区外を隔てて、1区で検出された溝SD08と遺構の方向が近く、SD08と連続する可能性が考えられる。

SD08 (図32) 1区で検出された区画溝で、調査区外にかかる部分でL字状に曲がっている。幅は1.0mで、深さ32cm、断面台形を呈する。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、奈良時代の遺構であると判断した。

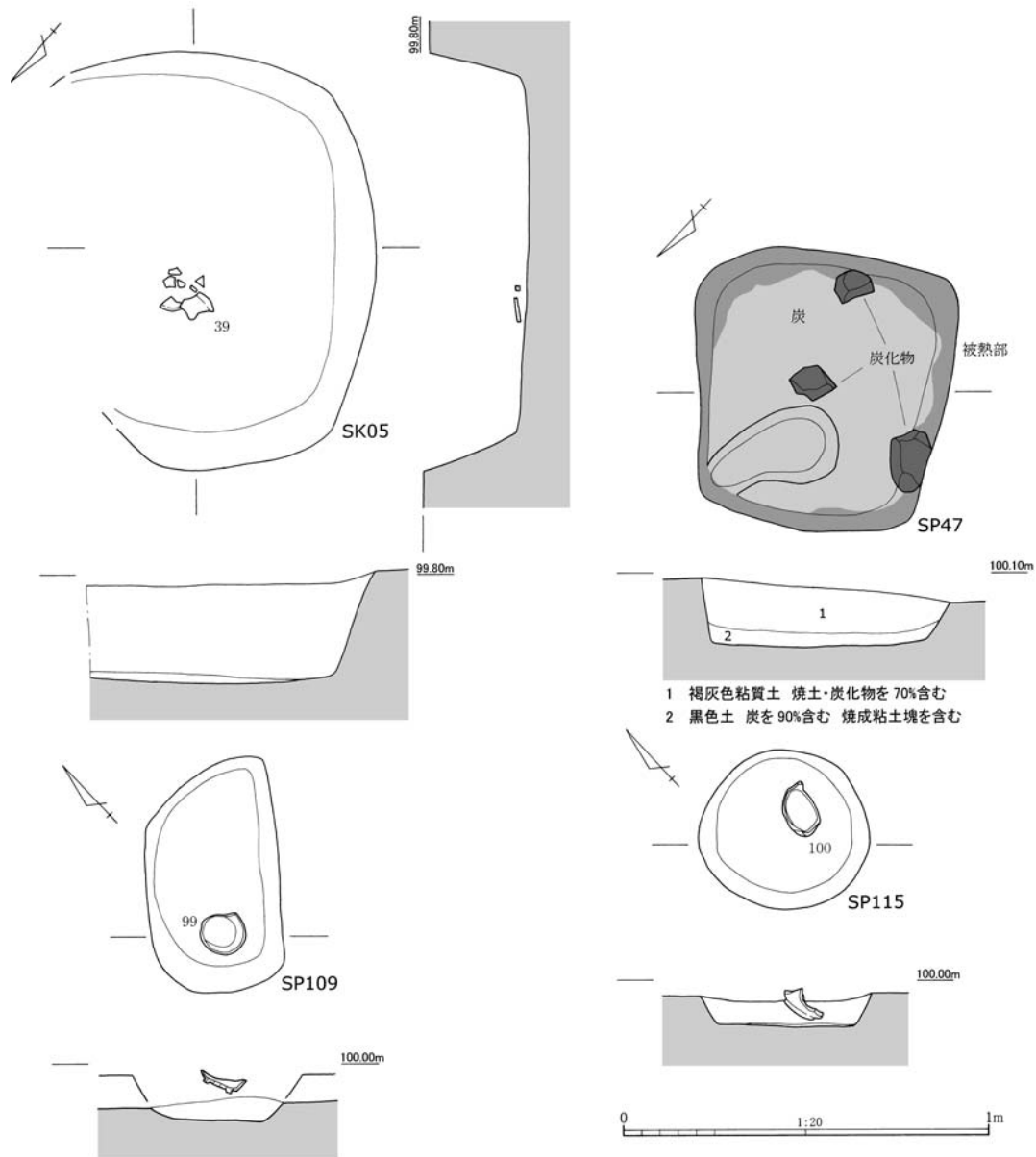


図30 土坑・小穴

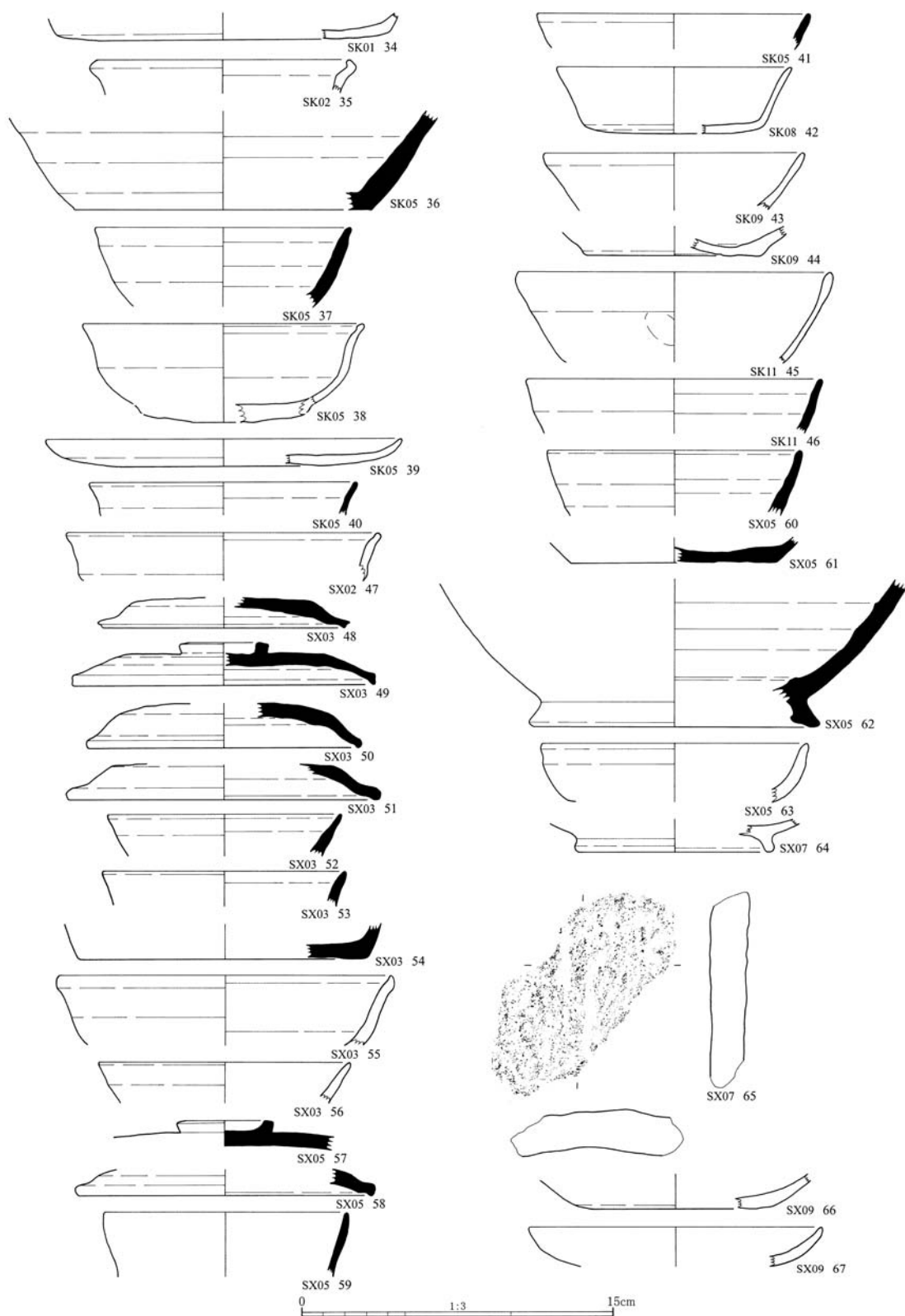


图31 竖穴建物·土坑出土遺物

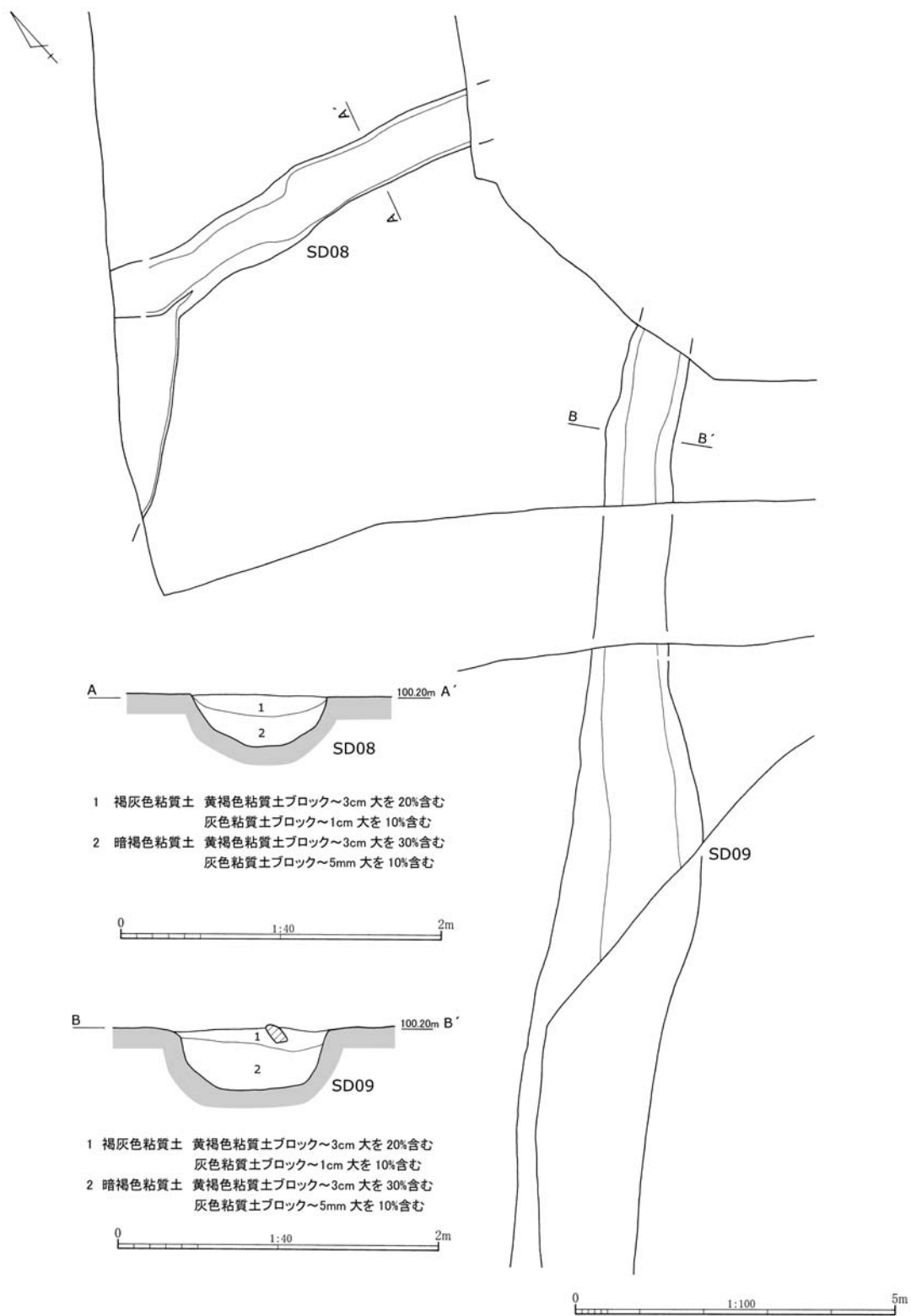


図32 SD08・09区画溝

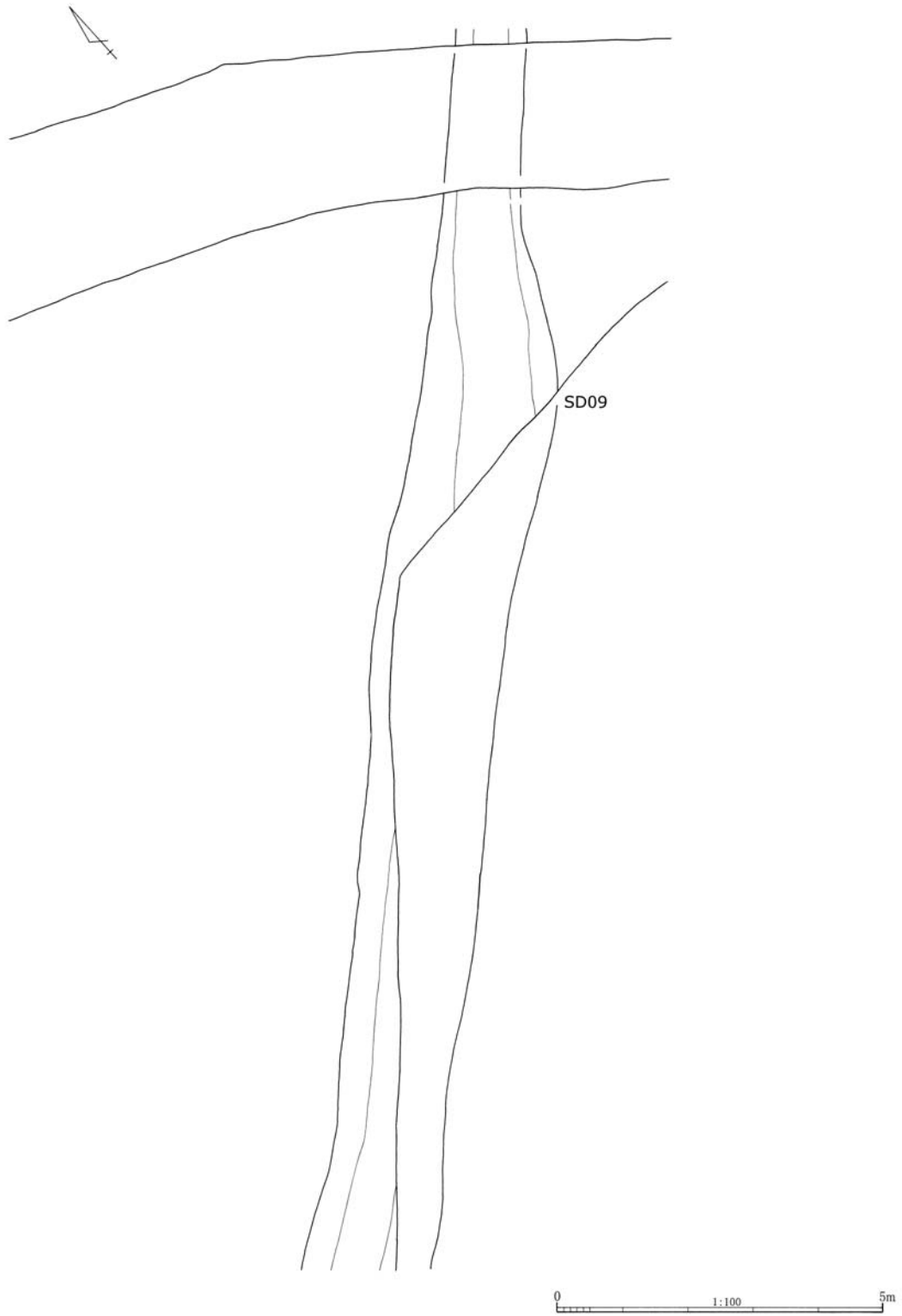


图33 SD09区画沟 (1)

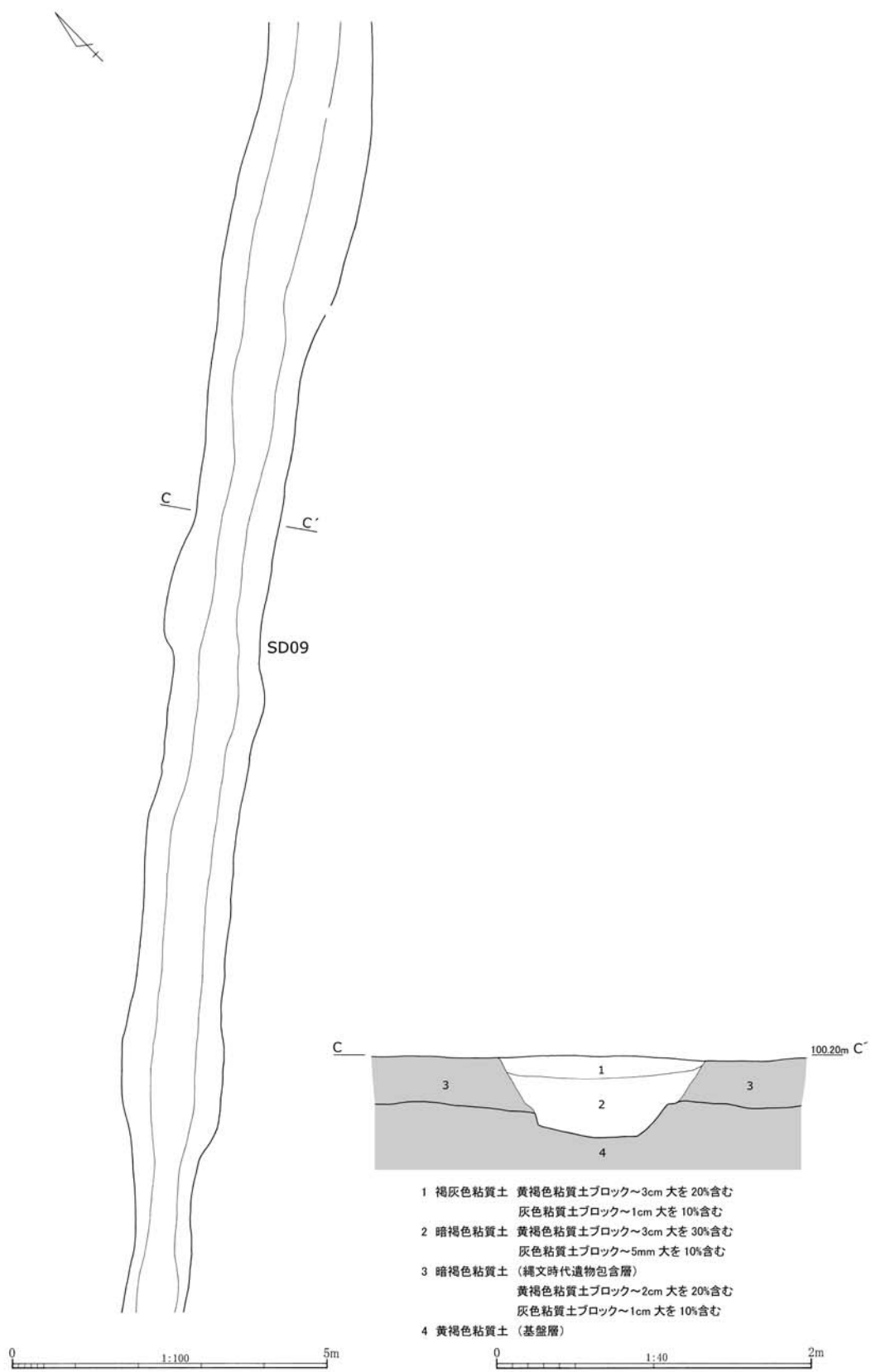


図34 SD09区画溝 (2)

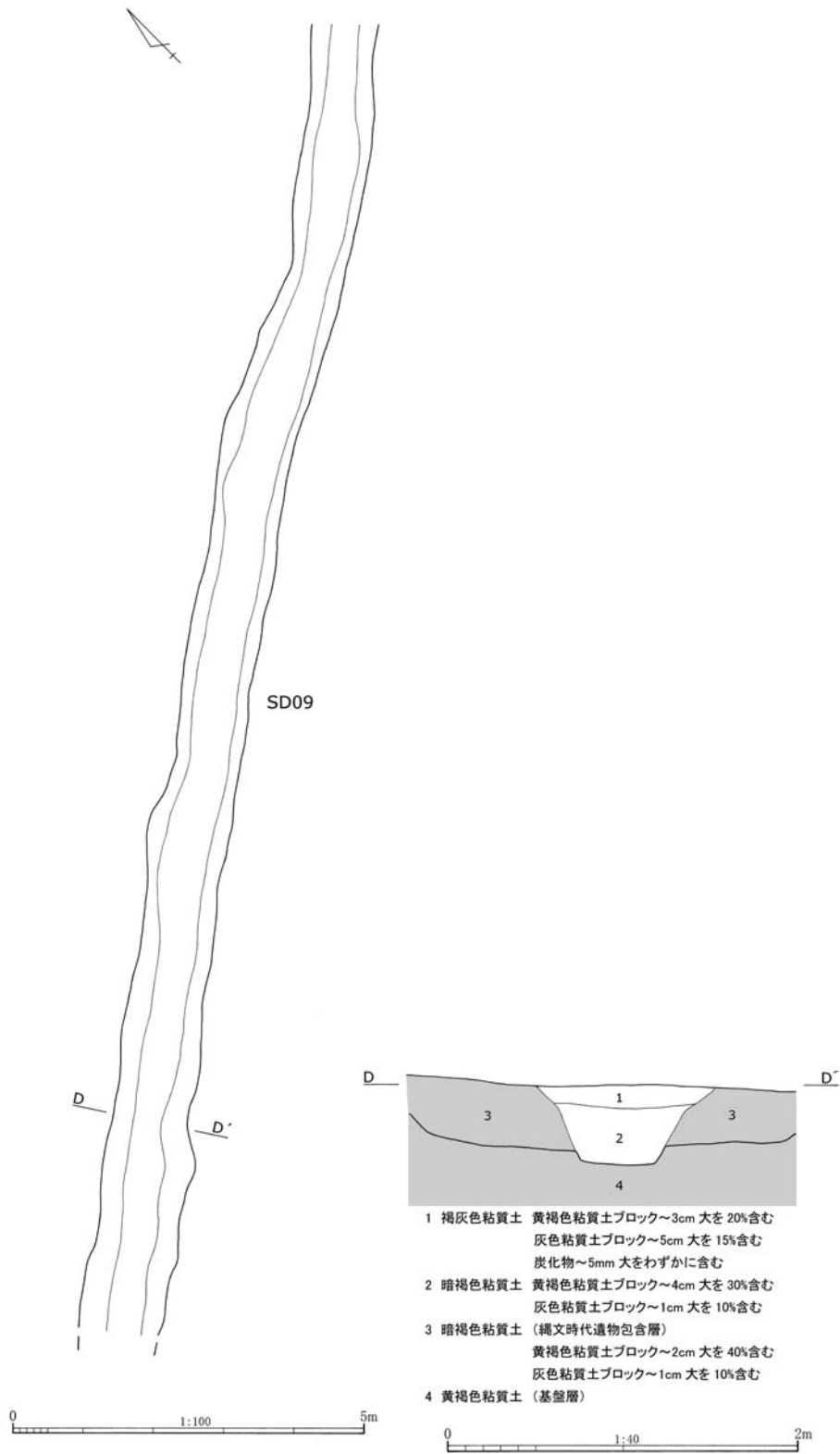


図35 SD09区画溝 (3)

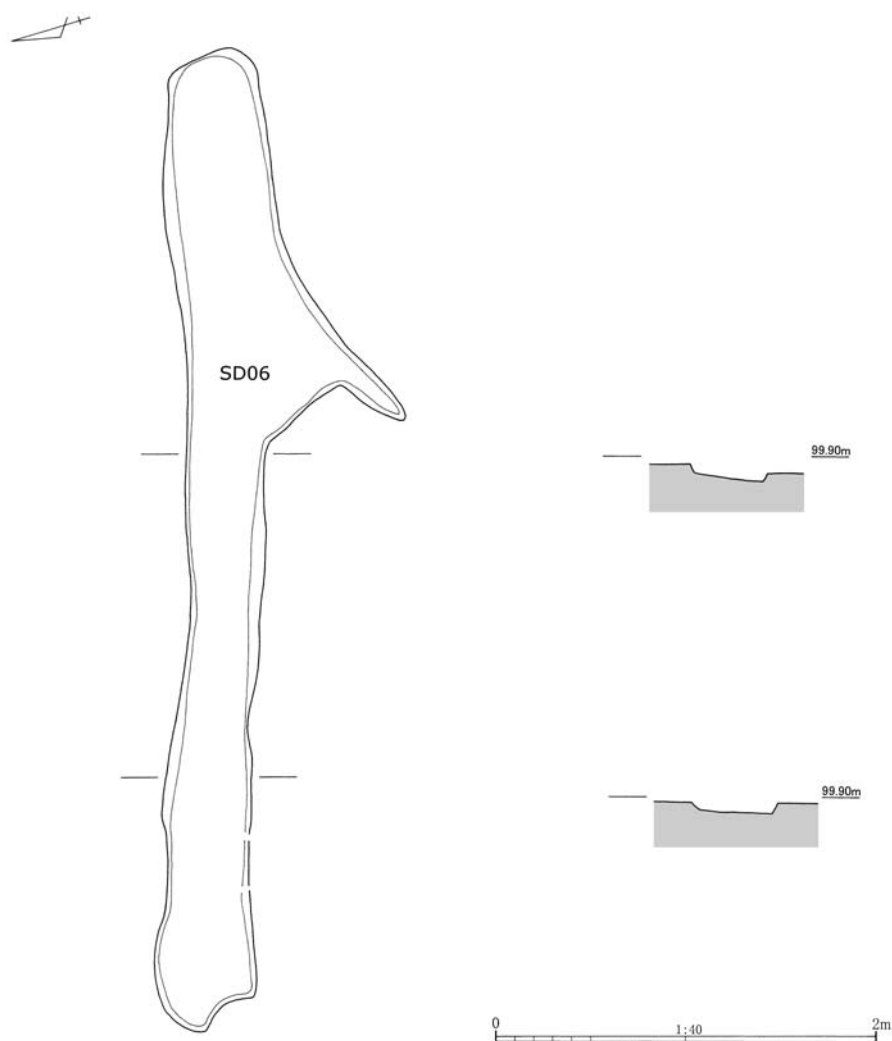


図36 SD06区画溝

SD09（図32・33・34・35・37） 長さ約55m以上にわたり、南北に直線的に伸びる区画溝である。溝の幅は、狭い部分で1m程度、最も幅の広いところで2mを測る。断面は台形で、深さは最深部で52cmである。埋土には、基盤層に由来する黄褐色粘質土のブロックが含まれ、溝の掘削土が周辺部から流れ込んだものとみられる。グライ化していないことから、常時水が滞留する環境ではなく、ある程度管理されていたものと想定される。SH05とSK09をきる。

SD09からは、68～87の遺物が出土した。68～74は、ほぼSH05をきる部分から北側で出土した。68・69は須恵器坏、70・71は土師器坏である。72は、外面にタタキ調整の施される土師器甕口縁部片である。73は、須恵器平瓶の口縁部片と推定される。74は、片面が窪む碗形の鉄滓である。

75～87は、SH05をきる位置よりも南側で出土した。75は、8世紀後半の須恵器蓋である。

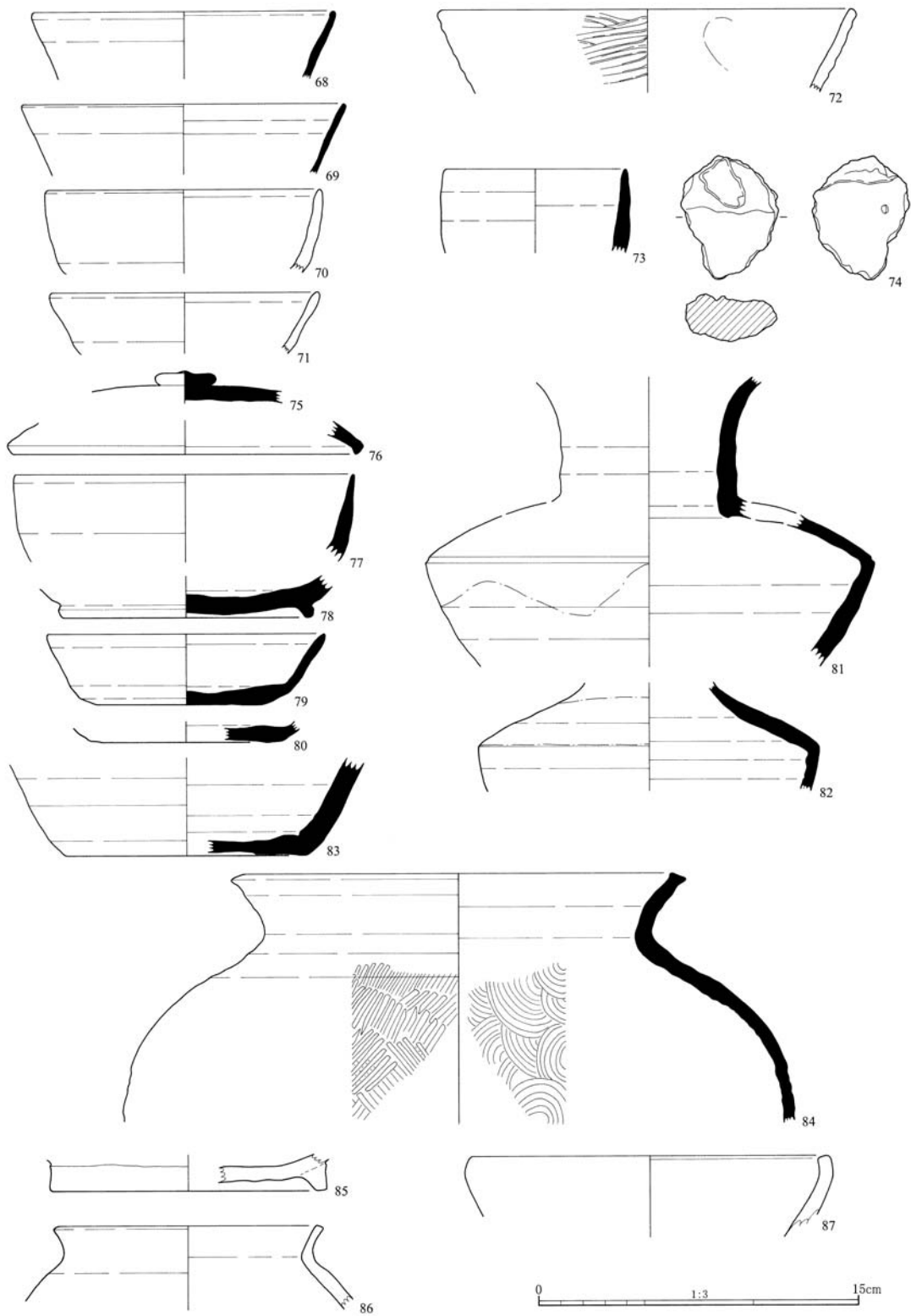


图37 SD09区画沟出土遺物

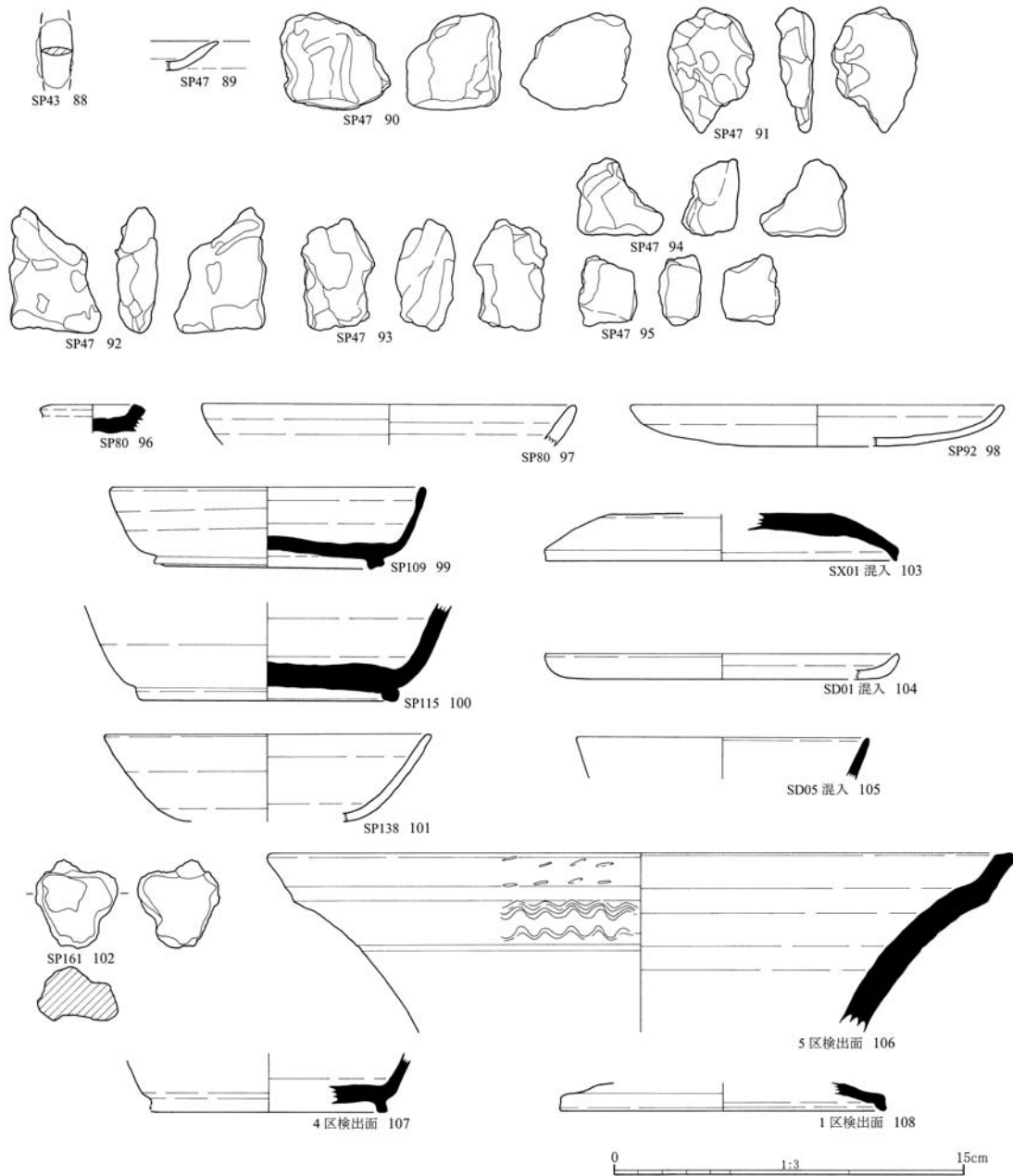


図38 土坑・小穴・包含層出土遺物

76は、8世紀末～9世紀初頭の須恵器蓋である。77・78・79・80は、8世紀後半の須恵器坏身である。81・82は、8世紀後半の須恵器壺である。81は、外面には暗オリーブ色の釉が付着し、屈曲部外面は沈線状にくぼむ。82の外面にもオリーブ色の釉が付着する。83は、須恵器平瓶の底部片と推定されるものである。84は、須恵器甕である。85は、土師器坏である。86・87は、土師器甕である。

出土遺物としては、鉄滓の出土が注目できる。付近で鍛冶が行われていた可能性が高いことを示す遺物である。また、土器の時期から、SD09は、8世紀後半～末を中心とする時期

の遺構であると考えられる。

(7) 土坑・小穴・包含層出土遺物 (図36)

88は、SP43から出土した鉄製品で、鉄鏃の先端部と推定される。96は、SP80から出土した須恵器坏蓋である。97は、SP80から出土した土師器甕口縁部片である。98は、SP92から出土した土師器皿である。101は、SP138から出土した9世紀代の土師器坏である。102は、SB03の西側に位置するSP161から出土した鉄滓である。103～105は、平安時代以降の遺構に混入した遺物である。103は須恵器坏蓋、104は土師器皿、105は須恵器坏身である。106～108は、遺構検出面で出土した。106は須恵器広口壺で、7世紀代の最も古い遺物である。107は、須恵器坏身である。108は、須恵器蓋である。

(8) 小 結

竪穴建物については、重複は少なく、その存続期間は短かったものと推定され、出土遺物から、多くは7世紀後半～8世紀前半のものであると考えられる。

掘立柱建物は、4棟検出されているが、全体がわかるものは限られる。しかし、SB01・03・06の柱穴は方形で、直径は1m以上と大きく、大型の建物であると想定できる。梁行が4m近いSB01では、桁行は8mに達する可能性も十分にある。4区の西端部ではSB01・05が、6区の西端部ではSB03・06が検出されており、両地点の間には、複数の大型建物が存在する可能性がきわめて高い。東側と比較し、遺構の密度も高い範囲である。2次調査区で検出された建物群は、3次調査区へ続いて展開しているとみられる。掘立柱建物の柱穴からは、遺構の時期を示す遺物の出土はわずかであるが、SB01の柱穴から8世紀後半の須恵器が出土している点から、これらの掘立柱建物は、8世紀後半を中心とする時期のもので推定される。また、建物の主軸方向にも大きな隔たりはないことから、4棟はほぼ同時期の建物であると考えられる。さらに、SB01は、SH01をきって建てられていることから、竪穴建物と掘立柱建物には時期差があると推定できる。竪穴建物では、7世紀後半～8世紀前半の土器が出土し、掘立柱建物では、8世紀後半の土器が出土していることから、この点は整合性が認められる。

南北に伸びる区画溝SD09は、竪穴建物の上から掘りこまれている点、出土土器から、8世紀後半～末を中心とする時期の遺構であると考えられ、掘立柱建物とほぼ同じ時期の遺構である可能性が高い。また、掘立柱建物が建ち並ぶ範囲より東側に位置し、集落の東端を限る溝であると推定される。単なる区画溝ではなく、防御性の高さもうかがわれ、集落の性格を考えるうえで重要である。

出土遺物については、墨書土器などの特殊な遺物はなく、須恵器と土師器を中心とする食膳具が主体である。ただし、鉄滓や鉄鏃、刀子、釘とみられる鉄製品などが出土し、土師器の焼成土坑SP47がある点は注意すべきで、鍛冶や土器製作を行う自立性の強い有力な集落像を想起させる。

2次調査区の状況と同様に、当初営まれていた一般集落の後に、規格性をもった掘立柱建

物群が建てられたものとみられる。掘立柱建物には柵や溝が伴い、一般集落というよりも、むしろ官衙、あるいは豪族の居宅に関わる建物群であると推定できる。一般集落から掘立柱建物で構成される集落へと変質する時期は、8世紀後半頃であると考えられる。

参考文献

- 大崎哲人 1993「土師器甕の変遷とその背景」『紀要』第6号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 葛野泰樹・吉田秀則 1993「松原内湖遺跡出土の古墳時代後期以降の須恵器と土師器」『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 古代の土器研究会 1992『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』 真陽社
- 田中勝弘 1984「いわゆる近江型土師器に関する一・二の問題」『史想』第20号 京都教育大学考古学研究会
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店
- 奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』

4 平安時代以降

(1) 概要

平安時代の遺構としては、掘立柱建物1棟、井戸1基、小穴10基以上、畦畔とこれに伴う溝、畝状遺構を検出した。畦畔及び溝、耕作の痕である畝状遺構は、ほぼ調査区全域にわたって存在し、耕作地であったことがわかる。

(2) 掘立柱建物 (図41・42)

SB02 SB02は、5区の畦畔の南側で検出された掘立柱建物である。2×1間で、規模は南北4.3m、東西1.84m、平面積7.91㎡を測る。柱穴の形状は、楕円形と方形があり、一定ではなく、柱穴の直径は最大で1.0mである。SP60からは、灰釉陶器小碗(109)が出土した。SP67からは土師器甕の口縁部から胴部片(110)が、SP68からは土師器坏2点(111・112)が出土した。出土土器から、9世紀～10世紀前半の掘立柱建物であると考えられる。

(3) 井戸 (図40・43)

SE01 SX01畦畔に隣接して検出されたもので、平面形は楕円形で、長径2.8m、短径2.3m、深さ1.4mを測る。井戸枠などの施設はなく、素掘りのものである。4区西壁の土層断面(図40)により、土層の検討を行ったが、埋土は上層から、黄灰色粘質土層(4層)、灰色粘質土層(5層)、青灰色粘質土層(6層)、青灰色砂質土層(7層)がみられ、いずれの層にも炭化物を含む。特に、灰色粘質土層(5層)において炭の集中が認められ、井戸の廃絶時において何らかの行為がなされたことが看取される。埋井の祭祀にかかわる行為と推定される。また、6層と7層は、自然堆積によって形成されたものであるが、4層と5層については、土層の堆積において不整合が認められる。このことから、井戸の廃絶状況としては、6層まで自然に堆積した段階において、祭祀にかかわる行為が行われ、その後人為的に埋められることで4層と5層が堆積したのであろう。

4・5層からは灰釉陶器碗(113)と緑釉陶器碗(114)が、6層からは灰釉陶器碗(115)が出土した。114は貼付高台で、近江産の可能性もある。4・5層出土土器から、10世紀前半以降には埋め戻されたものと推定される。畦畔との時期的関係については、畦畔が築造される際にはほぼ同時期に掘削された可能性が高い。

(4) 小穴 (図46)

SP119 長径65cm、短径48cmの平面楕円形の小穴である。119～122の遺物が出土した。119・120・121は、土師器坏である。122は、灰釉陶器長頸瓶の肩部であろう。外面には明緑灰色の釉が施される。出土土器から、9世紀後半の遺構であると考えられる。

SP120 長径55cm、短径38cmの平面楕円形の小穴である。厚さ5～10cm程度の被熱した礫が3つ集積され、その隣から10世紀前半の灰釉陶器大碗片(125)が出土した。125の内外面には緑色の釉がみられ、底部内面には焼成時に別個体を重ねた痕跡が残る。

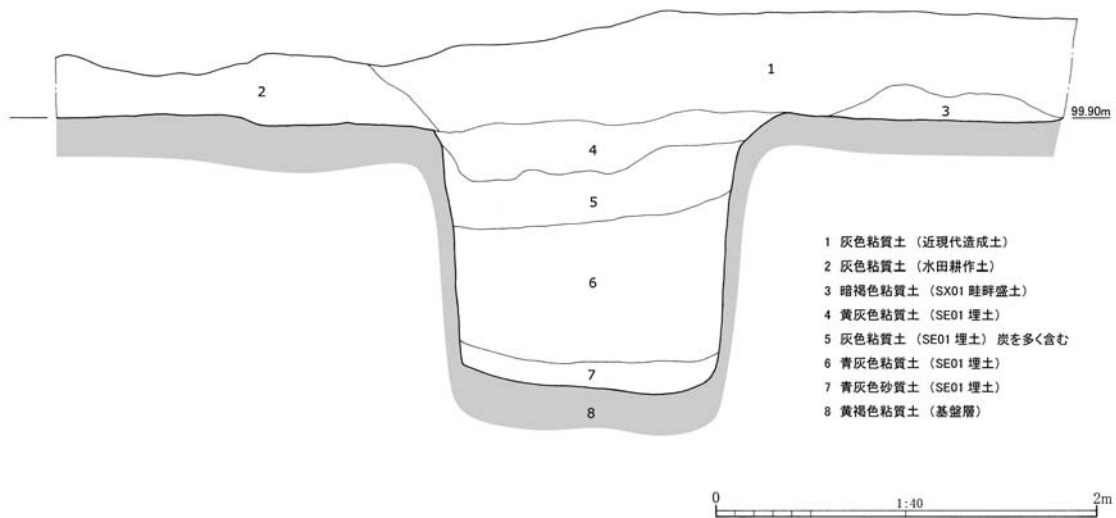


図40 4区西壁 SE01部分土層断面図

SP121 長径53cm、短径40cmの平面楕円形の小穴で、9世紀後半の土師器坏(126)、灰釉陶器碗(127)が出土した。127の外面には緑灰色の釉がみられる。

(5) 畦畔・畝状遺構(図47)

SX01 畦畔SX01は4区から3区にかけて東西方向に伸びており、5区においても東西の畦畔が認められる。4区から3区にかけては、畦畔に隣接して平行する溝SD02・03・04が掘られている。1区においても南北に伸びる溝SD07が検出されている。一方、6区の東端部では、東西のものと直交する南北方向のものがあ、基本的に畦畔と溝、畝状遺構は平行している。畦畔は、基盤層の上に盛土によって築造されている。断面台形を呈し、幅約1.4m、厚さは約20cmである。4区 SX01の直上では、10世紀前半の灰釉陶器碗(129)が出土した。1区 SD07からは、10世紀後半の灰釉陶器碗(128)が出土している。出土遺物から、これらの遺構は、少なくとも10世紀には構築されていたものと考えられる。しかし、包含層では、9世紀代の遺物も出土しており、9世紀にさかのぼる可能性もある。また、畦畔とこれに伴う溝及び畝状遺構については、その後中世・近世と継続して耕作のための地割りとして踏襲され、利用されていたものと考えられる。

(6) 小穴・包含層出土遺物(図48)

小穴出土遺物には、土師器、灰釉陶器と緑釉陶器がある。116は、SP45から出土し、外面に縦方向のヘラ描き沈線のある緑釉陶器碗片である。灰釉陶器としては、SP58から出土した10世紀前半の灰釉陶器碗(117)、SP133から出土した10世紀後半の灰釉陶器碗(123)がある。土師器では、SP112出土の土師器小皿(118)、SP119出土の土師器坏(119)、SP135出土の土師器皿(124)があり、いずれも9世紀代のものである。130～133は、奈良時代の遺構に混入して出土した灰釉陶器碗である。130は9世紀後半、131・132・133は10世紀前半に位置するものである。130の外表面、133の内外面には緑色の釉がみられる。

134～138は、遺構検出面で出土した遺物である。134・135は9世紀前半の灰釉陶器皿、136・

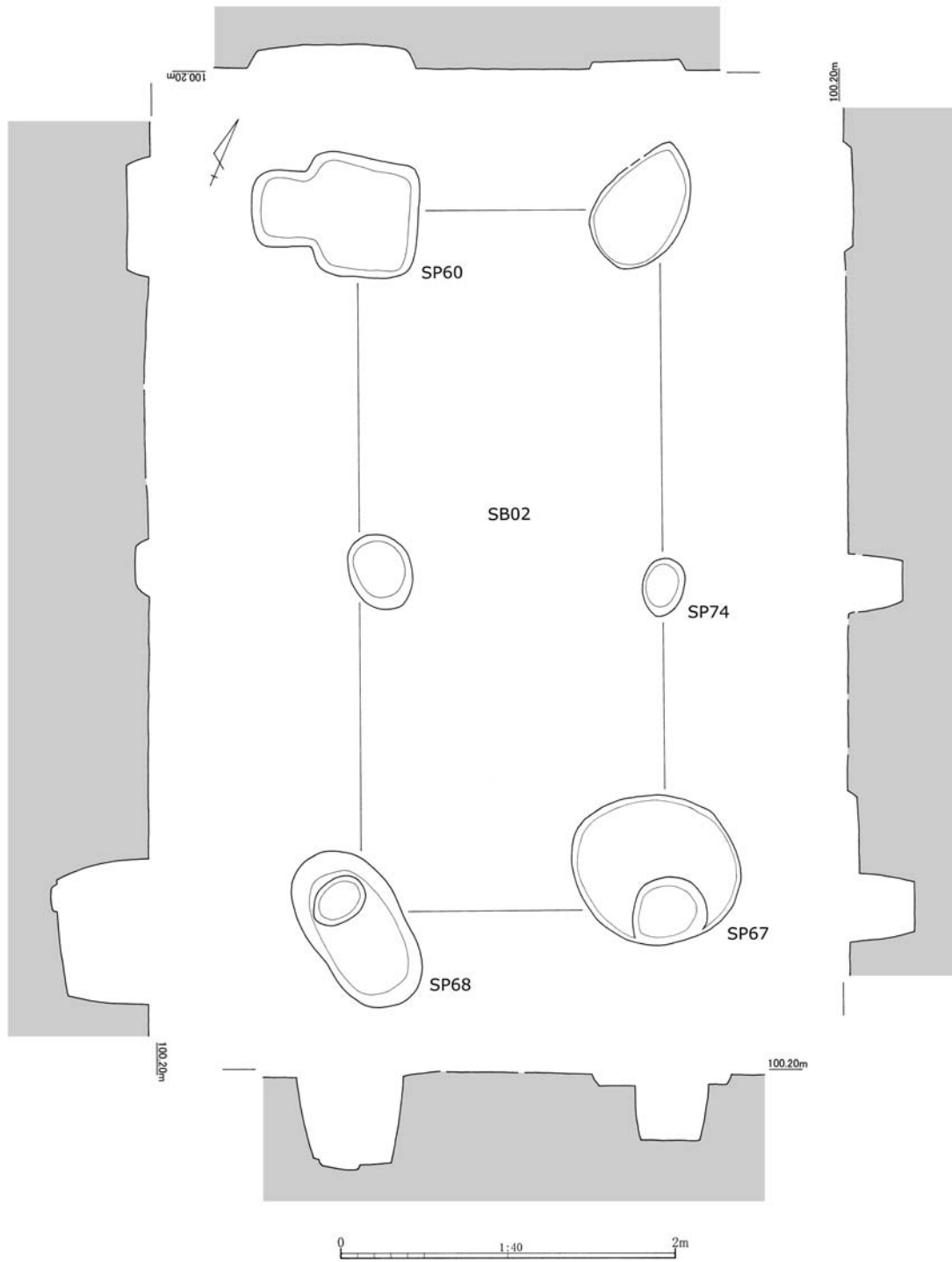


图41 SB02掘立柱建物

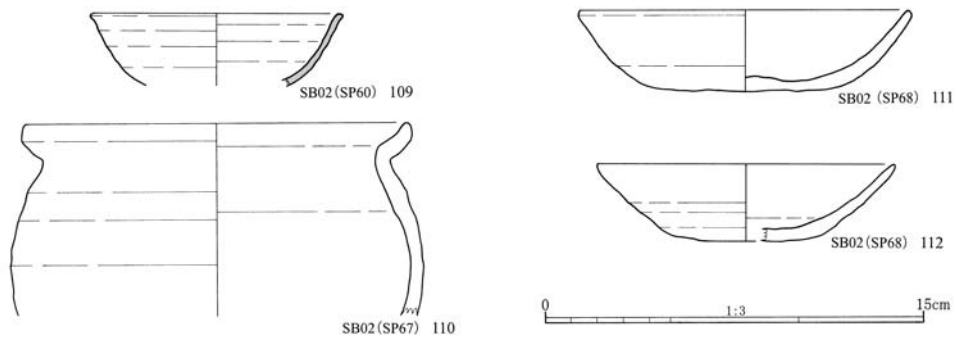


图42 掘立柱建物出土遺物

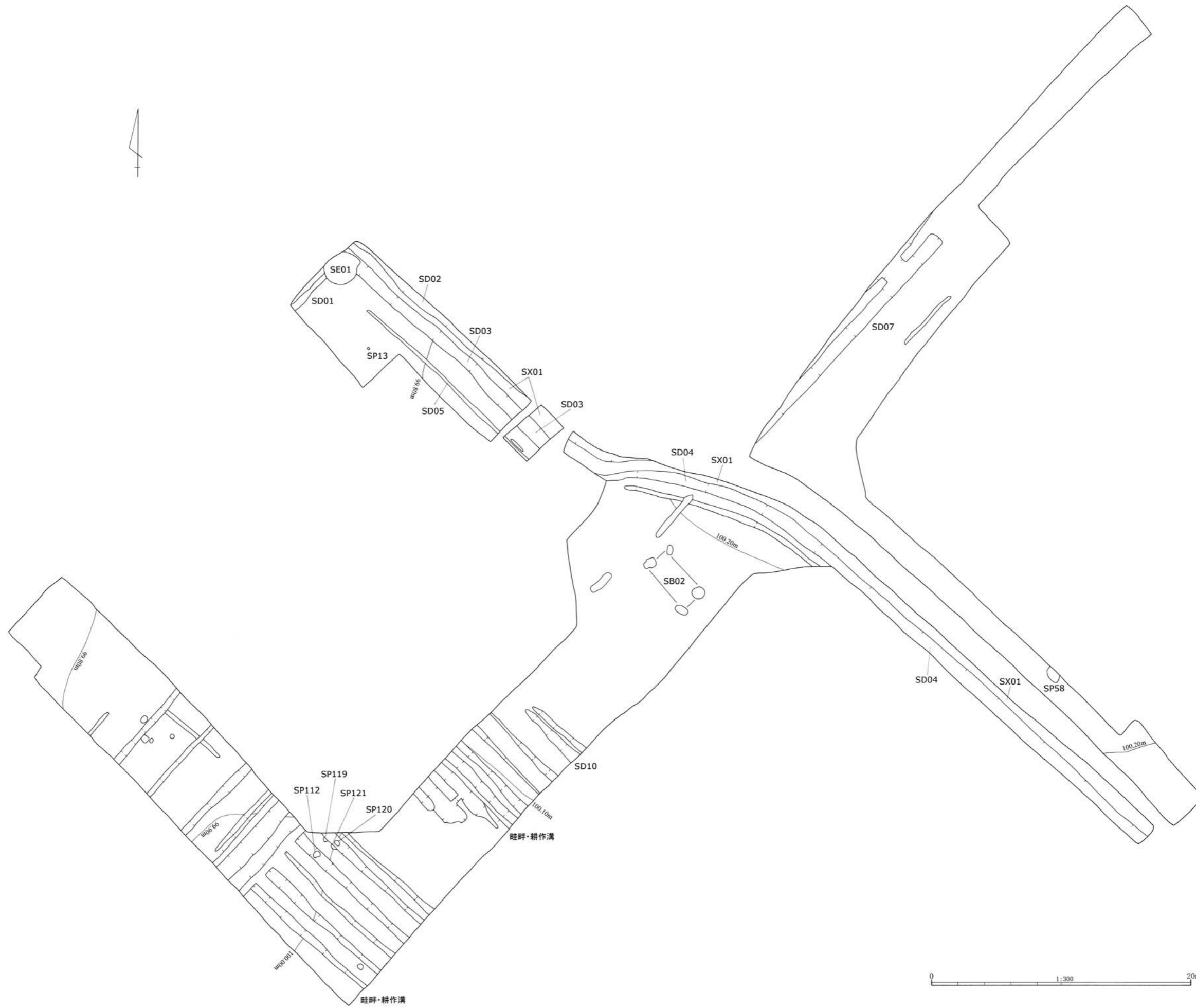


図39 平安時代以降の主な遺構

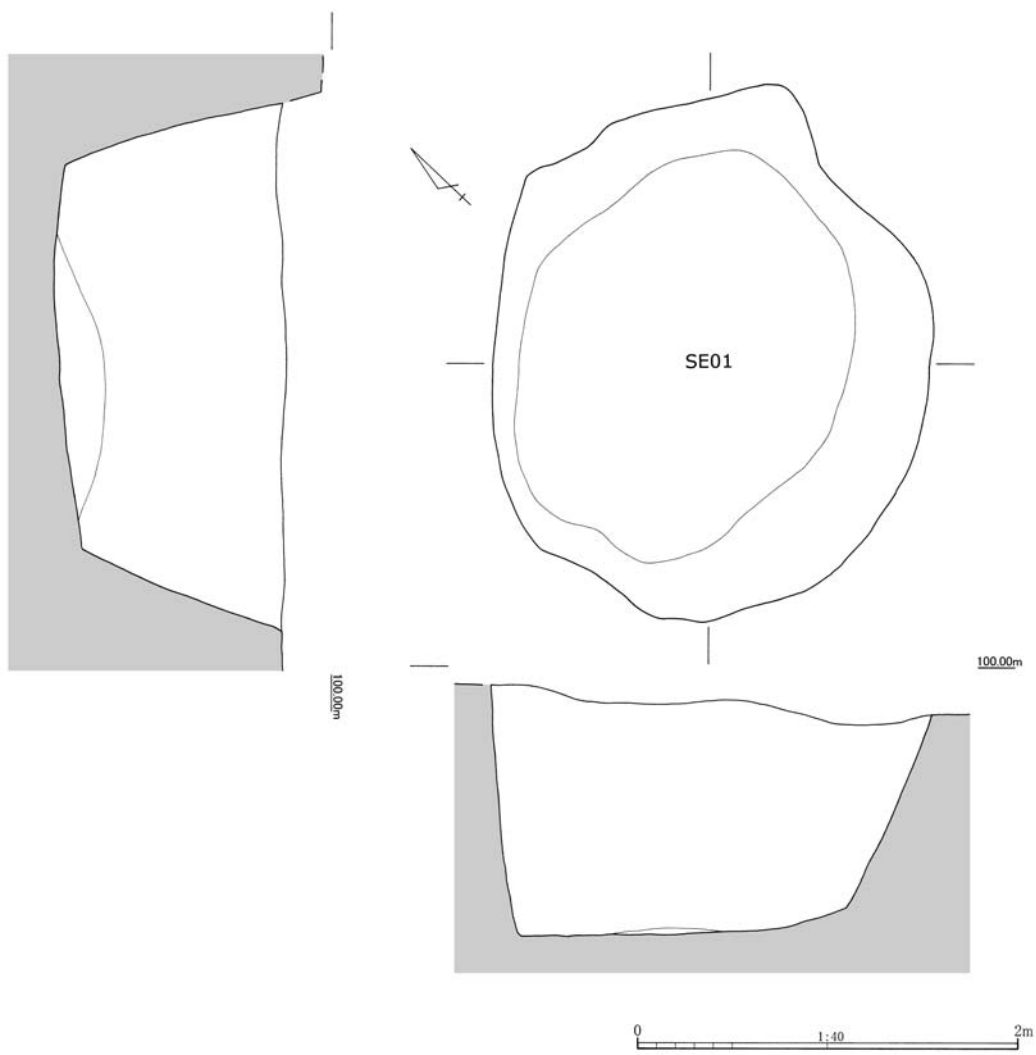


図43 SE01井戸



図44 4区SX01畦畔（西から）



図45 3区SX01畦畔（東から）

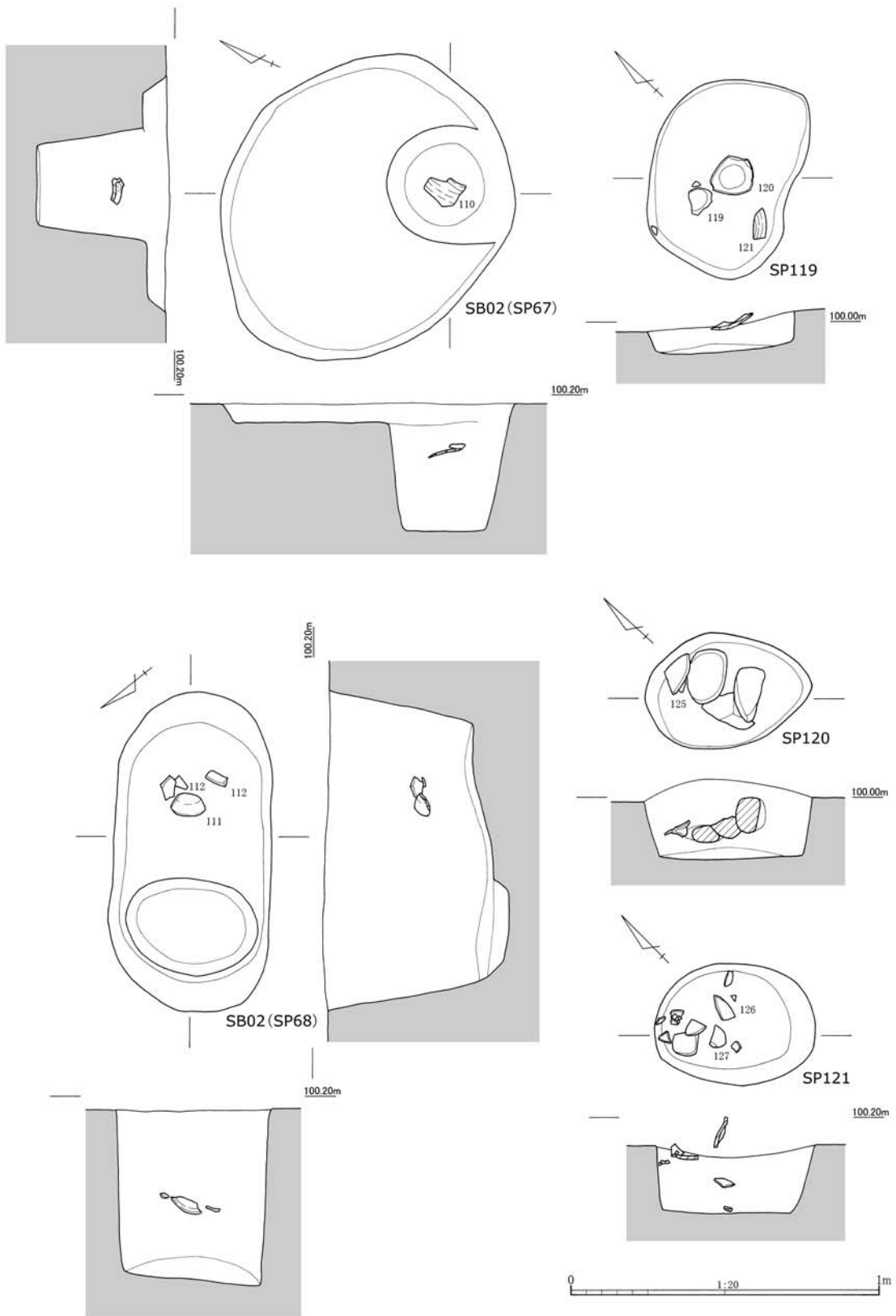


图46 掘立柱建物柱穴、小穴

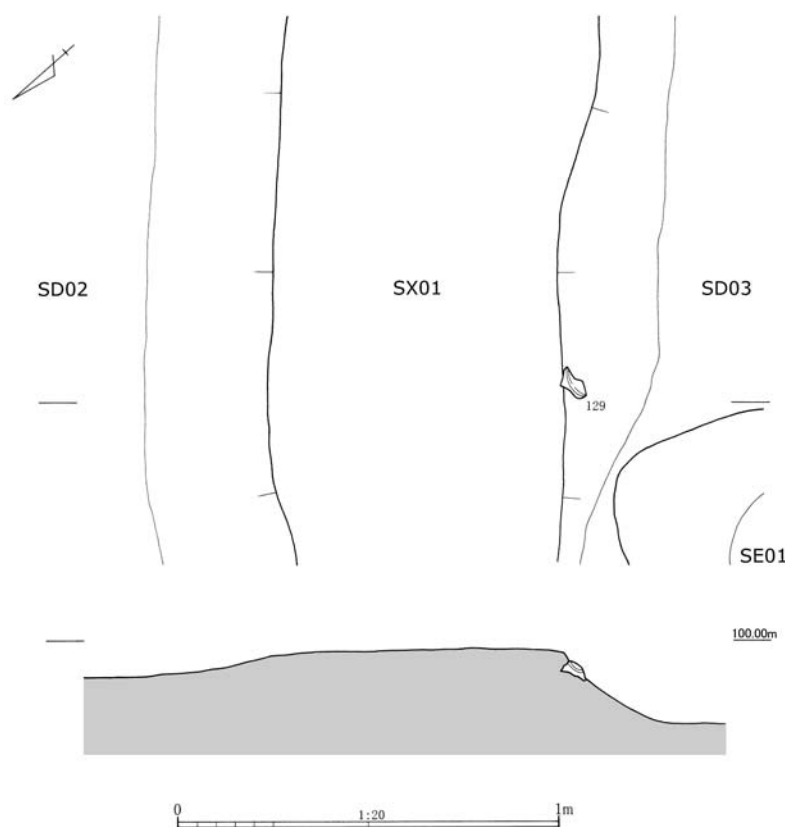


図47 SX01畦畔

137は、9世紀後半の灰釉陶器碗である。138は10世紀前半の灰釉陶器碗である。

(7) 小 結

10世紀、あるいは9世紀まで築造がさかのぼる可能性のある畦畔とこれに伴う溝、畝状遺構は、平行あるいは直交し、方向が一致するなど、一連の遺構と考えられ、9～10世紀以降には耕作地が展開していたと考えられる。ほぼ同時期の掘立柱建物1棟と井戸が検出された点も重要で、建物が密集するような状況ではなく、むしろ小規模な建物が耕作地に散在する、という当該期の集落の様子的一端を知ることができる。こうした平安時代の遺構群は、9世紀後半～10世紀には形成された可能性が高いものと考えられる。

犬上川右岸の氾濫平野における統一条里施行後の開発は、周辺の西今遺跡や須川遺跡などの調査例からも、9～10世紀には活発化したと考えられる。また、周辺部では、12世紀頃には在地領主層の台頭とともに、集住化した中世集落が形成された可能性があり、今後の課題である。このように、平安時代以降の丁田遺跡は、主に耕作地として利用されており、畦畔の方向は、明治期の地籍図に描かれた区画（彦根市史編集委員会2002）とほぼ一致する。耕作地を分ける区画は、中世から近世へと踏襲されているとみてよいであろう。

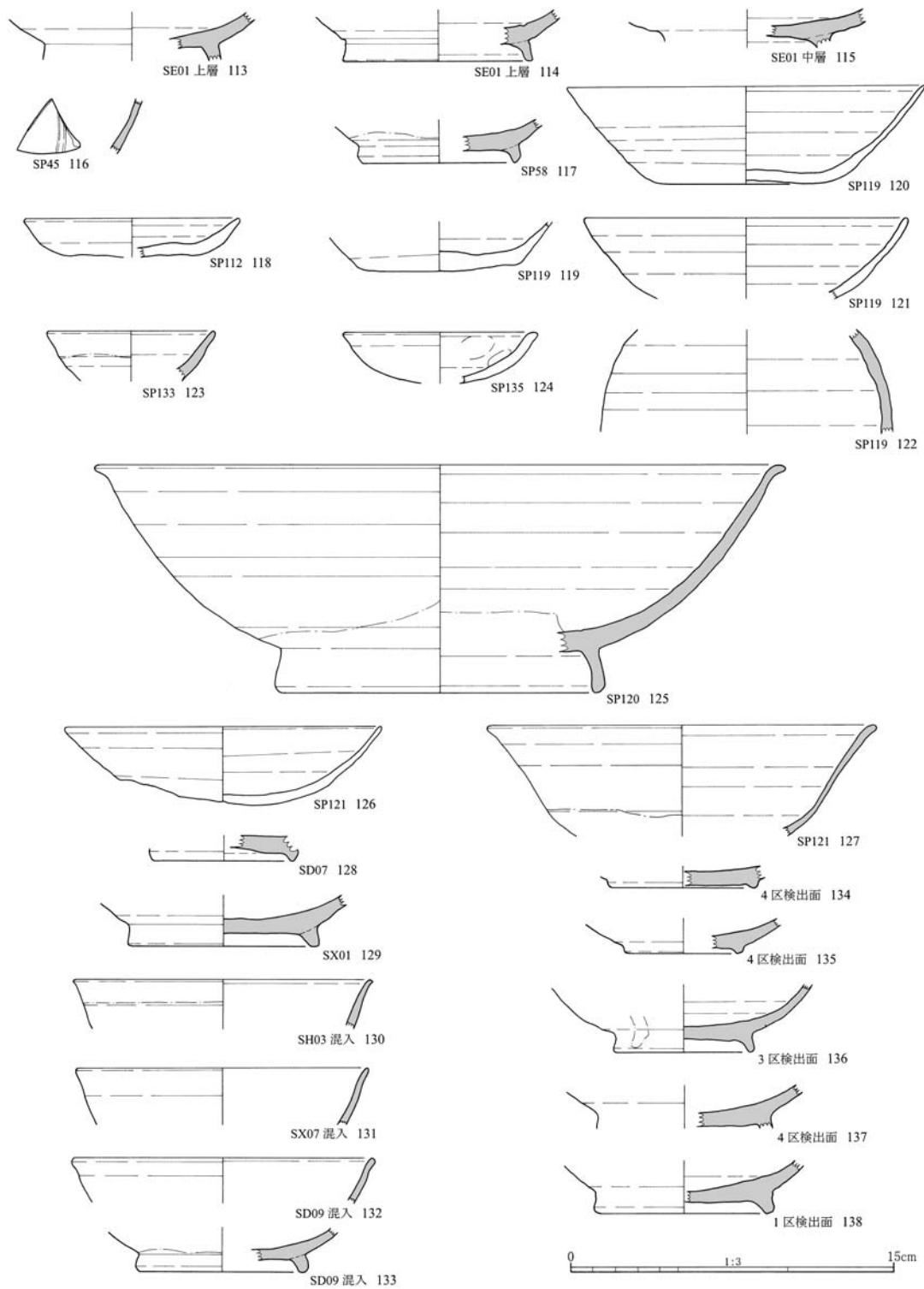


図48 遺構・包含層出土遺物

参考文献

- 駒見和夫 1992「井戸をめぐる祭祀」『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会
- 高橋照彦 1995「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 田中勝弘 1990「平野の開発と集落遺跡」『紀要』第4号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 田中勝弘 2012「古代集落と地域開発（3）—犬上川流域とその周辺における開発経緯の諸相—」『淡海文化財論叢 第四輯』 淡海文化財論叢刊行会
- 彦根市史編集委員会 2002『彦根 明治の古地図2』 彦根市
- 山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

第3章 総括

1 縄文時代の集落

(1) 集落の様相

3次調査区の西側に隣接する2次調査区では、縄文時代中期末（北白川C式期）の包含層と竪穴建物、翡翠大珠を納めた埋設土器、土器を入れ子にした埋設土器、土坑などが検出されていたが、竪穴建物を含めた当該期の遺構が3次調査区においても広がっていることが明らかになった。2次調査では、2軒の竪穴建物が検出されており、3次調査で検出された竪穴建物を含めると、いまのところあわせて3軒の竪穴建物が確認されていることになる。集落の時期としては、2次調査では縄文時代後期初頭（中津式期）の土器もわずかに出土しており、縄文時代中期末（北白川C式期）～縄文時代後期初頭（中津式期）であると考えられる。また、2次調査出土石器に加えて、磨石・敲石、石皿、磨製石斧が出土し、磨石・敲石と石皿を中心に、石斧と石鏃を加えた当該期の石器組成が認められる。チャートの剥片も出土しており、チャートを用いた石器の製作も推定できる。

このように、丁田遺跡は、犬上川流域において、物流、情報交換、交流などにおいて中核的役割を果たした集落であると考えられる。

(2) 今後の課題

丁田遺跡における縄文時代の集落は、縄文時代中期末から後期初頭にかけての時代の変革期に営まれた集落で、翡翠大珠を通じた交易圏と社会的統合の問題、犬上川流域における縄文時代集落の氾濫平野への進出の状況、東日本との交流の様相を考えるうえで重要である。今後も周辺部の調査や縄文時代中期末から集落がはじまり、後期・晩期と展開する福満遺跡との比較検討が期待される。

参考文献

- 瀬口真司 2009「関西地方の縄文集落と縄文社会」『縄文集落の多様性Ⅰ 集落の変遷と地域性』 雄山閣
- 戸塚洋輔 2011「丁田遺跡出土翡翠大珠をめぐる問題」『淡海文化財論叢 第三輯』 淡海文化財論叢刊行会
- 彦根市教育委員会 2011『丁田遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集

2 犬上郡における丁田遺跡の位置

(1) はじめに

丁田遺跡における3次にわたるこれまでの調査では、多数の竪穴建物、掘立柱建物が検出され、建物の築造時期は、奈良時代から平安時代前期であることが明らかになった。ここでは、主に犬上川右岸における集落跡と比較しつつ、当該期の集落像について若干の検討を行いたい。

(2) 古代集落の変質

2次調査では、7世紀後半～8世紀前半の時期に比定できる平面積5㎡以上の竪穴建物、8世紀後半～9世紀初頭頃の平面積4㎡以下の小型の竪穴建物、8世紀後半～9世紀前半の掘立柱建物と柵が検出されている。このことから、丁田遺跡における古代の集落は、はじめは竪穴建物を基本とする一般集落であったが、後に8世紀後半には、掘立柱建物群に小型の竪穴建物が付随する構成に変化したと考えられる。顕著な建て替えの痕跡はみられず、集落の存続期間は比較的短かったものと推定される。そして、8世紀後半～9世紀前半の集落は、柵が伴い、規格性が高いことから、官衙に関わる建物であると推定されていた（彦根市教育委員会2011）。3次調査区においても、8世紀後半以降の掘立柱建物と区画溝SD09が、竪穴建物の上から掘りこまれており、同様な集落の変遷が認められる。2次調査区で検出された建物群は、東側の3次調査区へ連続して展開していることも明らかになった。

(3) 犬上川右岸の古代集落

犬上川右岸における周辺遺跡の状況にもふれておきたい。竹ヶ鼻廃寺遺跡、品井戸遺跡、福満遺跡は、丁田遺跡と同様に氾濫平野における自然堤防上に立地する遺跡である。一方、藤丸遺跡は、芹川にも近い位置関係にある扇状地上の遺跡である。また、八反切遺跡と木曾遺跡は、芹川右岸の扇状地上に立地するが、遺跡の内容が明らかになっている数少ない遺跡としてふれておきたい。

竹ヶ鼻廃寺遺跡 犬上川下流右岸の微高地上に位置する。白鳳時代創建の犬上郡最古の寺院で、郡を代表する古代寺院である。過去10次にわたって調査が行われている（彦根市教育委員会1985・1993・2010a・2010b・2013）。中枢部の発掘調査では、平安時代以降と推定される整地層から多量の瓦や土器が出土するとともに、奈良時代後半～平安時代と推定される多くの掘立柱建物、柵列、井戸が検出された。これらの遺構は、寺院を廃して建てられたものであると推定され、20棟以上の掘立柱建物が検出されている。2×1間、2×2間、3×1間、3×3間、4×2間など多様な建物で構成され、大規模な建物も存在する。奈良時代の竪穴建物も検出されている。円面硯や銅匙が出土し、犬上郡衙の有力な比定地とされる。

品井戸遺跡 竹ヶ鼻廃寺遺跡の北方に位置し、奈良時代～平安時代の掘立柱建物6棟が検出され（彦根市教育委員会1985）、2×1間などの建物がみられる。石帯が出土しており、

竹ヶ鼻廃寺遺跡とともに犬上郡において中心的な位置を占めていたと考えられる。

福満遺跡 品井戸遺跡の北方に隣接する。第4次調査では、平安時代と推定される掘立柱建物4棟が検出されている（彦根市教育委員会1987）。2×2間などの建物がみられる。

藤丸遺跡 丁田遺跡からやや東方に位置する。奈良時代の掘立柱建物5棟、柵1条が検出され（彦根市教育委員会2005）、2×1間をはじめとする建物がみられる。3次調査では、竪穴建物1軒、掘立柱建物2棟が検出され、平瓦が出土した（彦根市教育委員会2013）。

八反切遺跡 藤丸遺跡の北東、芹川の右岸に位置する。2次にわたって調査され、奈良時代～平安時代の掘立柱建物が18棟検出されている（彦根市教育委員会2006・2009）。2×2間、3×2間、4×1間などの建物が検出されている。

木曾遺跡 八反切遺跡の東方、芹川の右岸に位置する。奈良時代の竪穴建物5軒以上と掘立柱建物30棟以上が検出されている（滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会1997・2002、多賀町教育委員会1999）。竪穴建物は8世紀のものである。掘立柱建物には3×2間、3×3間、3×4間などがあり、8世紀後半以降に位置する。8世紀後半になると、居住用建物が、竪穴建物から掘立柱建物へ移行したことがうかがわれる。特筆すべき点として、円面硯が出土している。

奈良時代～平安時代の集落の特徴として、2×1間、3×1間の建物が多く、集落を構成する基本的な単位である可能性が考えられる。また、竹ヶ鼻廃寺遺跡、丁田遺跡、木曾遺跡、藤丸遺跡では、竪穴建物からなる一般集落が確認されている。竹ヶ鼻廃寺遺跡は、建物の規模、数の多さにおいて、突出し、特殊な遺物が出土するなど、通有の集落とは異なるが、竪穴建物が掘立柱建物や柵にきられており、両者には時期差のある可能性が高い。木曾遺跡においても、居住用の建物が、竪穴建物から掘立柱建物へ変化したことがわかる。藤丸遺跡においては、いまのところ、掘立柱建物と竪穴建物との時期的な関係は不明瞭である。

一方、丁田遺跡では、前述したように、やはり竪穴建物のみで集落が構成される段階の後、掘立柱建物と小型で、恒常的な居住用建物とは考えにくい竪穴建物で集落が構成される段階が認められる。こうした竪穴建物は、居住用ではなく、掘立柱建物の補助的な役割ないし倉庫などの特別な用途に用いられたものと推定される。丁田遺跡においては、8世紀後半に到り、居住用建物が、それまで主流だった竪穴建物から掘立柱建物へ比重が移っている。竪穴建物は、掘立柱建物を補完する機能が主になるのであろう。8世紀後半～9世紀初頭は、居住用建物の主流が竪穴建物から掘立柱建物へ移る転換期であるといえよう。そして、掘立柱建物で構成される集落のなかでも、大型の掘立柱建物や柵、溝で構成され、建物に規格性があり、文字資料や硯などの出土する遺跡は、郡衙やこれに関連する遺跡、あるいは、豪族の居宅に相当する可能性が高い。

（4）犬上郡の郡衙遺跡

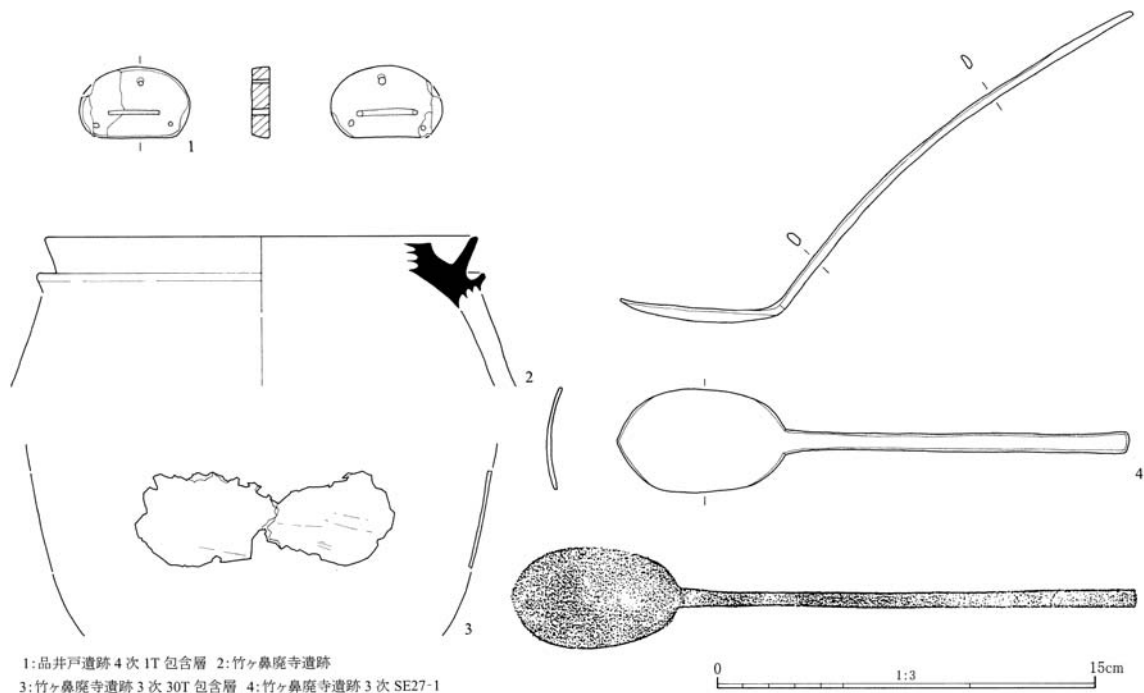
犬上川右岸における古代集落の様相についてみてきたが、このうち、官衙関連、あるいは有力な在地豪族の居宅と推定される遺跡についてみておきたい。

竹ヶ鼻廃寺遺跡・品井戸遺跡

彦根市竹ヶ鼻町に位置する竹ヶ鼻廃寺遺跡は、犬上郡を代表する古代寺院である。これまでの調査で大量の瓦や土器が出土し、多くの掘立柱建物、柵などが検出された。しかしながら、塔跡や金堂跡、僧坊跡などになるような礎石式の建物はみつかっていない。竹ヶ鼻廃寺の中枢部の伽藍は、1995年に行われた3次調査区の南側に位置するJR線路の敷地やその南側に展開していたと想定される（高橋2007）。3次調査区では、平安時代以降と推定される整地層が確認されており、検出された建物の多くが、奈良時代後半から平安時代であることから、寺院が廃絶した後、整地が行われ、掘立柱建物群が建設されたものと考えられる。掘立柱建物群の中枢部であると考えられる3次調査区の調査成果（彦根市教育委員会1996、彦根市史考古部会2004）及び高橋美久二による検討（高橋2007）を基に、大型建物群について再検討してみたい。

掘立柱建物は20棟以上が検出され、大きく北東、北中央、北西、南に分かれる。北東には、規模の大きい3間×3間と3間×4間の総柱建物SB26-1・SB12-1、3間×3間の建物SB25-1、4間×1間の建物SB25-2、4間×1間または3間の建物SB25-3がある。その南には、4間×1間の建物SB26-2、規模の大きい2間×8間の東西棟の総柱建物SB11-1がある。SB11-1は、梁行6m、桁行24mと大規模である。総柱建物（SB26-1・SB12-1）を取り囲むように、柵SA26-1・SA26-2が南北に伸びる。

北中央には長径4m、短径3m、深さ2mの大きな井戸SE27-1を中心に建物と柵が並ぶ。SE27-1の井戸枠は、1m四方の四隅に角材で柱を立て、横に棧を差し込んで柱を繋ぎ、幅



1:品井戸遺跡4次1T包含層 2:竹ヶ鼻廃寺遺跡
3:竹ヶ鼻廃寺遺跡3次30T包含層 4:竹ヶ鼻廃寺遺跡3次SE27-1

図50 竹ヶ鼻廃寺遺跡・品井戸遺跡出土遺物

約18cmの板材を縦にあてたものである。井戸枠 SA27-1・SA27-2は、井戸を囲むように位置し、大きな掘方であるため、掘立柱塀の可能性はある。SB28-1には、廂の存在を示す外周柱穴列がめぐる。

北西には、大規模な3間×8間の建物 SB29-1を中心に、小規模な掘立柱建物群がともなう。SB29-1は、梁行6.6m、桁行18.6mと大規模である。SB29-1の東西には、SB29-3・SB29-6がSB29-1に対して直角に配置され、コの字型の配列となる。その西側には、2間×8間の東西棟の建物がある。また、南側には、東西の掘立柱塀 SA24-1があり、さらにその南にSD24-1が東西に伸びる。SD24-1は、SD23-2、SD11-1とつながる可能性が高く、溝の北側と南側を区画する溝であろう。溝の幅は、90cm程度で、断面は台形を呈する。

南端には、2間×5間の建物 SB31-1、1間×5間の建物 SB7-1がある。SB31-1の東にはSA31-1が付属し、掘方が大きいことから、これは掘立柱塀であると推定される。

このように、3次調査で検出された建物群は、すべて掘立柱式の建物で、官衙に多い規模の大きい長殿や倉庫が柱筋を揃えて規則的に並んでいる。

出土遺物をもても、円面硯が出土し、隣接する品井戸遺跡からは、役人の身分を示す石帯が出土するなど、官衙的な遺物に注目できる。円面硯は須恵質で、脚台を欠損するが、圈足をもち、硯面は陸の面より外縁のほうが高い。圈脚円面硯（吉田1985）で、7世紀末から8世紀代のものであろう。底部に「厨」と墨書された可能性のある須恵器坏身も出土している。

また、井戸 SE27-1からは韓半島から伝わったと考えられる銅匙が出土している。銅匙は、全長23cm、匙部の長さ6.5cm、幅4.1cmで、先端が尖った木の葉形を呈する。柄部は長さ20.4cmで、匙部から約125度の角度で立ち上がり、途中から外反する。成分分析は行われていないが、すこぶる銅質に優れ、おそらく佐波理である可能性が高い。正倉院や法隆寺に伝わる銅匙に類例が認められ、正倉院の伝世品では、匙をくくった反故紙に新羅の文書が使われており、舶載品の可能性が高いとされる。朝鮮半島や中国で出土する匙には2種類あり、丸い形をして中央がくぼむ「勺」と木の葉形の平坦な「匕」とよばれるものがある。本例は、「木葉匕」と呼ばれる舶載品と考えられ（高橋2004）、特に新羅との関係を強く示唆する。関東の事例であるが、相模国府に関わる遺跡と考えられている8世紀代の神奈川県平塚市山王A遺跡では、銅匙が、掘立柱建物の柱穴の覆土から、須恵器の破片の上に置かれた状態で出土している。建物の安全と長久を願い、鎮壇具として埋納されたものと考えられる。山王A遺跡の出土例や法隆寺に伝わる8世紀の例から、本例も当該期ののものであろう。残念ながら詳細な出土状況は不明だが、井戸から出土していることから、井戸の廃絶に際し、井戸鎮めの祭祀行為のなかで埋納されたものと推定される。

銅匙とならび、3次調査30Tの包含層では、残存状態は良好ではないが、金銅製品の破片が出土しており、銅鏡と推定される。口径19cm前後と推定され、厚さ7～8mmである。本体は淡い緑色の青銅で、外面には鍍金が施される。内面は剥離が顕著で、金は認められない。7世紀後半から8世紀代のもものと推定される。県内では、ほかに大津市崇福寺跡で銅鏡

が出土している。7世紀代には、寺院資材帳の成立などから、金属製容器は基本的には伝世を前提として、儀礼的・公的な器物として管理されていたのであろう。ただし、鏡は天皇を超越した最高位者としての仏の食器であり、一部の階級は銅製の食器を日常生活でも使用していたとの考えも強く（金子1996）、仏の供養具以外に、実用の食器として金属器が豪族層の生活に浸透していた可能性も考えられる。いずれにしても、両者ともに、渡来文化の香りのする遺物である。

また、生産関係の遺物では、3次調査区の南に位置する4次調査区において、鞆の羽口片や銅滓が付着した埴塼片が出土するなど、青銅製品を鑄造していた工房の存在がうかがわれる（彦根市教育委員会2010a）。

竹ヶ鼻廃寺遺跡の立地としては、犬上郡の中心に位置し、幹線道である東山道に近い点も注目できる。竹ヶ鼻廃寺遺跡周辺では、ほぼ正南北の地割りが残り、この付近の地割りが、犬上郡統一一条の施行された8世紀前半より古い地割りであることも重要である。

以上のように、立地、官衙的な大型の建物構造とその配置、出土遺物などから、竹ヶ鼻廃寺遺跡は、犬上郡衙に比定できる可能性がきわめて高いものと考えられ（高橋2007）、あらためて強調しておきたい。そして、遺構群のうち、現状では、北東区画を正倉、北中央を厨、北西区画を郡庁、南区画を館と推定しておきたい。その成立時期としては、8世紀中葉と考えられる。

長畑遺跡

甲良町長畑遺跡は、犬上川扇状地の左岸に位置し、扇状地の扇端部付近に立地している。長畑遺跡周辺では、7世紀前半から集落遺跡が増え、100軒以上の竪穴建物や70棟以上の掘立柱建物が検出された下之郷遺跡を中心に、竪穴建物によって構成される集落が営まれ始める。8世紀に入ってもこれらの集落は営まれるが、掘立柱建物のみで構成されるのは8世紀後半以降であり、8世紀中頃までは竪穴建物と掘立柱建物が混在する。このように、竪穴建物から掘立柱建物への建物の変遷が把握されている地域である（甲良町教育委員会社会教育課・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2013）。なお、長寺遺跡では、7世紀末から10世紀後半にかけての須恵器、灰釉陶器とともに多量の瓦が出土し、付近における古代寺院の存在を示唆している。

では、1983年・1984年及び2011年・2012年の調査成果（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2002、高橋2007、甲良町教育委員会社会教育課・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2013）を確認しておきたい。1983・1984年の調査で検出された遺構は、第1期（7世紀前半から中頃）、第2期（7世紀末から8世紀初頭）、第3a期（8世紀中頃）、第3b期（9世紀前半）、第4期（9世紀後葉から10世紀）に分けられて報告されている。このうち、掘立柱建物の主なものは、第3a期と第3b期に位置する。大規模な建物がコ字状に配され、主体となるのは第3a期である。南北ないし南面に廂をもつ正殿風の東西棟建物を南北に3列配し、それぞれに脇殿風建物を付設する。西側には付属の倉庫群を配する。第3b

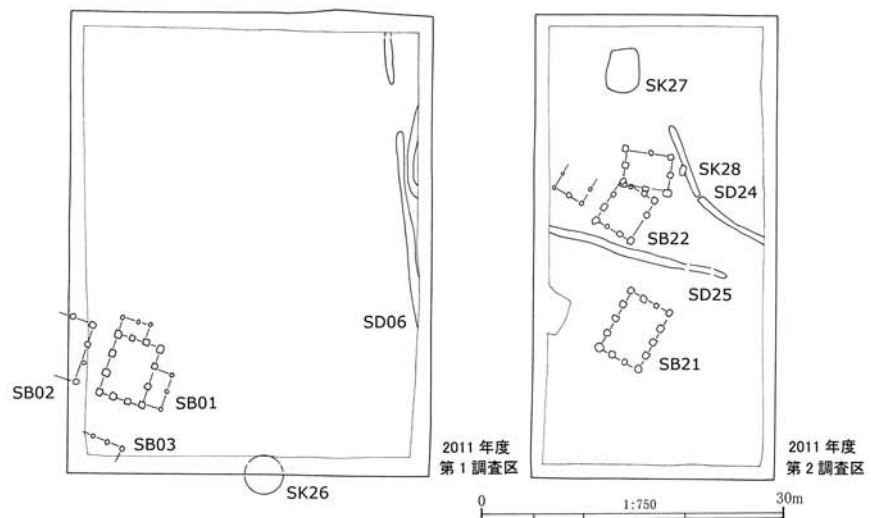
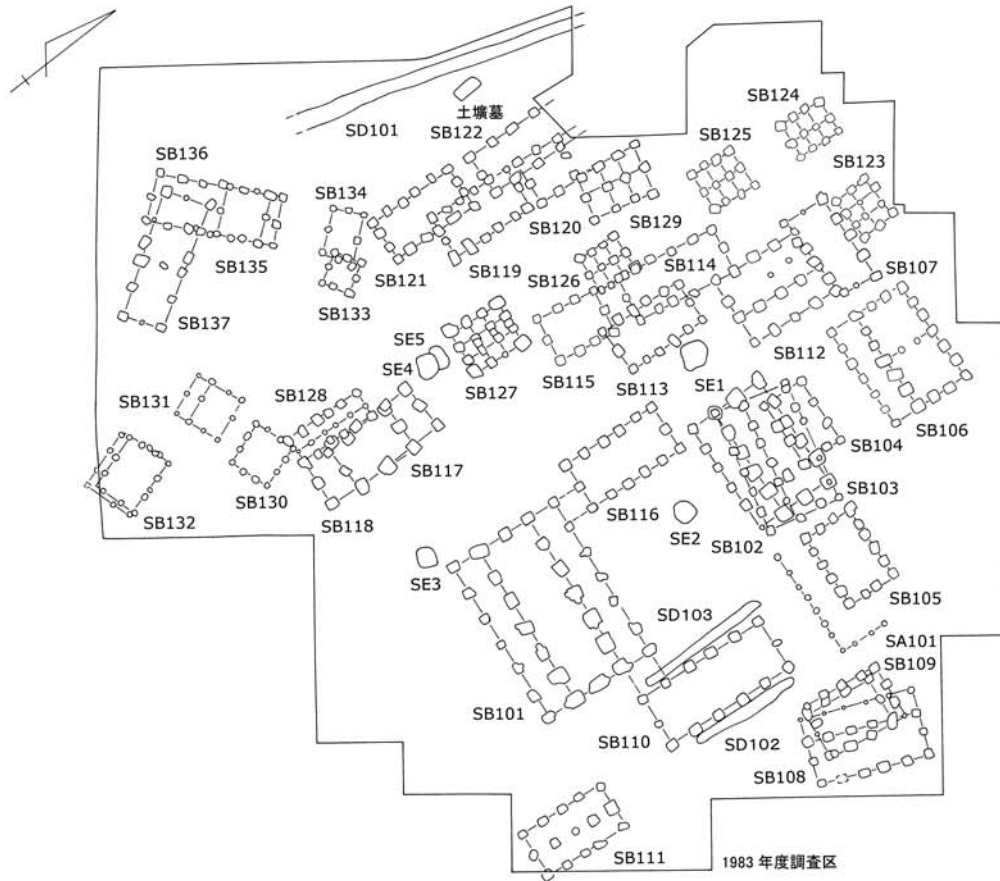


図51 長畑遺跡における8世紀後半～9世紀前半の主な遺構

期には、第3a期より主軸を東に振る5棟の建物で構成される。南側には、廂をもつ東西棟建物とその両側に南北棟建物を配して、西側に倉庫を配置する。約50m四方内におさまる規模の建物群である。

また、2011年・2012年の調査では、1983・1984年の調査区の東側において、第3a期、あるいは第3b期のなかでとらえられる5棟の掘立柱建物が検出されている（甲良町教育委員会社会教育課・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2013）。1983・1984年調査区で検出された中心的な建物群の付属的な施設と想定されている。

このように、大規模な建物が規格性をもって配置されている点は注目できる。ただし、出土遺物としては、鍛冶工房の存在をうかがわせる鉄滓が出土しているものの、木簡や墨書土器、硯などの官衙的なものはない。こうした点を考慮すると、長畑遺跡における奈良時代後半から平安時代前期にかけての掘立柱建物群により構成される集落は、犬上郡の在地豪族の居宅と位置づけるのが妥当であろう。この点については、郡家の下部の施設である尼子郷家の可能性を指摘する考え（高橋2007）もある。長畑遺跡と古代東山道が近い位置関係にあることも、豪族居宅の成立とは無関係ではなからう。

丁田遺跡

丁田遺跡では、前述したように、8世紀後半に到り、居住用建物が、それまで主流だった竪穴建物から掘立柱建物へ比重が移り、竪穴建物は、掘立柱建物を補完する機能が主になるものと考えられる。ここでは、8世紀後半～9世紀前半の大型の掘立柱建物や柵、溝で構成される時期の建物群について、1～3次調査の成果をふまえて整理しておきたい。

2次調査区では、並列するSB01とSB06が注目される。SB01は、長さ7.6m、幅4.7m、3間×1間の掘立柱建物である。柱穴は方形ないし円形で、大きいもので径0.72mである。SB06については、廂をもたない建物として報告されていたが（彦根市教育委員会2011）、再検討により、廂をもつ建物である可能性の高いことが判明したので、改めて報告する。SB06は、桁行10.06m、梁行4.6m、4間×1間の掘立柱建物である。北側と東側の2面に廂をもち、廂部分をあわせると、桁12.8m、梁行6.8mとなる。建物部分の柱穴は方形で、最大で0.96mである。廂部分の柱穴は円形に近く、大きいもので径0.84mである。両者の長軸は平行し、その東西南北には柵が方形にめぐる。また、掘立柱建物の周囲には、倉庫などの特殊な用途が想定される小型の竪穴建物が隣接する。調査区北東部では、方形で、径1.28mの大型の柱穴が検出されており、北東部の調査区外にまたがって大型の建物が存在する可能性が高い。

3次調査区では、4区の西端でSB01が検出されている。柱穴は方形、径1.24mで、やはり南側の調査区外にまたがって大型建物が存在するものと推定できる。柱穴SP39では、完形の須恵器坏蓋が内面を上にした状態で底に置かれ、地鎮にかかわるものとみられる。6区西端においては、SB03とSB06が検出されている。調査区外へ展開しているため、全体は不明であるが、ともに柱穴は方形で、径1m以上と大きいことから、大型の建物であろう。

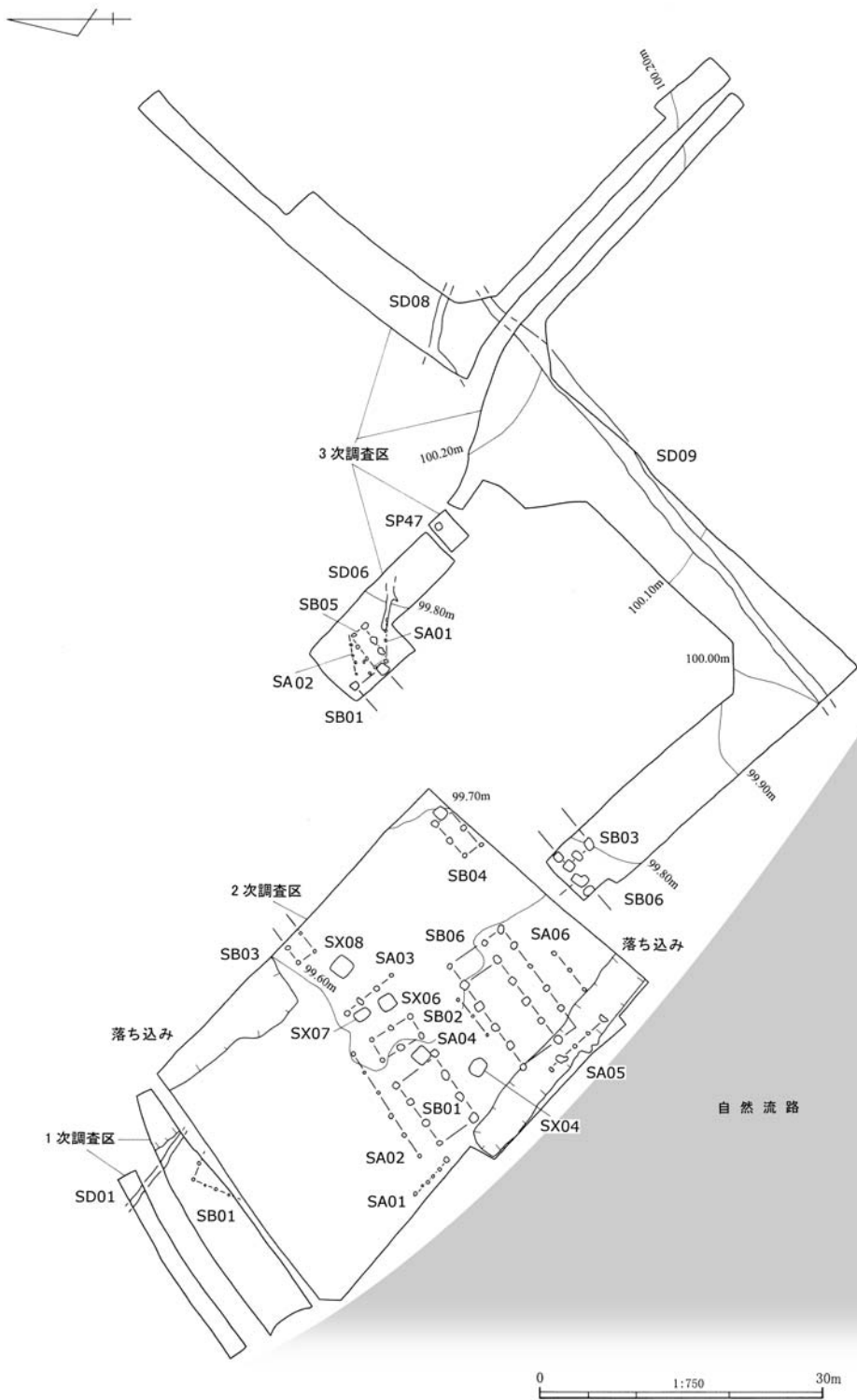


図52 丁田遺跡における8世紀後半～9世紀前半の主な遺構

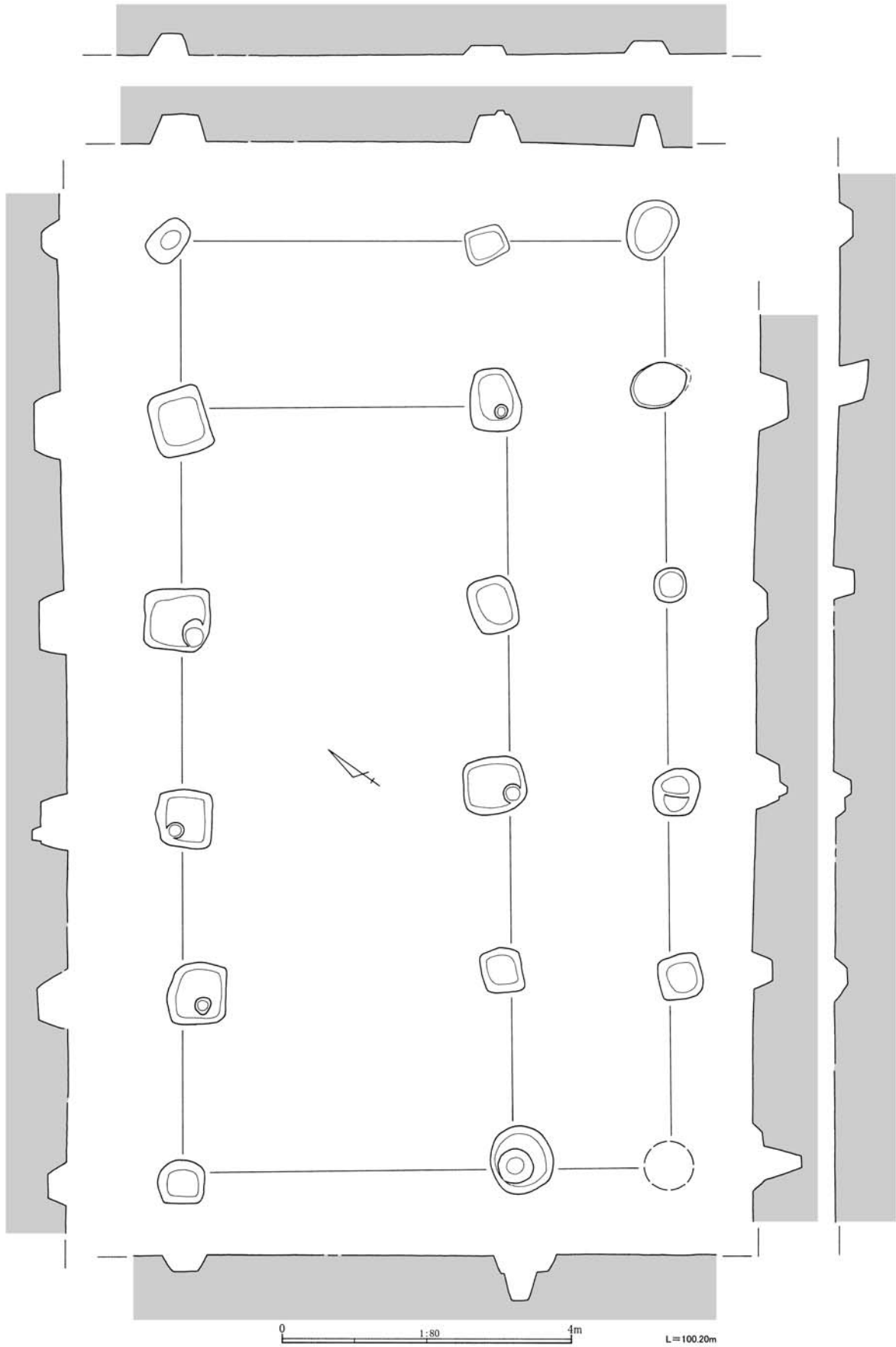


图53 丁田遺跡 2次調査 SB06掘立柱建物

建物群の東側では、8世紀後半～末に位置し、掘立柱建物とほぼ同じ時期に併存していたと考えられる区画溝SD09が、南北に走り、建物群の東端を限るものと推定される。北側では、SD08も検出されたが、SD09との位置関係において直交しておらず、少し南西へ振った角度で掘削されている。また、従来の調査では、西側と南側においてこうした溝は検出されておらず、溝が四方をめぐるかどうかは不明瞭である。これらの溝は、建物群の区画溝としての機能のほかに、防御を意識して掘削された可能性も考えられる。なお、南側は犬上川の支流である自然流路に面している。

生産関係の遺構・遺物として、SD09などから鉄滓が出土しており、集落の一角で小規模な鍛冶が行われ、鉄製品が生産されていた可能性が高い。また、土師器を焼成していたとみられる土坑SP47の検出により、集落内における土器製作も想定できる。このように、鍛冶や土器製作を行う自立性の強い有力な集落像を想起させる。

出土遺物については、墨書土器などの特殊な遺物はなく、須恵器と土師器を中心とする食膳具が主体で、輪状摘みを持つ須恵器坏蓋が散見される。これに加え、鉄滓や鉄製品、平瓦が出土している。

(5) 犬上郡高宮郷と丁田遺跡

犬上川右岸の古代集落、犬上郡の郡衙遺跡について検討を加えてきたが、最後に、丁田遺跡の掘立柱建物で構成される集落の性格について考えてみたい。

奈良時代後半～平安時代初頭の変革期においては、政治情勢の変化により、各地で国衙や郡衙が移動する現象が指摘されており、検討してきたように、犬上川流域における集落の再

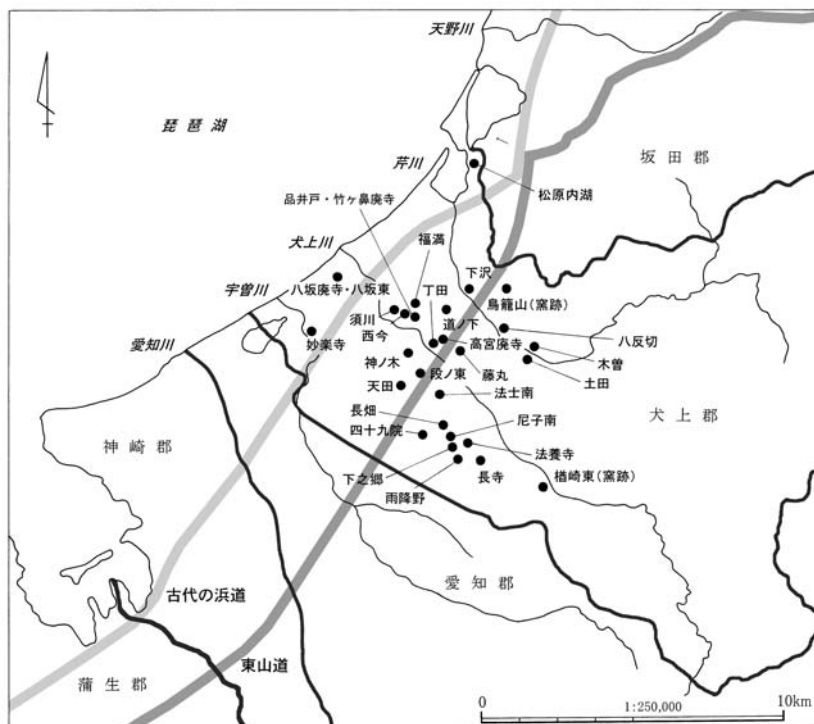


図54 犬上郡における古代の主な遺跡と交通路

編においてもこうした動きと連動している可能性がある。こうした動きのなかで、竹ヶ鼻廃寺遺跡においては犬上郡衙が成立し、長畑遺跡では豪族居館が出現するのであろう。長畑遺跡については、犬上川左岸の集落のなかでその性格を考えていく必要がある。そして丁田遺跡では、一般集落から掘立柱建物を主体とする集落へと変貌を遂げる。倉庫と居館を含む大型建物群、区画溝、柵

で構成される集落であり、鉄製品や土師器の生産が行われているが、現在のところ、墨書土器や硯などは出土していない。これらの点から、いまのところ、丁田遺跡の掘立柱建物群は、在地の有力豪族の居宅であると考えられる。あるいは、郡の下部単位で、文献に残る高宮郷との関連から、高宮郷家であった可能性もあり、在地の豪族が郷長に任命される場合が多いことを考えると、両者が不分離な状態であったことも考えられる。つまり、国衙・郡衙といった公的な施設と並んで、豪族の居宅が公的な役割を担っていたことも想定される（広瀬1989）。しかしながら、郷長の居宅と郷家との関係は不明瞭であり、問題を残している。

丁田遺跡の周辺では、北側に高宮廃寺が、西側に竹ヶ鼻廃寺が位置している点に注目され、双方とも犬上郡の中心的な白鳳時代の寺院であり、寺院の造営には有力氏族の意向が大いに関係していると考えられる。遊行塚遺跡として知られる高宮廃寺推定地では、藤原宮式の瓦が出土し、藤原宮の造営に関わった氏族との関連が推定される。これらの寺院や奈良時代から平安時代前期の掘立柱建物で構成される集落が、東山道沿いとその東側に位置している点も重要であり、主要な幹線道路である東山道に沿って、郡の中核施設や豪族居宅が造営されたのであろう。地域の開発に着手した在地の有力な氏族が、律令制のもとでもその勢力を保ち、地域開発を主導していったものと考えられ、丁田遺跡における豪族居宅は、至近に位置する高宮廃寺の建立に関わった有力氏族に関わるものと推定しておきたい。東山道沿いに位置する丁田遺跡の東方では、藤丸遺跡、八反切遺跡、土田遺跡、木曾遺跡が、北方には瓦と須恵器を焼成した窯跡の検出された鳥籠山遺跡、鳥籠山付近に所在地が比定されている鳥籠駅が位置する。このうち、藤丸遺跡は高宮郷に関わる集落であると推定される。鳥籠山付近からほど近い木曾遺跡で円面硯が出土している点は、鳥籠駅と駅家郷の所在地との関係も含めて注意が必要である。東山道を北方の小野方面へ抜ければ、坂田郡の南端の六反田遺跡があり、松原内湖を通過して入江内湖、朝妻湊へ向かう人や物資を管理する物流拠点であったとみられている（堀2012）。西方には、犬上郡衙と目される竹ヶ鼻廃寺遺跡をはじめ、郡衙関連施設の存在が想定される品井戸遺跡、福満遺跡が位置する。鳥籠山遺跡の窯跡は瓦陶兼業窯で、焼成された山田寺式瓦は竹ヶ鼻廃寺へ流通しており、窯の経営には犬上郡衙の郡司が関与していたと考えられる。このように、竹ヶ鼻廃寺遺跡周辺を中心として、東山道を介した集落間の交通網が構築され、地域支配、地域開発が展開されたのであろう。高宮廃寺及び丁田遺跡は、竹ヶ鼻廃寺遺跡に準じる位置として、ともにその重要な一角を占めていたと考えられる。

その後、丁田遺跡の豪族居宅は、9世紀には廃絶し、その後、一帯は長く水田、畑地として利用されることになる。10世紀、あるいは9世紀まで築造がさかのぼる可能性のある畦畔とこれに伴う溝、畝状遺構は、平行あるいは直交し、方向が一致するなど、一連の遺構と考えられ、9～10世紀以降には耕作地が展開していたと考えられる。犬上川右岸の氾濫平野における統一条里施行後の新たな開発は、周辺遺跡の調査例からも、9～10世紀には活発化したと考えられる。周辺部では、12世紀頃には在地領主層の台頭とともに、集住化した中世集

落が形成された可能性があり、今後の課題である。なお、耕作地を分ける区画は、明治期の地籍図に描かれた区画とほぼ一致し、中世から近世へと踏襲されているとみてよい。

参考文献

- 雨森智美 1990「各地の郡衙遺跡と岡遺跡」『岡遺跡発掘調査報告書1次・2次・3次調査』 栗東町教育委員会・財団法人栗東町文化体育振興事業団
- 大崎哲人 1989「滋賀県下における掘立柱建物集落の成立契機について」『紀要』第2号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小笠原好彦 1989「高宮廃寺」『近江の古代寺院』 真陽社
- 金子裕之 1996「鏡は仏の食器」『木簡は語る 歴史発掘12』 講談社
- 北村 圭弘 1992「近江の古代寺院研究の基礎資料Ⅱ」『滋賀文化財だより』No. 172 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 甲良町教育委員会社会教育課・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2013『長畑遺跡』古河 AS 株式会社事務棟等建設工事に伴う発掘調査報告書
- 滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 1997『木曾遺跡Ⅱ』
- 滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 2002『木曾遺跡・土田遺跡・月ノ木遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2002『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』
- 滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会 2011『松原内湖遺跡Ⅱ』
- 多賀町教育委員会 1999『木曾遺跡(第2次～第7次調査)』多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 高橋美久二 2004「古代寺院の資料」『新修彦根市史』編さんに伴う彦根市内遺跡・遺物調査報告書』彦根市教育委員会
- 高橋美久二 2007「律令国家と近江」『新修彦根市史 第1巻通史編古代・中世』彦根市
- 田中勝弘 2003「聖武天皇の東国行幸と壬申の乱—大津市膳所城下町遺跡の大型掘立柱建物を「禾津の頓宮」とする考えの参考に一」『人間文化』13号 滋賀県立大学人間文化学部
- 田中勝弘 2012「古代集落と地域開発(3)—大上川流域とその周辺における開発経緯の諸相—」『淡海文化財論叢 第四輯』淡海文化財論叢刊行会
- 植崎彰一 1982「日本古代の陶硯—とくに分類について—」『考古学論考』平凡社
- 奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』
- 奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』
- 彦根市教育委員会 1985『竹ヶ鼻廃寺・品井戸(第4次)』彦根市埋蔵文化財調査報告第8集
- 彦根市教育委員会 1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第13集
- 彦根市教育委員会 1992『鳥籠山遺跡発掘調概要報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第23集
- 彦根市教育委員会 1993『竹ヶ鼻廃寺発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 彦根市教育委員会 1996『竹ヶ鼻廃寺発掘調査現地説明会資料』
- 彦根市教育委員会 2005『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第37集

- 彦根市教育委員会 2006『八反切遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第38集
- 彦根市教育委員会 2009『丁田遺跡Ⅰ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第43集
- 彦根市教育委員会 2009『八反切遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第42集
- 彦根市教育委員会 2010a『竹ヶ鼻廢寺遺跡Ⅳ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第45集
- 彦根市教育委員会 2010b『竹ヶ鼻廢寺遺跡Ⅴ・Ⅵ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第46集
- 彦根市教育委員会 2011『丁田遺跡Ⅱ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第48集
- 彦根市教育委員会 2013『竹ヶ鼻廢寺遺跡Ⅶ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第54集
- 彦根市教育委員会 2013『藤丸遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第53集
- 彦根市史考古部会 2004『『新修彦根市史』編さんに伴う彦根市内遺跡・遺物調査報告書』彦根市教育委員会
- 広瀬和雄 1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集
- 細川修平 1990「昭和63年度調査」『高野・辻遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 堀 真人 2012「琵琶湖を取り巻く物流拠点—彦根市六反田遺跡の調査成果から—」『人間文化』32号
公立大学法人滋賀県立大学人間文化学部
- 宮崎幹也 1988「犬上川左岸扇状地における律令期集落の発生と展開」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』2号
- 桃崎祐輔 2000「風返稻荷山古墳出土銅鏡の検討」『風返稻荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
- 山中敏文 1998「律令国家の地方末端支配機構—研究の現状と課題—」『律令国家の地方末端支配機構をめぐって—研究集会の記録—』奈良国立文化財研究所
- 横浜市歴史博物館 2002『東へ西へ—律令国家を支えた古代東国の人々—』
- 吉田恵二 1985「日本古代陶硯の特質と系譜」『國學院大學考古学資料館紀要』第1輯 國學院大學考古学資料館

挿図出典

- 図49：彦根市教育委員会1996・高橋2007をもとに作成
- 図50 1：彦根市教育委員会1985を改変トレース 2・4：高橋2004を改変トレース
- 図51：甲良町教育委員会社会教育課・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2013を改変トレース
- 図54：高橋2007をもとに作成

表3 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	細別	残存率 (%)	反転 図化	器径 幅 (cm)	器高 長さ (cm)	口径 厚さ (cm)	色調	その他
1	6区西端部4層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
2	6区西端部4層	縄文土器	深鉢	5					浅黄橙色	
3	6区西端部4層	縄文土器	深鉢	5					黒色	
4	2区遺構検出面	縄文土器	深鉢	5					黒褐色	
5	6区西端部4層	縄文土器	深鉢	5					にぶい黄橙色	
6	SK12	縄文土器	深鉢	5					黄灰色	
7	SK12下層	縄文土器	深鉢	5					褐色	
8	SK12下層	縄文土器	深鉢	5					黒色	
9	SX08混入	縄文土器	深鉢	5					黒褐色	
10	SX09混入	縄文土器	深鉢	5					灰色	
11	SD11	縄文土器	深鉢	5					赤褐色	
12	SP173	縄文土器	深鉢	5					黄灰色	
13	SP178	縄文土器	深鉢	5					褐色	
14	SX04	石器	石皿	60		13.8	11.5	4	灰黄色	870g、湖東流紋岩
15	SP160混入	石器	磨石	100		12.3	10.4	2.9	灰白色	590g、湖東流紋岩
16	5区遺構検出面	石器	敲石	100		4.6	9.2	4.1	灰色	258g、湖東流紋岩
17	6区西端部4層	石器	磨製石斧	70		4.55	7.6	1.8	明オリーブ灰色	116g
18	SX03下層	石器	石皿	20		4.1	9.1	1.7	暗灰色	
19	SH01上層	土師器	甕	50	反	14.5	13.5	14	にぶい橙色	
20	SH02	土師器	坏	10	反			15.2	灰白色	
21	SH02	土師器	甕	10	反			14	黄灰色	
22	SH03	須恵器	坏身	20	反			12	明灰色	
23	SH03	土師器	甕	10	反			14	灰白色	
24	SH03	須恵器	甕	20	反	33			灰色	
25	SH05	土師器	甕	20	反				にぶい橙色	
26	SH06	土師器	坏	5	反			16	灰色	
27	SH07	土師器	皿	10	反		1.5	13	浅黄橙色	
28	SH07	土師器	甕	10	反			14.9	浅黄橙色	
29	SB01 (SP39)	須恵器	坏蓋	100			3.3	15.4	灰色	
30	SB03 (SP152)	土師器	甕	5					灰白色	
31	SB03 (SP152)	鉄滓		100		2.8	3.8	2.3		
32	SB03 (SP160)	鉄製品	釘状	100		1.1	6.05	1		刀子状鉄製品が錆着
33	SB03 (SP179)	鉄製品		30		2	2.7	0.4		鉄鍍の可能性
34	SK01	土師器	皿	5	反				灰白色	
35	SK02	土師器	坏	5	反			12	褐色	
36	SK05	須恵器	平瓶	10	反				灰白色	底径14.2cm
37	SK05	須恵器	坏身	10	反			12.2	灰白色	
38	SK05	土師器	坏	15	反		4.7	13.4	褐色	
39	SK05	土師器	皿	30	反		1.3	17	灰白色	底径10.0cm
40	SK05	須恵器	坏身	5	反			12.8	灰白色	
41	SK05	須恵器	坏身	10	反			13	灰白色	
42	SK08	土師器	坏	25	反		3.2	11.3	浅黄色	底径7.7cm
43	SK09	土師器	坏	10	反			12.4	浅黄色	
44	SK09	土師器	坏	10	反				黄橙色	底径8.6cm
45	SK11	土師器	坏	10	反			15	灰白色	
46	SK11	須恵器	坏身	5	反			14	灰白色	
47	SX02	土師器	坏	10	反			14.9	褐色	
48	SX03	須恵器	坏蓋	40	反			11.6	灰白色	
49	SX03	須恵器	坏蓋	15	反		2	14.4	青灰色	
50	SX03下層	須恵器	坏蓋	15	反			13	灰白色	
51	SX03上層	須恵器	坏蓋	10	反			15	灰白色	
52	SX03	須恵器	坏身	10	反			11.2	灰色	
53	SX03下層	須恵器	坏身	10	反			11.6	灰色	
54	SX03下層	須恵器	坏身	10	反				灰色	底径7.2cm
55	SX03	土師器	坏	5	反			15.9	褐色	
56	SX03下層	土師器	坏	10	反			12	灰白色	
57	SX05下層	須恵器	坏蓋	5	反				青灰色	
58	SX05下層	須恵器	坏蓋	10	反			14.2	青灰色	
59	SX05下層	須恵器	長頸壺	5	反			11.4	灰色	
60	SX05下層	須恵器	坏身	10	反			12	青灰色	
61	SX05	須恵器	坏身	10	反				明オリーブ灰色	底径10.0cm
62	SX05	須恵器	長頸壺	20	反				青灰色	底径13.1cm
63	SX05下層	土師器	坏	10	反			12.8	褐色	
64	SX07	土師器	坏	20	反				浅黄褐色	底径9.0cm
65	SX07	瓦	平瓦	30				2.3	明褐色	
66	SX09	土師器	坏	25	反				灰黄褐色	底径8.8cm
67	SX09	土師器	皿	5	反			14	灰白色	
68	SD09	須恵器	坏身	5	反			14	灰白色	
69	SD09	須恵器	坏身	5	反			15	灰白色	
70	SD09	土師器	坏	10	反			12.7	浅黄褐色	
71	SD09	土師器	坏	10	反			12.5	灰白色	
72	SD09	土師器	甕	5	反			14	褐色	
73	SD09	須恵器	平瓶	5	反			8.4	灰色	
74	SD09	鉄滓		100		4.4	5.8	2.1		
75	SD09	須恵器	坏蓋	5	反				灰白色	
76	SD09	須恵器	坏蓋	10	反			16	明青灰色	

表3 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	細別	残存率 (%)	反転 図化	器径 幅 (cm)	器高 長さ (cm)	口径 厚さ (cm)	色調	その他
77	SD09	須恵器	坏身	10	反			15.8	明青灰色	
78	SD09	須恵器	坏身	30	反				灰白色	底径11.2cm
79	SD09	須恵器	坏身	50			3.3	12.9	灰白色	底径7.7cm
80	SD09	須恵器	坏身	20	反				灰色	底径9.0cm
81	SD09	須恵器	長頸壺	30	反	20.8			褐灰色	
82	SD09	須恵器	長頸壺	20	反	15.9			灰白色	
83	SD09	須恵器	平瓶	20	反				明青灰色	底径11.3cm
84	SD09	須恵器	甕	15	反			20.2	灰色	
85	SD09	土師器	坏	10	反				橙色	底径12.4cm
86	SD09	土師器	甕	10	反			12	橙色	
87	SD09	土師器	甕	20	反			16.8	浅黄橙色	
88	SP43	鉄製品		30		1.4		0.3		鉄鍍の可能性
89	SP47	土師器	坏	5	反				淡い橙色	
90	SP47	被熱粘土塊				4.5	4.1	4	橙色	
91	SP47	被熱粘土塊				3.7	5.4	1.6	橙色	
92	SP47	被熱粘土塊				3.85	5.4	1.7	灰色	
93	SP47	被熱粘土塊				3.1	4.8	2.5	にぶい黄橙色	
94	SP47	被熱粘土塊				3.7	3.3	2.3	黄褐色	
95	SP47	被熱粘土塊				2.5	3	1.8	褐灰色	
96	SP80	須恵器	坏蓋	5	反				灰色	
97	SP80	土師器	甕	5	反			15.8	灰白色	
98	SP92	土師器	皿	30	反			15.7	黄橙色	
99	SP109	須恵器	坏身	50			3.45	13.2	灰白色	底径8.7cm
100	SP115	須恵器	坏身	70					灰色	底径10.7cm
101	SP138	土師器	坏	15	反			13.8	黄橙色	
102	SP161	鉄滓		100		3.4	3.7	2.1		
103	SX01混入	須恵器	坏蓋	15	反			15	灰白色	
104	SD01混入	土師器	皿	10	反		1.1	15	にぶい黄橙色	底径11.0cm
105	SD05	須恵器	坏身	5	反			12.4	灰白色	
106	5区遺構検出面	須恵器	広口壺	10	反			31.6	灰色	
107	4区遺構検出面	須恵器	坏身	15	反				灰色	底径9.5cm
108	1区検出面	須恵器	坏蓋	5	反			13.8	灰白色	
109	SB02 (SP60)	灰釉陶器	碗	35	反			9.6	灰白色	
110	SB02 (SP60)	土師器	甕	20	反			13	にぶい褐色	
111	SB02 (SP68)	土師器	坏	20	反		3.2	13	灰白色	底径7.2cm
112	SB02 (SP68)	土師器	坏	20	反		3	11.8	灰白色	底径6.0cm
113	SE01上層	灰釉陶器	碗	10	反				灰白色	
114	SE01上層	緑釉陶器	碗	15	反				オリーブ灰色	底径8.6cm
115	SE01中層	灰釉陶器	皿	15	反				灰白色	
116	SP45	緑釉陶器	碗	5					灰オリーブ色	
117	SP58	灰釉陶器	碗	20	反				灰白色	底径7.0cm
118	SP112	土師器	皿	20	反		1.8	9.8	灰白色	底径6.1cm
119	SP119	土師器	坏	90					灰白色	底径7.6cm
120	SP119	土師器	坏	30	反		4.5	14.8	灰白色	底径6.8cm
121	SP119	土師器	坏	30	反			14.8	灰白色	
122	SP119	灰釉陶器	長頸壺	10	反				灰白色	
123	SP133	灰釉陶器	小碗	25	反			7.6	灰白色	
124	SP135	土師器	皿	25	反			8.6	灰白色	
125	SP120	灰釉陶器	大碗	20	反		14.4	31.9	灰白色	底径14.4cm
126	SP121	土師器	坏	60			3.6	14.6	灰白色	底径4.3cm
127	SP121	灰釉陶器	碗	30	反			17.6	灰白色	
128	SD07	灰釉陶器	碗	10	反				灰白色	底径6.4cm
129	SX01	灰釉陶器	碗	30	反				灰白色	底径8.8cm
130	SH03混入	灰釉陶器	碗	10	反			13.6	灰色	
131	SX07混入	灰釉陶器	碗	10	反			13.4	灰白色	
132	SD09混入	灰釉陶器	碗	5	反			14	灰白色	
133	SD09混入	灰釉陶器	碗	10	反				灰白色	底径7.6cm
134	4区遺構検出面	灰釉陶器	碗	10	反				灰白色	底径6.5cm
135	4区遺構検出面	灰釉陶器	碗	20	反				灰白色	底径5.0cm
136	3区遺構検出面	灰釉陶器	碗	30	反				灰白色	底径6.2cm
137	4区遺構検出面	灰釉陶器	碗	20	反				灰白色	
138	1区遺構検出面	灰釉陶器	碗	20	反				灰白色	底径7.6cm

色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

圖 版

図版 1



1 1区全景（南から）



2 2区・3区全景（東から）



1 4区全景（西から）



2 5区全景（南から）

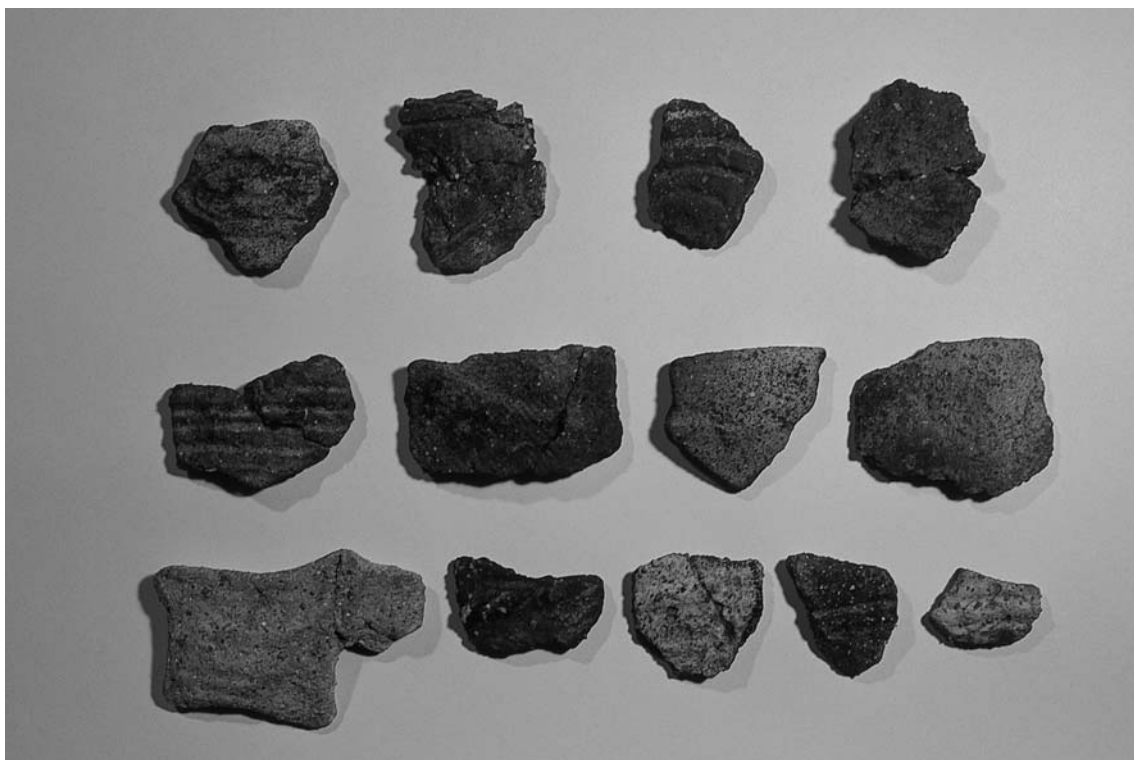
図版 3



1 5区全景（南から）



2 6区全景（西から）



1 出土縄文土器



2 出土石器

図版 5



1 SH01 堅穴建物（北東から）



2 SH04 堅穴建物（北東から）



1 SH03竪穴建物（北東から）



2 SH03竪穴建物遺物出土状態（南から）



3 SH03竪穴建物敷石（南から）

図版 7



1 SH05竪穴建物（南から）



2 SH05竪穴建物遺物出土状態（北東から）



3 SH05竪穴建物焼土（北東から）



1 SH06 竖穴建物（北西から）



2 SH07 竖穴建物（南から）

図版 9



1 SB01・05掘立柱建物、SA01柵（南西から）



2 SX03・04・05（西から）



1 SK05土坑（東から）



2 SP47土師器焼成土坑（西から）



3 SP109小穴（北から）



4 SP115小穴（西から）

図版11



SD09区画溝（南から）



SD09区画溝（北から）

図版13



SD09区画溝（南から）



1 調査風景



2 調査風景



1 SH01竖穴建物出土土師器甕



2 SB01 (SP39) 掘立柱建物柱穴出土須恵器坏蓋



3 SK05出土土師器皿



4 SB03 (SP160) 掘立柱建物柱穴出土鉄製品



5 SB03 (SP179) 掘立柱建物柱穴出土鉄製品



1 SP109小穴出土須恵器坏身



2 SP115小穴出土須恵器坏身



3 SD09区画溝出土鉄滓



4 SB03 (SP152) 掘立柱建物柱穴出土鉄滓



5 SP161小穴出土鉄滓

图版17



1 SP47土師器燒成土坑出土被熱粘土塊



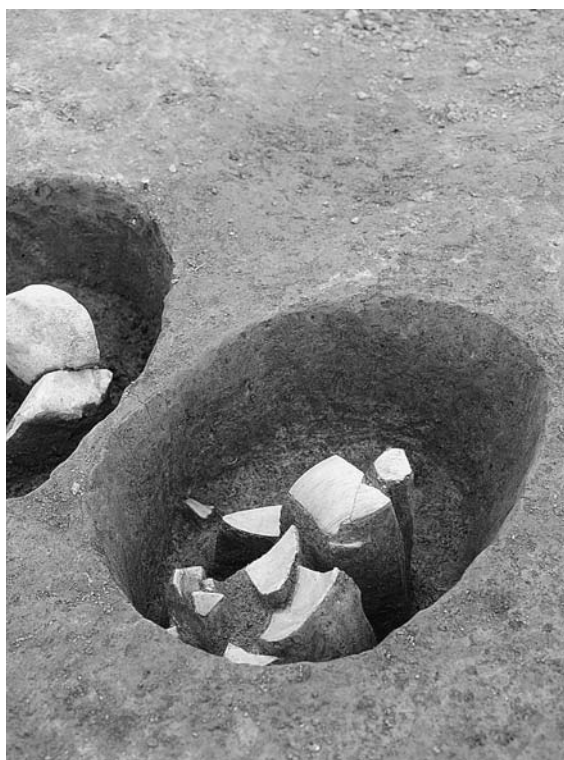
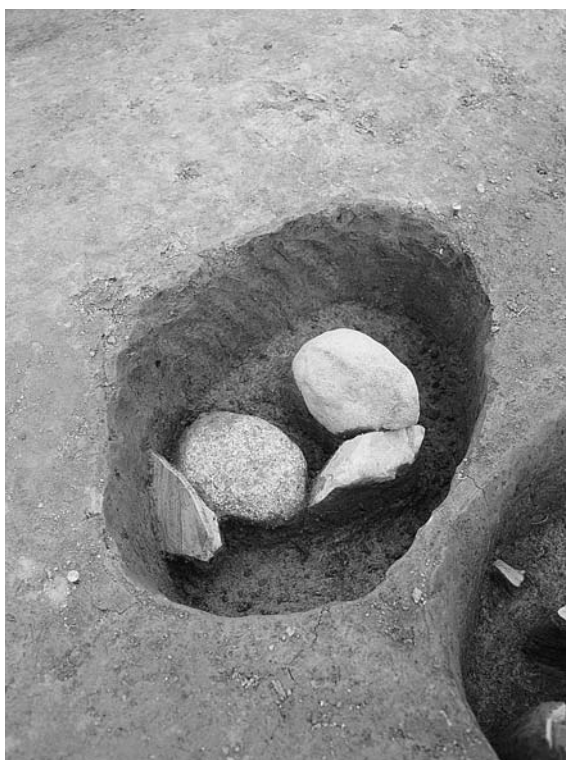
2 SX07豎穴建物出土平瓦



3 SP43小穴出土鉄製品



1 SB02 (SP67) 掘立柱建物柱穴 (南から) 2 SB02 (SP68) 掘立柱建物柱穴 (西から)



3 SP120 (南西から)

4 SP121 (南西から)

図版19



1 SE01井戸（東から）



2 SP119（南から）



3 SX01畦畔灰釉陶器碗出土状態（東から）



1 調査風景



2 調査風景

図版21



1 SB02 (SP67) 出土土師器坏



2 SB02 (SP68) 出土土師器甕



3 SE01井戸出土緑釉陶器碗



4 SP45出土緑釉陶器碗



1 SP119出土灰釉陶器碗・土師器坏



2 SP120出土灰釉陶器大碗



3 SP121出土土師器坏・灰釉陶器碗

報告書抄録

ふりがな	ちょうだいせきさん							
書名	丁田遺跡Ⅲ							
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	57							
編著者名	戸塚洋輔							
編集機関	彦根市教育委員会文化財課							
所在地	〒522-0001滋賀県彦根市尾末町1番38号 TEL0749-26-5833							
発行年月日	20140324							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ちょうだいせき 丁田遺跡	ひこねし 彦根市 たかみやちょう 高宮町	25202	139	35度 24分 5秒	136度 25分 20秒	1,324㎡	20121205 ～ 20130328	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
丁田遺跡	集落	縄文時代中期末 奈良時代～ 平安時代前期 平安時代	竪穴建物 土坑 竪穴建物 掘立柱建物 柵 土坑 掘立柱建物 畦畔 畝状遺構 井戸	縄文土器 石器 土師器 須恵器 鉄製品 鉄滓 土師器 灰釉陶器	犬上川流域における縄文時代中期末の集落 奈良時代から平安時代前期の集落 高宮郷家との関係が推定される豪族居宅			

彦根市埋蔵文化財調査報告書第57集

丁田遺跡Ⅲ

—宅地造成工事に伴う発掘調査—

平成26年(2014年)3月24日発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

滋賀県彦根市尾末町1番38号

TEL0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地